山口県埋蔵文化財センター調査報告　第64集

真尾猪の山遺跡Ⅱ

（まなおいやま）

２００８

財団法人　山口県ひとづくり財団

山口県埋蔵文化財センター

序

本書は、平成18年度に引き続き農免農道整備事業牟礼小野地区建設工事に伴い山口県山口農林事務所からの委託を受けて、山口県ひとづくり財団が実施した、防府市大字真尾地内に所在する真尾猪の山遺跡の発掘調査結果をまとめたものです。

真尾猪の山遺跡地区の所在する佐波川中流域では、過去考古学的な調査が十分行われていませんでしたが、近年の発掘調査によって貴重な遺跡が見つかっています。

当財団ではこれまで平成16年度の井ノ山遺跡、平成18年度の真尾猪の山遺跡（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ地区）と隣接する地区の調査を行ってまいりました。その結果、弥生時代を中心にこの地に暮らした人々の遺構や遺物が数多く出土しました。

今年度の調査では、弥生時代の高地性集落跡や古代の遺構や遺物が数多く見つかり、丘陵の頂上部から谷間にかけての斜面を整地して生活を営んでいたことがわかりました。この調査で得た成果は、当地域の集落の移り変わりや性格を考える上で大変貴重な資料となるものであります。

このような調査記録を収録した本書が、学術研究のみでなく、文化財への理解や郷土の歴史を学ぶ資料として、幅広く活用されることを願うものであります。

おわりに、当発掘調査の実施並びに報告書の作成に当たってご協力いただいた関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成20年３月

財団法人　山口県ひとづくり財団
理事長　瀧　井　　勇

例　　言

1　本書は、平成19年度に実施した、真尾猪の山遺跡（山口県防府市大字真尾地内）の発掘調査報告である。

2　調査は、農免農道整備事業牟礼小野２期地区建設工事に伴い、財団法人山口県ひとづくり財団が山口県山口農林事務所の委託を受けて実施したものである。

3　調査組織は次のとおりである。

調査主体	財団法人山口県ひとづくり財団　山口県埋蔵文化財センター	
調査担当	文化財専門員	谷口　哲一
	〃	吉中　雅信
	〃	川本　晃
	〃	岩田　謙治
	調　査　員	山本　寛子

4　調査にあたっては、山口県教育委員会、防府市教育委員会、山口県山口農林事務所並びに地元関係各位から協力・援助を得た。

5　本書の第１図は国土地理院発行の２万5,000分の１地形図「矢田」を複製使用した。また第２図調査区設定図は、山口農林事務所から提供された地形図をもとに作成した。

6　石材の鑑定については、山口県立山口博物館　亀谷　敦氏に依頼した。なお、石材鑑定は表面観察によるものである。

7　本書に使用した方位は、国土座標（世界測地系）で示し、標高は海抜標高（m）である。

8　本書に使用した土色の色調表記は、農林省農林水産技術会議事務局（監修）『新版標準土色帖』Munsell方式に従った。

9　図版中の遺物番号は、実測図の遺物番号と対応する。また遺物実測図において、断面黒塗りは須恵器をあらわす。

10　本書で使用した遺構略号は、次のとおりである。

ＳＢ：竪穴住居跡・建物跡　　ＳＫ：土坑　　ＳＤ：溝状遺構　　ＳＰ：柱穴

ＳＸ：性格不明遺構

11　本書の挿図・写真は、谷口・吉中・川本・岩田・山本が分担して作成した。各章の執筆担当は次のとおりで、編集は谷口が行った。

Ⅰ　岩田、Ⅱ　吉中、Ⅲ－１　吉中・川本・岩田、Ⅲ－２　谷口・山本、Ⅳ　吉中・谷口

本　文　目　次

Ⅰ　遺跡の位置と環境 …… 1

Ⅱ　調査の経過 …… 3

Ⅲ　調査の成果 …… 11
　1　遺　構……11
　　（1）Ⅳ地区 ……11
　　（2）Ⅴ地区 ……54
　2　遺　物……59
　　（1）弥生時代の土器 ……59
　　（2）古代以降の土器 ……83
　　（3）土製品 ……86
　　（4）石器 ……86
　　（5）鉄器 ……91
Ⅳ　まとめ …… 92

挿　図　目　次

第１図　遺跡の位置と周辺の主な遺跡……１
第２図　調査区設定図……５・６
第３図　Ⅳ地区遺構配置図……７・８
第４図　Ⅳ地区断面図……９・10
第５図　Ⅳ地区ＳＢ実測図（１）……12
第６図　Ⅳ地区ＳＢ実測図（２）……13
第７図　Ⅳ地区ＳＢ実測図（３）……14
第８図　Ⅳ地区ＳＢ実測図（４）……15
第９図　Ⅳ地区ＳＢ実測図（５）……17
第10図　Ⅳ地区ＳＢ実測図（６）……18
第11図　Ⅳ地区ＳＢ７断面図……18
第12図　Ⅳ地区ＳＢ実測図（７）……19
第13図　Ⅳ地区ＳＫ実測図（１）……23
第14図　Ⅳ地区ＳＫ実測図（２）……24
第15図　Ⅳ地区ＳＫ実測図（３）……25
第16図　Ⅳ地区ＳＫ実測図（４）……26
第17図　Ⅳ地区ＳＫ実測図（５）……27
第18図　Ⅳ地区ＳＫ実測図（６）……27
第19図　Ⅳ地区ＳＫ実測図（７）……29
第20図　Ⅳ地区ＳＫ実測図（８）……31
第21図　Ⅳ地区ＳＫ実測図（９）……32
第22図　Ⅳ地区ＳＫ実測図（10）……33
第23図　Ⅳ地区ＳＫ実測図（11）……34
第24図　Ⅳ地区ＳＫ実測図（12）……35
第25図　Ⅳ地区ＳＫ実測図（13）……37
第26図　Ⅳ地区ＳＫ実測図（14）……39
第27図　Ⅳ地区ＳＫ実測図（15）……40
第28図　Ⅳ地区ＳＫ実測図（16）……40
第29図　Ⅳ地区ＳＫ実測図（17）……41
第30図　Ⅳ地区ＳＸ実測図（１）……42
第31図　Ⅳ地区ＳＸ実測図（２）……42
第32図　Ⅳ地区ＳＸ実測図（３）……42
第33図　Ⅳ地区ＳＤ実測図（１）……43
第34図　Ⅳ地区ＳＤ実測図（２）……43
第35図　Ⅳ地区ＳＤ実測図（３）……44
第36図　Ⅳ地区階段状遺構実測図……45
第37図　Ⅳ地区段状遺構実測図（１）……47・48
第38図　Ⅳ地区段状遺構実測図（２）……49・50
第39図　Ⅳ地区段状遺構実測図（３）……51
第40図　Ⅳ地区かまど跡実測図……52
第41図　Ⅳ地区焼土坑（ＳＫ119）実測図……52
第42図　Ⅳ地区経塚実測図……53
第43図　Ⅴ地区遺構配置図……55
第44図　Ⅴ地区断面図……56
第45図　Ⅴ地区ＳＫ実測図（１）……57
第46図　Ⅴ地区ＳＫ実測図（２）……58
第47図　Ⅳ地区出土土器実測図（１）……59
第48図　Ⅳ地区出土土器実測図（２）……60
第49図　Ⅳ地区出土土器実測図（３）……61
第50図　Ⅳ地区出土土器実測図（４）……63
第51図　Ⅳ地区出土土器実測図（５）……64
第52図　Ⅳ地区出土土器実測図（６）……65
第53図　Ⅳ地区出土土器実測図（７）……66
第54図　Ⅳ地区出土土器実測図（８）……67
第55図　Ⅳ地区出土土器実測図（９）……68
第56図　Ⅳ地区出土土器実測図（10）……69
第57図　Ⅳ地区出土土器実測図（11）……71
第58図　Ⅳ地区出土土器実測図（12）……72
第59図　Ⅳ地区出土土器実測図（13）……73
第60図　Ⅳ地区出土土器実測図（14）……74
第61図　Ⅳ地区出土土器実測図（15）……75
第62図　Ⅳ地区出土土器実測図（16）……76
第63図　Ⅳ地区出土土器実測図（17）……77
第64図　Ⅳ地区出土土器実測図（18）……78
第65図　Ⅳ地区出土土器実測図（19）……79
第66図　Ⅳ地区出土土器実測図（20）……80
第67図　Ⅴ地区出土土器実測図（１）……81
第68図　Ⅴ地区出土土器実測図（２）……82
第69図　Ⅳ地区出土土器実測図（21）……83
第70図　Ⅳ地区出土土器実測図（22）……84
第71図　Ⅳ地区出土土器実測図（23）……84
第72図　Ⅴ地区出土土器実測図（３）……85
第73図　Ⅳ地区出土土器実測図（24）……85
第74図　出土土製品実測図……85
第75図　出土石器実測図（１）……86
第76図　出土石器実測図（２）……87
第77図　出土石器実測図（３）……88
第78図　出土石器実測図（４）……89
第79図　出土石器実測図（５）……90
第80図　出土鉄器実測図……90

図　版　目　次

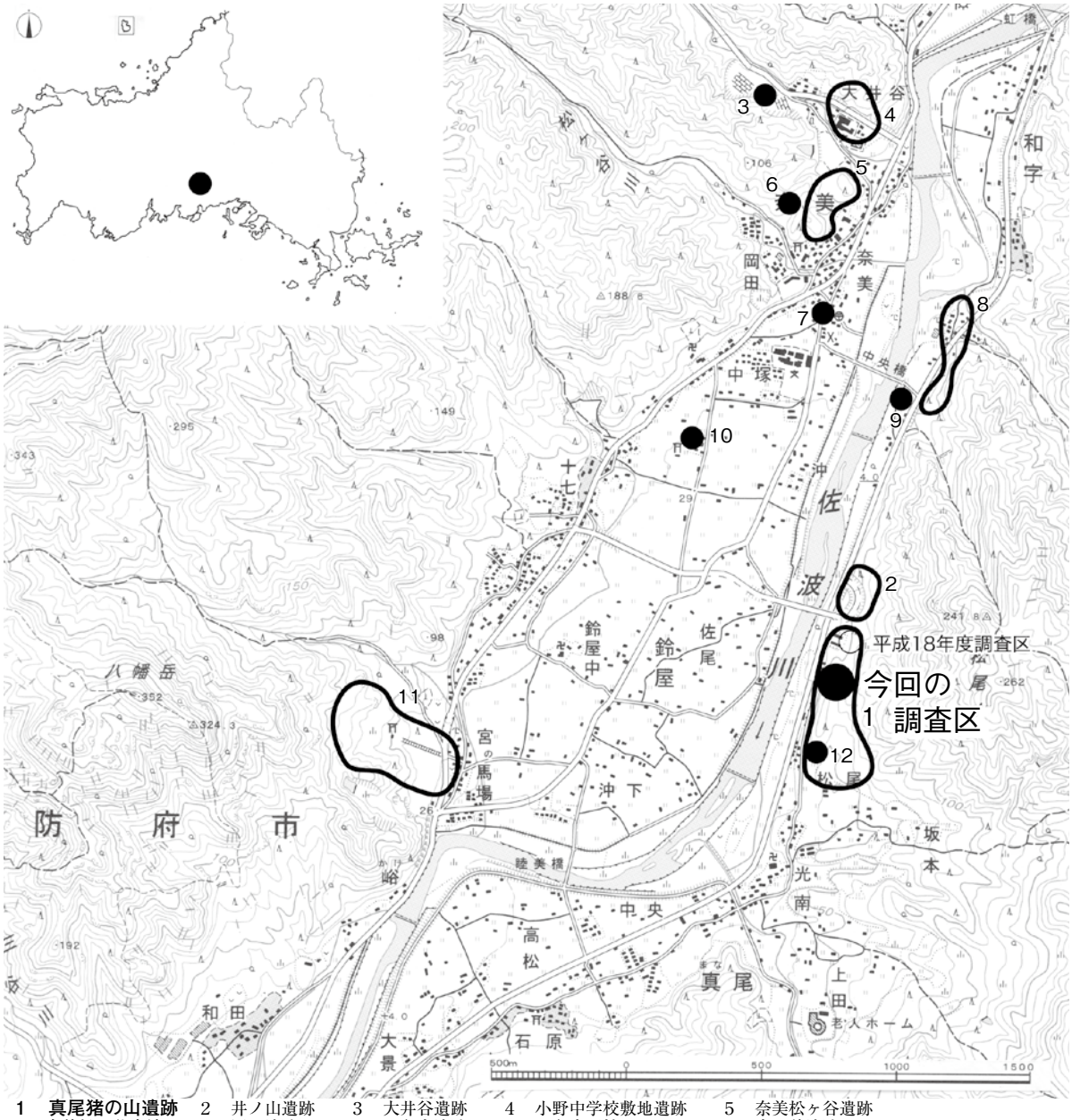
図版１　遺跡遠景（南から）
図版２　上：遺跡遠景（南東から）　下：調査区全景（東から）
図版３　上：Ⅳ地区（東から）　下：Ⅳ地区南半（東から）
図版４　上：Ⅳ地区中央部（南東から）　下：Ⅳ地区北半（南東から）
図版５　上：Ｖ－１地区全景（西から）　下：Ｖ－２地区全景（西から）
図版６　上：ＳＢ２完掘状況（北から）　下：ＳＢ３完掘状況（北東から）
図版７　上：ＳＢ４炭化材出土状況（東から）　下：ＳＢ４完掘状況（東から）
図版８　上：ＳＢ10完掘状況（南西から ）　下：ＳＢ９完掘状況（南東から）
図版９　左１：ＳＢ１完掘状況　（西から）　右１：ＳＢ５完掘状況（南東から）
左２：ＳＢ11完掘状況（南東から）　右２：ＳＢ６・７、ＳＸ118完掘状況（南東から）
左３：ＳＢ６・７、ＳＸ118完掘状況（南西から）　右３：ＳＢ７出土土器（西から）
左４：ＳＢ８完掘状況（西から）　右４：ＳＢ８出土土器（南から）
図版10　上：ＳＫ51完掘状況（東から）　下：ＳＫ33土器出土状況（南西から）
図版11　上：ＳＫ89完掘状況（北東から）
中左：ＳＫ89土器出土状況（北東から）　中右：ＳＫ89壁面（北東から）
下左：ＳＫ10完掘状況（南から）　下右：ＳＫ10炭化種子出土状況（南から）
図版12　上：ＳＫ99完掘状況（北東から）
中左：ＳＫ99土層断面（北東から）　中右：ＳＫ99炭化米出土状況（西から）
下左：ＳＫ88完掘状況（西から）　下右：ＳＫ88土器・炭化種子出土状況（西から）
図版13　左１：ＳＫ93土器出土状況（南から）　右１：ＳＫ101完掘状況（北西から）
左２：ＳＫ105土器出土状況（北東から）　右２：ＳＫ81･82完掘状況（北東から）
左３：ＳＫ19完掘状況（南から）　右３：ＳＫ98完掘状況（南東から）
左４：ＳＫ74完掘状況（南東から）　右４：ＳＫ100完掘状況（南から）
図版14　左１：ＳＫ20完掘状況（南西から）　右１：ＳＫ86土器出土状況（南東から）
左２：ＳＫ92完掘状況（南から）　右２：ＳＫ24･25完掘状況（北から）
左３：ＳＫ11･18完掘状況（南から）　右３：ＳＫ28土器出土状況（東から）
左４：ＳＫ12･26完掘状況（東から）　右４：ＳＫ21･52土器出土状況（西から）
図版15　左１：ＳＫ40土器出土状況（南西から）　右１：ＳＫ22完掘状況（南西から）
左２：ＳＫ１土器出土状況（南から）　右２：ＳＫ33完掘状況（北東から）
左３：ＳＫ23完掘状況（南東から）　右３：ＳＫ112土器出土状況（北東から）
左４：ＳＫ83完掘状況（東から）　右４：ＳＫ56完掘状況（南西から）
図版16　左１：ＳＫ62完掘状況（南西から）　右１：ＳＫ２土器出土状況（南東から）
左２：ＳＫ67完掘状況（南から）　右２：ＳＫ３土器出土状況（南東から）
左３：ＳＫ84･85完掘状況（南東から）　右３：ＳＫ77完掘状況（東から）
左４：ＳＫ87完掘状況（東から）　右４：ＳＫ43完掘状況（南西から）
図版17　左１：ＳＫ４土器出土状況（北西から）　右１：ＳＫ57完掘状況（北東から）
左２：ＳＫ42完掘状況（西から）　右２：ＳＫ41完掘状況（南東から）
左３：ＳＫ66完掘状況（南東から）　右３：ＳＫ95完掘状況（南東から）
左４：ＳＫ103完掘状況（北西から）　右４：ＳＫ97完掘状況（北西から）
図版18　左１：ＳＫ96完掘状況（北東から）　右１：ＳＫ64土器出土状況（北西から）
左２：ＳＫ115完掘状況（西から）　右２：ＳＫ8･16完掘状況（南東から）

左３：ＳＫ９完掘状況（南東から）　右３：ＳＫ110完掘状況（北から）
左４：ＳＫ111完掘状況（北から）　右４：ＳＫ116土器出土状況（南東から）
図版19　左１：ＳＫ５完掘状況（南西から）　右１：ＳＫ69完掘状況（南から）
左２：ＳＫ59土器出土状況（東から）　右２：ＳＫ48土器出土状況（南から）
左３：ＳＫ50完掘状況（北東から）　右３：ＳＫ53完掘状況（東から）
左４：ＳＫ70土器出土状況（東から）　右４：ＳＫ75完掘状況（北から）
図版20　左１：ＳＫ15完掘状況（南から）　右１：ＳＫ61完掘状況（南西から）
左２：ＳＫ79完掘状況（北東から）　右２：ＳＫ80完掘状況（南東から）
左３：ＳＤ１・ＳＫ36完掘状況（南から）　右３：ＳＤ２完掘状況（南から）
左４：ＳＤ３・４・５完掘状況（東から）　右４：ＳＤ６完掘状況（北東から）
図版21　上：階段状遺構完掘状況（北東から）
中左：階段状遺構完掘状況（南から）　中右：ＳＢ11西側階段状遺構完掘状況（東から）
下左：ＳＸ31完掘状況（東から）　下右：ＳＸ117完掘状況（北東から）
図版22　左１：ＳＸ６・７土器出土状況（北東から）　右１：ＳＸ７土器出土状況（東から）
左２：ＳＸ６完掘状況（北東から）　右２：ＳＫ119完掘状況（東から）
左３：かまど跡（南から）　右３：ＳＰ36内焼土（北から）
左４：焼土跡１（南から）　右４：焼土跡２（東から）
図版23　上：７～12号段状遺構（北東から）　下：５号段状遺構（北東から）
図版24　上：１・２・６号段状遺構（南西から）　下：ＳＢ２・３、ＳＤ６周辺（東から）
図版25　左１：１号段状遺構（北東から）　右１：４・５号段状遺構（南西から）
左２：５号段状遺構（東から）　右２：８号段状遺構（南西から）
左３：７号段状遺構（北東から）　右３：12号段状遺構（北東から）
左４：10号段状遺構（北東から）　右４：10号段状遺構土器出土状況（西から）
図版26　上：経塚検出状況②（南東から）
中左：経塚検出状況①（南から）　中右：経塚検出状況③（南東から）
下左：ＳＰ１検出状況（北から）　下右：土師器出土状況（南東から）
図版27　左１：Ｖ－１地区（西から）　右１：Ｖ－２地区（北西から）
左２：１号段状遺構（北から）　右２：２号段状遺構（南東から）
左３：３号段状遺構（北西から）　右３：４号段状遺構（北西から）
左４：ＳＫ１完掘状況（西から）　右４：ＳＫ２完掘状況（南西から）
図版28　左１：ＳＫ３遺物出土状況（東から）　右１：ＳＫ４完掘状況（南から）
左２：ＳＫ５土器出土状況（北西から）　右２：ＳＫ６土器出土状況（北西から）
左３：ＳＫ６土層断面（北西から）　右３：ＳＫ６土器出土状況（南東から）
左４：ＳＫ７完掘状況（南西から）　右４：ＳＫ８完掘状況（西から）
図版29　出土土器①　図版30　出土土器②
図版31　出土土器③　図版32　出土土器④
図版33　出土土器⑤　図版34　出土土器⑥
図版35　出土土器⑦　図版36　出土土器⑧
図版37　出土土器⑨　図版38　出土土器⑩
図版39　出土土器⑪　図版40　出土土器⑫
図版41　出土土器⑬　図版42　出土土器⑭
図版43　出土土器⑮　図版44　出土土器⑯・土製品
図版45　出土石器①　図版46　出土石器②
図版47　出土石器③・鉄器　図版48　炭化種子・炭化米

Ⅰ　遺跡の位置と環境

1　地理的環境（第１図）

真尾猪の山遺跡は、防府市の大字真尾地内に所在する。防府市は山口県の中央部に位置し、県下最大の沖積平野をもつ。その平野を作り出した佐波川は、その中流域において狭いところで数百ｍ、広いところで1.5 ㎞程の幅を持つ谷底平野を形成している。平野周辺部は風化の激しい花崗岩質であることから、崩落堆積や浸食作用、扇状地の形成などにより、ゆるやかな斜面や丘陵地が形成されている。佐波川左岸においても松尾山から川に向かっていくつもの丘陵とそれに挟まれた谷があり、そのうちの比較的ゆるやかな微高地と丘陵部に真尾猪の山遺跡は広がっている。今回の調査対象地は、遺跡の範囲のうち、佐波川が長い年月をかけて作り出したこの谷底平野を一望することができる標高約80ｍの独立丘陵である。



1　**真尾猪の山遺跡**　2　井ノ山遺跡　3　大井谷遺跡　4　小野中学校敷地遺跡　5　奈美松ヶ谷遺跡
6　奈美松ヶ谷古墳　7　岡田遺跡　8　下和字遺跡　9　下和字石棺　10　宮の前遺跡
11　鈴屋八幡宮遺跡　12　井手山古墳群

第１図　遺跡の位置と周辺の主な遺跡

遺跡のある当地域は、小野地区と呼ばれている。東の松尾山、西の八幡岳、北の山口尾、そして「真尾富士」と呼ばれる南に位置する矢筈ヶ岳の美しく雄大な裾野に囲まれた比較的狭い平野を指している。中流域で最も広い平野部であり、防府平野へ向かう流路と、矢筈ケ岳東裾部を通り牟礼地域へ抜ける峠道の、地形的分岐点にあたる。そのため交通の要衝として佐波川流域では重要な位置を占めていたが、洪水や土砂崩れなどの災害を引き起こす「暴れ川」であったため、小野地区の人々は、川からの恵みを受けながらも、災害に立ち向かいながらそのしるしを大地に刻んで生きてきた。

２　歴史的環境

小野地区において、生活の痕跡を確認できるのは現在のところ縄文時代からである。佐波川右岸の小野中学校敷地遺跡で早期の押型文土器が、井ノ山遺跡では草創期の有舌尖頭器が、そして、18年度の真尾猪の山遺跡調査区では早期・晩期の土器が出土し、この地域に早い時期から人々が住んでいたことが分かり、生活に適した土地であることがうかがえる。

稲作が始まり定住・人口増加が始まる弥生時代になると、居住範囲が急速に広がっていく。主な遺跡としては、真尾猪の山遺跡、井ノ山遺跡、下和字遺跡、佐波川を挟んで大井谷遺跡、奈美松ヶ谷遺跡、岡田遺跡、宮の前遺跡、鈴屋八幡宮遺跡がある。これらの遺跡の分布は、谷底平野部にはほとんどなく、佐波川の氾濫を避けるように周辺の丘陵地に立地していることが指摘できる。このうち井ノ山遺跡では前期末から中期前半の青銅製の鑿が、平成18年度真尾猪の山遺跡Ⅰ地区からは中期後半から末の鉄器が発見された。当時において金属器の所持は中心的な集落であることを示しており、井ノ山、真尾猪の山さらには弥生時代から古墳時代初頭の石棺墓群である下和字遺跡を含めた佐波川中流域左岸一帯において、拠点的な集落が存在したと想像される。

さらに、弥生時代中期には防府平野側でみられる高地性集落も、当地域の真尾猪の山遺跡Ⅳ地区に出現する。高地性集落は小高い丘の上に集落をつくるもので、防府平野では青少年科学館「ソラール」周辺の井上山遺跡、佐波川を挟んでそれと向かい合う大崎遺跡がその代表である。井上山遺跡は、弥生時代中期から後期に営まれた瀬戸内海沿岸の典型的な高地性集落で、桑山西麓の標高50ｍに位置する。分銅形土製品や、板状鉄斧をはじめとする鉄器が出土している。一方、同時期の大崎遺跡は環濠を有する集落跡で、西目山裾部の標高60ｍに位置する。高地性集落の性格は、ムラ同士の争いなど社会的緊張状態における防御的集落とみられている。真尾猪の山遺跡Ⅳ地区もその立地や鉄器の出土から同様な遺跡であり、その成立には防府平野側の社会状況が大きく関連しているのであろう。

古墳時代以降中世にかけては、集落遺跡や遺物の分布は少なく、埋葬遺跡では右岸の奈美松ヶ谷古墳及び左岸の井手山古墳群が知られている程度である。このことは古墳時代以後も、佐波川の流路変更が頻繁にあり平地の氾濫原化が理由として考えられ、それに伴う堆積により平地部で中世遺物が散見されている。なお、防長風土注進案中の寺伝によれば、本遺跡の背後にある松尾山には、桓武天皇時代に創建され、戦国期に焼失したとされる松尾山天皇院光明寺があり、山腹には12の坊堂をもつ規模の大きな寺院であったとされている。調査でも同時代の遺物が認められるが、明確な遺構は未だ確認されていない。近代以降は大きな開発も少なく、今なお多くの遺跡が眠る古の地区である。

〈引用・参考文献〉　防府市史編纂委員会『防府市史　資料Ⅱ　考古資料・文化財編』、『防府市史　通史Ⅰ　原始・古代・中世』2004年。

山口県文書館編『防長風土注進案』第10巻　三田尻宰判下　1965年。

小野郷土史研究会『ふるさと小野』創刊号　1985年。

Ⅱ　調査の経過

１　調査に至る経緯

農免農道整備事業牟礼小野地区建設工事予定地の南側延長に伴い、平成17、18年度に山口県教育委員会による試掘調査が行われた結果、道路建設予定地内に埋蔵文化財が埋存していることが明らかとなった。これを受けて、山口県教育委員会と山口県山口農林事務所などの関係機関による協議の結果、施工予定範囲内での発掘調査が必要であるという判断がなされ、平成18年度には5,600㎡（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ地区）について、財団法人山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した。調査では、弥生時代中期を中心とする遺構や遺物が出土した。平成19年度は、平成18年度に引き続いて工事路線内で埋蔵文化財の埋存が確認されている4,000㎡（Ⅳ・Ⅴ地区）について、山口農林事務所の委託を受け当センターが引き続いて発掘調査を実施することとなった。

調査にあたって遺跡名は、山口県教育委員会が作成した山口県文化財地図情報システムの埋蔵文化財データによると、今年度調査区も埋蔵文化財包蔵地「真尾猪の山遺跡」の範囲内であることから、同じ遺跡名とした。また調査区については、昨年度調査区であるⅢ地区に隣接する丘陵部をⅣ地区とし、これと谷を隔てた東側斜面の調査区を北から順にⅤ－１地区・Ⅴ－２地区とした（第２図）。

なお調査報告書については、平成18年度の調査成果についてはすでに『真尾猪の山遺跡』（山口県埋蔵文化財センター調査報告第62集）として刊行されていることから、平成19年度の調査成果を『真尾猪の山遺跡Ⅱ』としてここに報告する。

２　調査の概要

発掘調査を始めるにあたっては、４月から調査区の現況確認を行った上で関係機関との打ち合わせを行うとともに、近隣の小中学校・警察署・消防署等に安全確保のための理解と協力を要請した。

調査区内はすでに18年度末までに立木の伐採・搬出が終っており、作業員による作業を行う前に調査区外の急斜面との境に杭を打ち、ロープを張るなど転落事故防止の措置を行った。調査区内においても、斜面の上がり下がりに使えるような簡易な手すりを設置し、斜面での作業で特に危険な箇所には昇降部分を設けるなど安全に作業ができるように心がけた。

現地調査は、６月初旬から開始し、最初に各地区にトレンチを設定して作業員による掘込みを行った。急斜面での掘込みは多くの時間を要したが、設定した計10ヶ所のトレンチすべてから遺構や遺物が出土した。Ⅳ地区頂上部からは、花崗岩風化土の地山面に竪穴住居跡や土坑等の遺構を確認することができた。Ⅳ・Ⅴ地区の斜面からは意図的に掘削・整地をして平坦面をつくり出した箇所が確認され、そこからも多くの土坑や遺物を確認した。

トレンチの試掘成果を基に、表土から遺構面まで浅いⅣ地区頂上部は人力で、それ以外のⅣ地区・Ⅴ地区の斜面は主に重機によって表土除去を行うこととなった。調査区周辺に廃土場が確保できず、路線内に廃土を仮置きする方法をとったが、廃土運搬の関係などから廃土場が制約されてしまい、作業にあたっては多くの労力を要することとなってしまった。しかし、調査期間中は幸いにも台風などによる調査区内への被害もなく、天候にも恵まれたこともあり発掘作業を順調に進めることができた。

８月中旬に入り、Ⅳ地区頂上部の表土除去が終了した範囲から順次遺構検出を行っていった。その結果、

調査区全域から遺構を確認することができ、弥生土器を中心とする遺物が多数出土した。特に、Ⅳ地区の頂上部には弥生時代の遺構群に加えて、古代の遺構も分布していることがわかった。このことから調査区全体について弥生時代遺構のみではなく、古代の遺構についても注意を払いながら遺構検出を行っていった。遺構検出の結果、Ⅳ地区の頂上部全体、さらには斜面でも竪穴住居跡、土坑、溝状遺構、段状遺構、経塚、かまど跡等の弥生時代および古代の遺構が確認され、遺構の密度が高いことが判明した。これに対してⅤ地区は調査区が狭い斜面であることもあってⅣ地区に比べると遺構の密度は低かったが、弥生土器を中心とした遺物が出土し、段状遺構や土坑が見つかった。

８月下旬に国土座標杭を設置した後、光波距離計による測量などによって遺構配置図を作成し、遺構の分布や数を確認し、それを基に今後の掘込みの計画を検討した。遺構掘り込みは、まず遺構が多く検出されているⅣ地区南側頂上部から、竪穴住居跡など大型の遺構から優先して掘込みを行った。その後、Ⅳ地区の進捗をみてⅤ地区の遺構の掘込みを順次進めていった。掘込みを進める中で、Ⅳ地区の土坑内から炭化種子や炭化米が出土するなど今年度の調査区を特徴づける遺構が次々と現れてきた。これと並行して遺構の個別実測や写真撮影など遺跡の記録作業も行っていった。この間、大雨による土砂崩落や調査区外への濁水流出を防止する為に、防護柵、シートによる養生、濁水排水パイプなどを調査区内や隣接する廃土場に設置した。

しかし、掘込みが進むにつれて遺構の深さや数の多さから遺構から出る廃土の量が多くなったため、10月上旬には調査区の傍に仮置きしていた廃土を重機で路線内の廃土場まで移動するなどの残土処理を実施した。

10月上旬からは、遺構の個別実測や写真撮影など遺跡の記録作業を中心に調査を進めた。これらがほぼ終了した12月11日には、ラジコンヘリコプターによる遺跡の空中写真撮影及び写真測量を実施した。その後、写真測量の成果品などをもとに図面・写真等の整理や最終確認を行い、大型の土坑は安全のために一部埋め戻しや廃土場の養生などの安全対策作業を済ませ、12月27日に現地調査をすべて終了した。

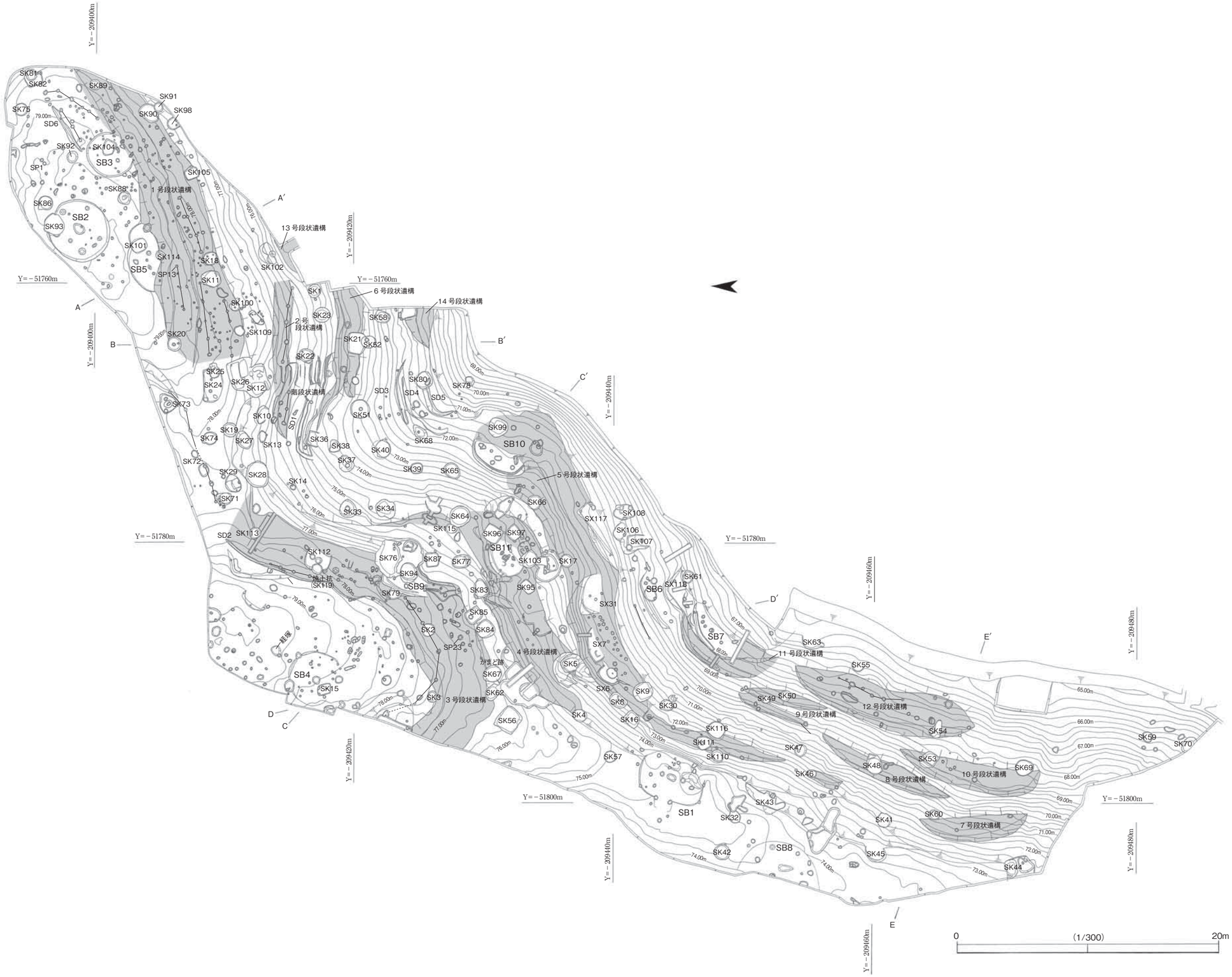
これらの調査期間中に、発掘調査の成果を広く一般に公開すべく12月10日に遺跡現地説明会を実施した結果、地元の住民を中心に約70名の見学者があった。多くの見学者は実際に発掘された遺構や遺物を間近に見学し、当時の生活に思いをはせる貴重な体験となった。また、現地説明会後も遺跡のことをきいて現地を訪れる見学者が多かったことからも、本遺跡への関心の高さがうかがえた。

これらの調査期間中には、地域の郷土学習の場として活用してもらうために10月１日には山口市立島地小学校の６年生８名による発掘体験学習や、６月から計３回にわたる防府市立小野小学校のクラブ活動で遺跡見学や土器の接合体験などの出前講座を実施した。

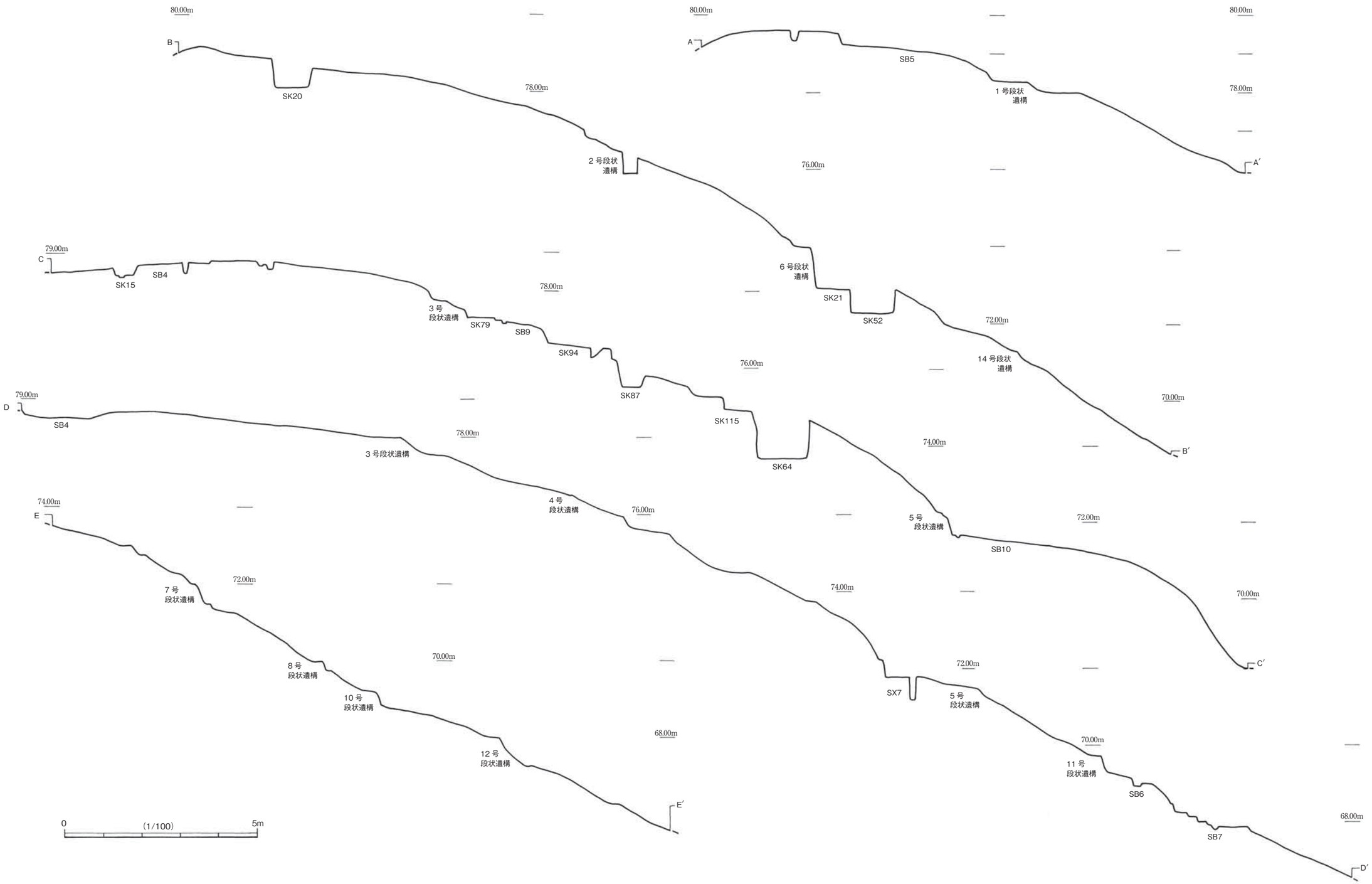
現地調査終了後は、山口県埋蔵文化財センターにおいて、調査資料の整理、出土遺物の復元と実測及び写真撮影を行い、この報告書を刊行するに至った。

X=−209200
X=−209400
X=−209600
Y=−51600
Y=−51800
N
Ⅰ地区
Ⅱ-1地区
Ⅱ-2地区
Ⅲ地区
Ⅳ地区
Ⅴ-1地区
Ⅴ-2地区
0
(1/2,000)
200m

第２図　調査区設定図



第３図　Ⅳ地区遺構配置図


80.00m
B
SK20
78.00m
2 号段状
遺構
76.00m
80.00m
A
SB5
1 号段状
遺構
78.00m
A′
79.00m
C
SK15
SB4
78.00m
3 号
段状遺構
SK79
SB9
SK94
SK87
76.00m
SK115
SK64
6 号段状
遺構
SK21
SK52
72.00m
14 号段状
遺構
70.00m
B′
79.00m
D
SB4
78.00m
3 号段状遺構
4 号
段状遺構
76.00m
74.00m
5 号
段状遺構
SB10
72.00m
70.00m
C′
74.00m
E
72.00m
7 号
段状遺構
8 号
段状遺構
70.00m
10 号
段状遺構
12 号
段状遺構
68.00m
E′
74.00m
SX7
5 号
段状遺構
72.00m
70.00m
11 号
段状遺構
SB6
SB7
68.00m
D′
0
(1/100)
5m

第 4 図　IV 地区断面図

Ⅲ　調 査 の 成 果

１　遺　構

今年度調査区は、松尾山から佐波川に向かって張り出す丘陵のうち、標高約80ｍを頂部とする独立丘陵状の頂上部およびその東側斜面（Ⅳ地区）と、谷を挟んだ西側斜面（Ⅴ地区）である。基本層序は、花崗岩風化土の黄褐色砂質土で、これを地山として遺構が掘り込まれているが、斜面側は低位ほど地山流出土が堆積し、これを遺構面としている。またⅤ地区ではこれらの上に旧表土とみられる炭を含む褐色土が薄く堆積している範囲も確認された。以下地区ごとに主な遺構について解説する。

（１）Ⅳ地区（第３図）

Ⅳ地区は、馬背状の丘陵頂上から谷側斜面にかけて南北約100ｍ、東西約36ｍの範囲である。検出された遺構は、竪穴住居跡11棟、土坑113基、溝状遺構６条、段状遺構14基、階段状遺構、経塚、かまど跡、焼土坑、焼土跡、斜面を小規模に段カットした性格不明遺構が５基である。遺構は調査区全域に広がっており、急斜面にも段状遺構による平坦面の造成を基に遺構群が展開するのが特徴的である。以下、主な遺構について解説する。なお、遺構の場所については、丘陵頂上部では標高の最高点周辺（経塚、ＳＢ４周辺）を「頂上部中央」、以東を「頂上部東側」（ＳＢ２、３周辺）、以西を「頂上部西側」（ＳＢ１周辺）とする。斜面においては、頂上部中央から南東側へ延びる小さな尾根筋を境に、東から順に「谷部」、「頂上からの張り出し部」、「西側斜面」として標記した。

ア　竪穴住居跡（ＳＢ）

竪穴住居跡・建物跡は11棟検出され、古代とみられるＳＢ９以外は弥生時代中期に属する。

ＳＢ２（第５図　図版６）

頂上部東側では３棟の竪穴住居跡が検出され、その中でもっとも残存状態がよい。平面は円形で、長軸4.9ｍ、短軸4.55m。床面積は15.3㎡である。床面はほぼ平坦で西側の壁の残りがよく、42㎝を測り、やや外傾して立ち上がる。周溝は検出されなかった。主柱穴は５本で、等間隔で住居内を円形に巡る。規模は径30～50㎝、深さは最大で59㎝。住居の中央には長軸100㎝、短軸78㎝、深さ20㎝の中央土坑が位置し、弥生土器の壺（６）が出土した。住居西側で炭化材、焼土を含む埋土があり、その上を覆うように住居全体に黄橙色砂質土が堆積することから、焼失住居を埋め戻した可能性がある。また住居周囲には十数個の小さな柱穴がめぐることから、屋根の支柱とみられる。出土遺物は弥生土器（６・７）、鉄器（329）、剥片が出土した。なおＳＢ２はＳＫ93と重複しているが、その前後関係は不明である。そのためＳＫ93上部付近から出土した紡錘車（300）については、その帰属は明らかでない。

ＳＢ３（第６図　図版６）

頂上部東側で、ＳＢ２と隣接するように位置する。南側の壁は流失している。北側壁面は最大27㎝を測り、その立ち上がりはゆるやかで、底面は平坦で南側に傾斜する。平面形は円形で、長軸3.63ｍ、短軸3.33ｍ、床面積は推定8.9㎡で、比較的小さな竪穴住居跡である。主柱穴は２本で、その規模は径30～40㎝、深さは50～60 ㎝である。ＳＢ３はＳＫ104 と重複してるが、土層断面の観察からＳＫ104 の方が新しいと判断される。ＳＢ２同様、周囲には小さな柱穴がめぐり、支柱であったとみられる。出土遺物は弥生土器片が少量出土した。

ＳＢ５（第６図　図版９）

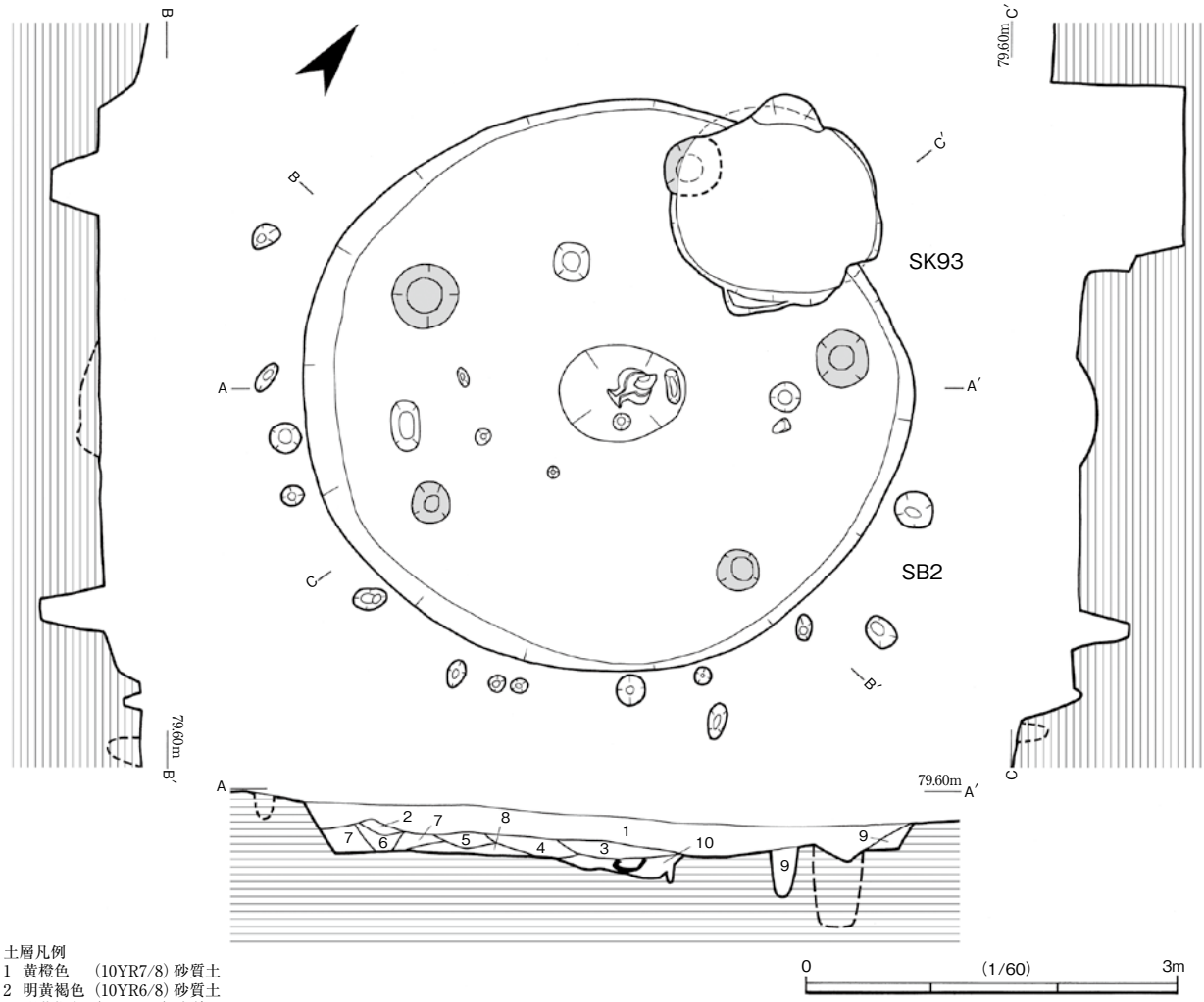
頂上部東側で、ＳＢ２・３に隣接し、住居南半部は１号段状遺構による削平を受けて消失している。平面形は円形と推定され、残存値で長軸5.1ｍ、短軸1.3ｍで、壁高は30㎝である。床面は平坦で、壁面は垂直に立ち上がる。周溝は検出されていない。住居内には長軸70㎝、短軸70㎝、深さ20㎝の中央土坑を挟むように深さ37～40㎝、径20㎝の主柱穴が２本確認された。遺物は、床面から弥生土器（８・９）が、埋土中から作業台が出土した。なお住居東側でＳＫ101と重複しているが、前後関係は不明である。

ＳＢ８（第７図　図版９）

頂上部西側に位置する柱穴のみの竪穴住居跡である。調査区端に主柱とみられる径約50㎝、深さ55～65㎝の柱穴が４本円形にめぐることから、削平により壁体を消失した竪穴住居跡であると判断した。住居は、柱穴の配置から、調査区外に２本、計６本の主柱穴からなるとみられ、長軸約5.4ｍの平面長円形であると推定される。中央土坑付近に作業台と見られる石材が検出された。弥生土器鉢（13）が出土した。面積は推定19.2㎡。

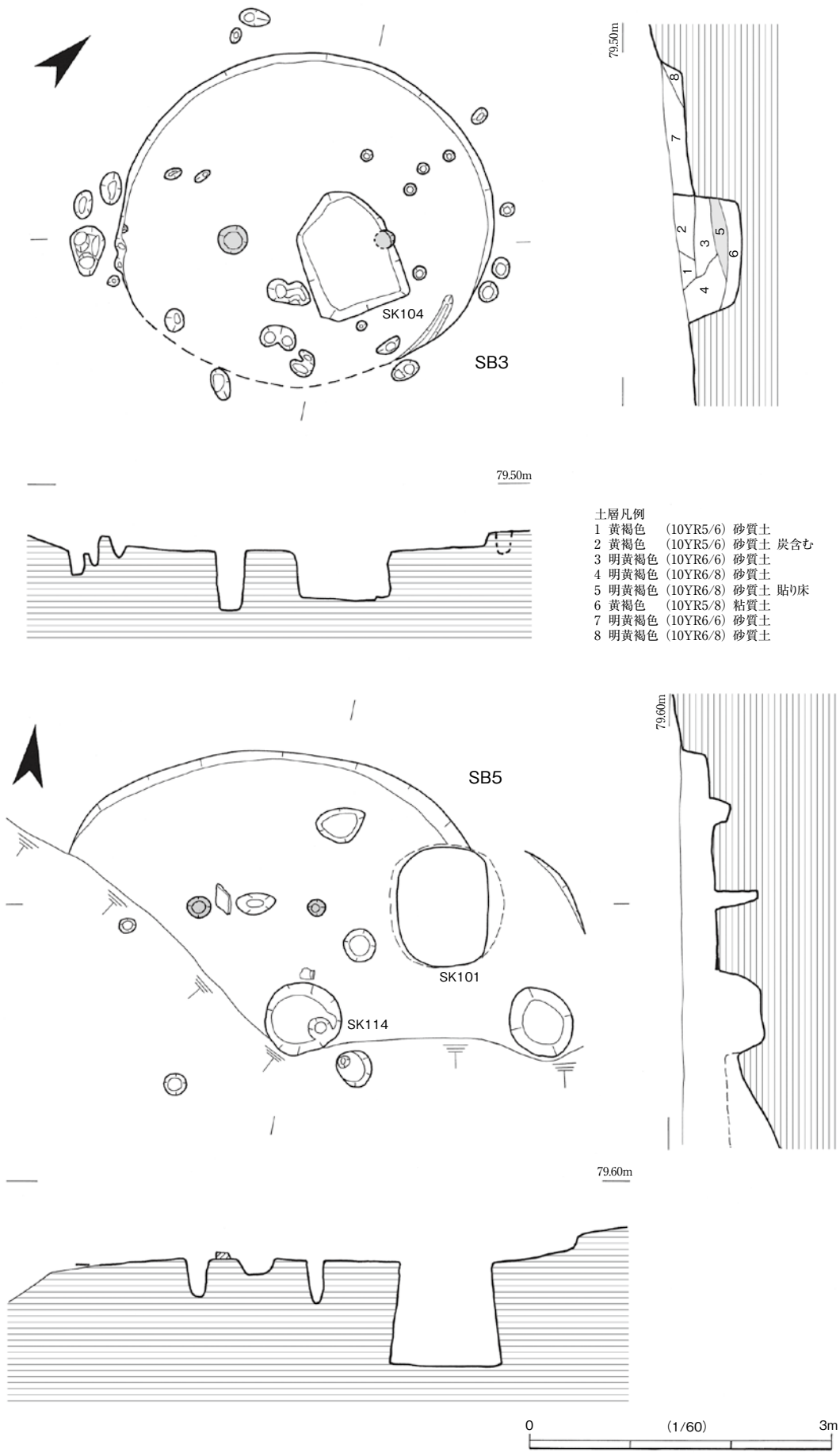
ＳＢ１（第７図　図版９）

頂上部西側に位置し、ＳＢ８と隣接する。東側の壁は斜面により流失しているが、隅丸方形の住居で、



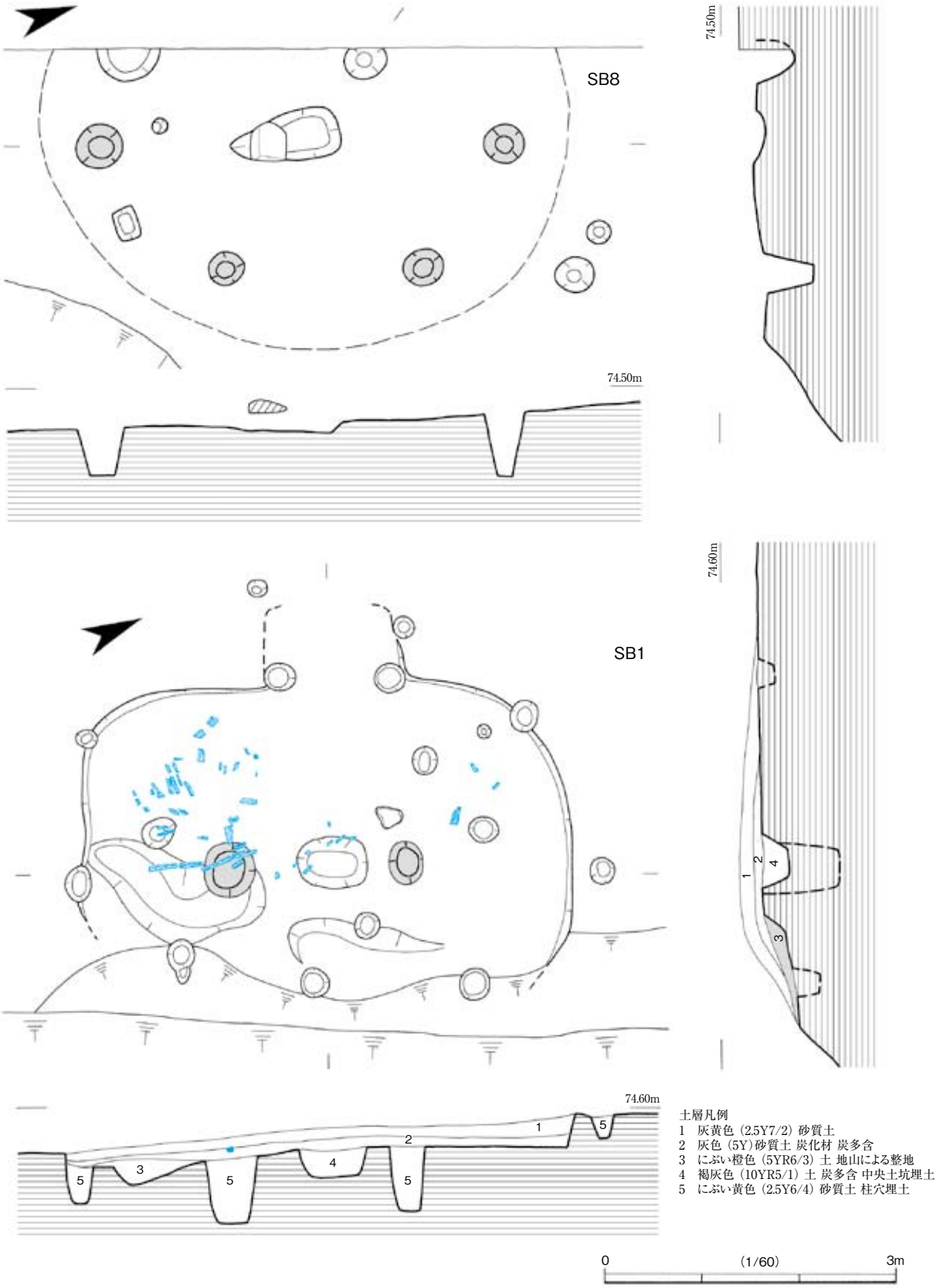
土層凡例
1　黄橙色　（10YR7/8）砂質土
2　明黄褐色（10YR6/8）砂質土
3　明黄褐色（10YR6/6）砂質土
4　明黄褐色（10YR6/6）砂質土 炭含む
5　橙色　　（5YR6/6）焼土
6　明黄褐色（10YR7/6）焼土 炭多く含む
7　明黄褐色（10YR7/6）焼土
8　にぶい黄橙色（10YR7/6）焼土 炭多く含む
9　明黄褐色（10YR6/8）土
10 明黄褐色（10YR6/8）焼土 土器含む

第５図　Ⅳ地区ＳＢ実測図（1）

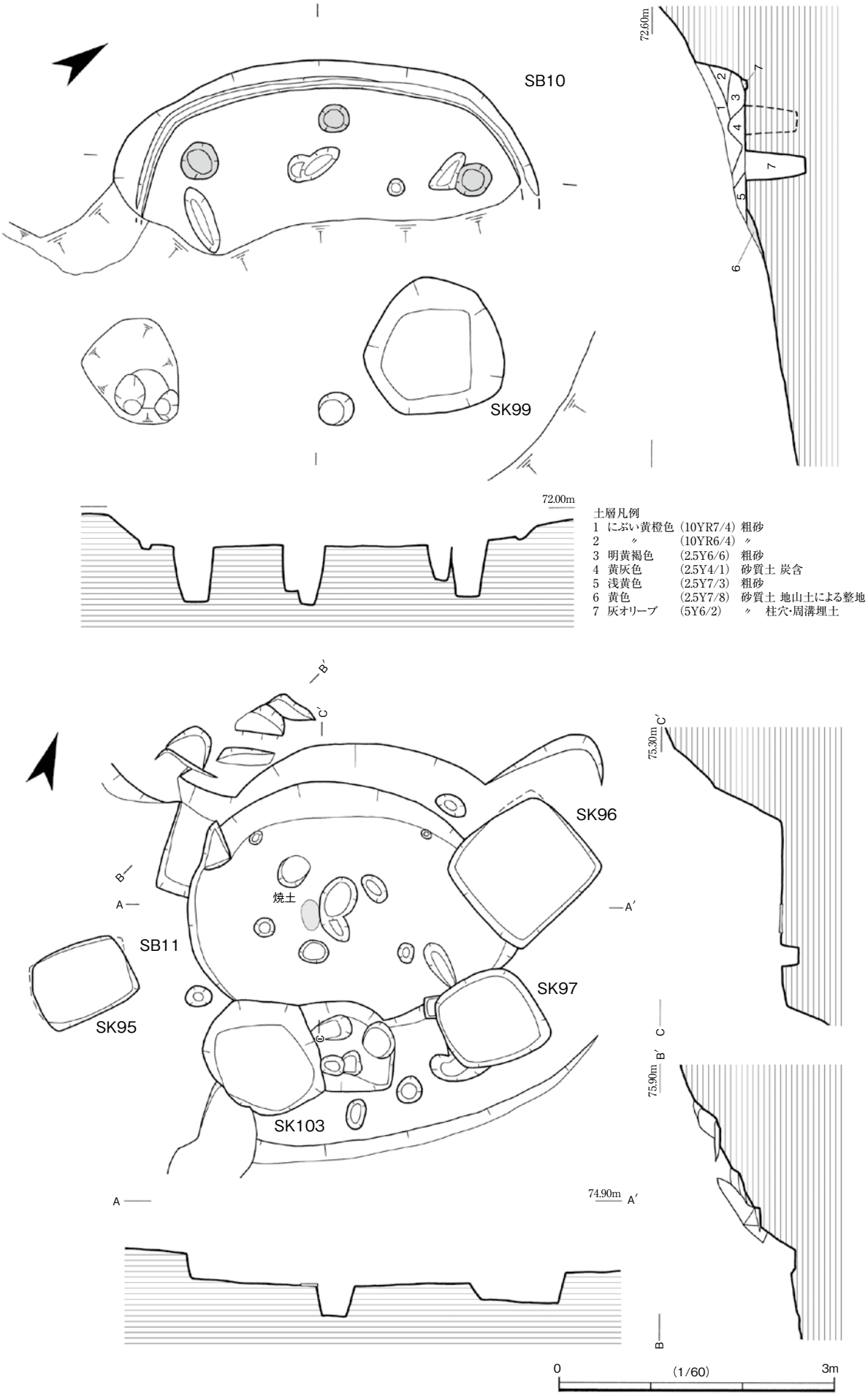


第6図　Ⅳ地区ＳＢ実測図 (2)

長軸4.95ｍ、短軸残存値4.05ｍ、壁面は最も残存するところで48㎝を測る。面積14.8㎡。主柱と見られる柱穴が２本、中央土坑を挟んで位置し、規模は径40～60㎝、深さ60～70㎝である。土層観察によれば斜面で傾斜している部分に地山土を客土して整地し、床面をつくり出していることが明らかとなった。床面南半には多くの炭化木材が出土したことから、焼失住居とみられる。なお、西側には２



第７図　Ⅳ地区ＳＢ実測図（3）



第8図　Ⅳ地区ＳＢ実測図 (4)

本の柱穴および方形に張り出した部分の痕跡があることから、入り口施設が付属していたとみられる。また斜面側には等間隔に配置された３本の柱穴があり、斜面整地床に伴う補助支柱であった可能性がある。出土遺物は床面から作業台とみられると石材と、弥生土器の破片（１～５）が出土した。

ＳＢ10（第８図　図版８・21）

５号段状遺構東端に検出された、頂上からの張り出し部の斜面低位に位置する住居跡である。平面形は長軸4.5 m、短軸残存長1.9 mの長円形または隅丸方形の竪穴住居跡で、東半が流失している。土層観察によれば、東側斜面にわずかに地山土を用いた整地がみられることから、住居は斜面を段カットして壁面とし、傾斜しているところに客土して平坦な床面を構築したと考えられる。西側には壁面に周溝がめぐり、主柱とみられる柱穴が３本残存する。径30～50㎝、深さは60～70㎝である。

なおＳＢ10に隣接して多量の炭化米が出土したＳＫ99が位置するが、新旧関係または住居内の土坑であるかなどの位置関係は、床面が削平されているため不明である。出土遺物は弥生土器（10・11）が出土した。

ＳＢ11（第８図　図版９）

頂上からの張り出し中段部分にあたり、４号段状遺構内の土坑群を掘り込み中に確認された住居跡である。長円形の浅い掘り込みとその中央に焼土が認められたことから、住居跡と判断した。平面形は長円形で、長軸3.5ｍ、短軸2.55ｍである。壁の高さは頂上部側で73㎝で、床面からやや外傾して立ち上がる。床面には20～40㎝、深さ20～30㎝の柱穴が検出されたが、主柱穴は明らかでない。小規模の住居跡であるため、簡易な上屋構造であったとみられる。焼土は、長軸34㎝、短軸16㎝の長円形の範囲で検出された。住居周辺にはＳＫ95～97、103の土坑群が位置し、これらとの新旧関係は明らかでない。また西側の切り立った斜面には地山を段カットして４段程度の昇降用の段をつくり出している。住居壁面と接するように位置しているため、住居覆屋の張り出しを考えれば、住居と同時期ではなく、土坑群利用のためのものであろう。出土遺物は弥生土器（12）が出土した。

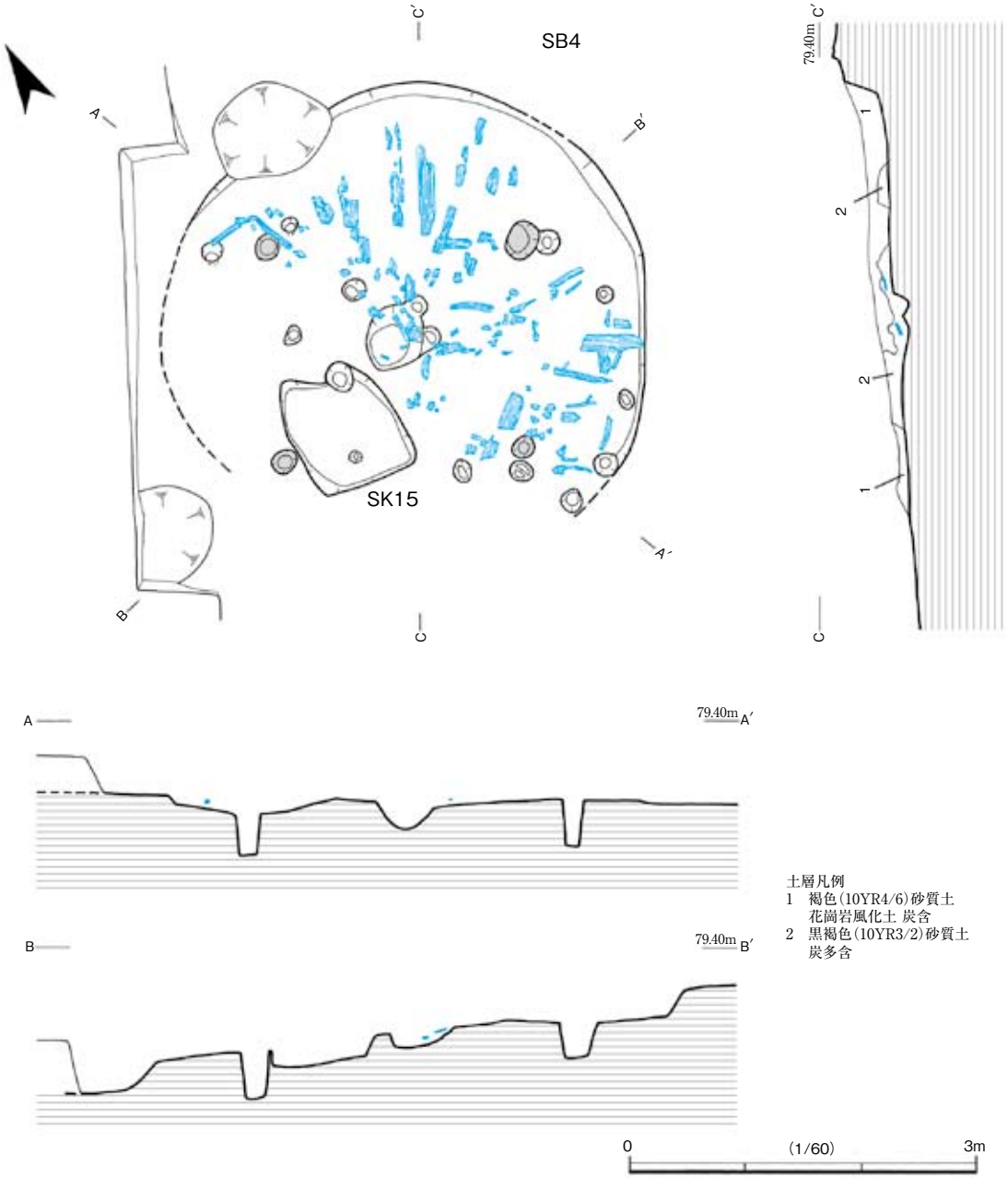
ＳＢ４（第９図　図版７）

頂上部中央に位置し、後世に造営された経塚に隣接する。北西部分は削平と攪乱により壁面と床面は消失している。壁面は残存する部分でやや外傾して立ち上がることが確認できる。住居東側半分の床面はほぼ平坦で、主柱穴４本は規則的に並び、その残存状況はよい。平面形は円形で、残存する部分で径4.25ｍを測る。面積12.4㎡。壁の高さは、東側残存部で最大53㎝である。主柱穴４本は南北に1.85ｍ、東西に2.14ｍと長方形に配列され、深さ40㎝を測る。床面には炭化した木材の破片や焼土があることから焼失した住居と考えられる。炭化木材は中央から放射状になるものと、それと直交するものとがあり、その位置関係から住居の覆屋を構成した木材で、これが焼け落ちた住居であるとみられる。床面には赤色焼土塊が一面に見られ、被熱の痕跡を残す。この住居範囲内からの土器等の遺物は検出できなかったが、他の住居が弥生時代のものであり、柱穴などの特色が似通うことから弥生時代の竪穴住居であろう。床面には中央土坑があり、周溝は確認されなかった。なおＳＫ15はその部分だけ炭化木材がなかったことから、ＳＢ４焼失後に掘り込まれたと考えられる。

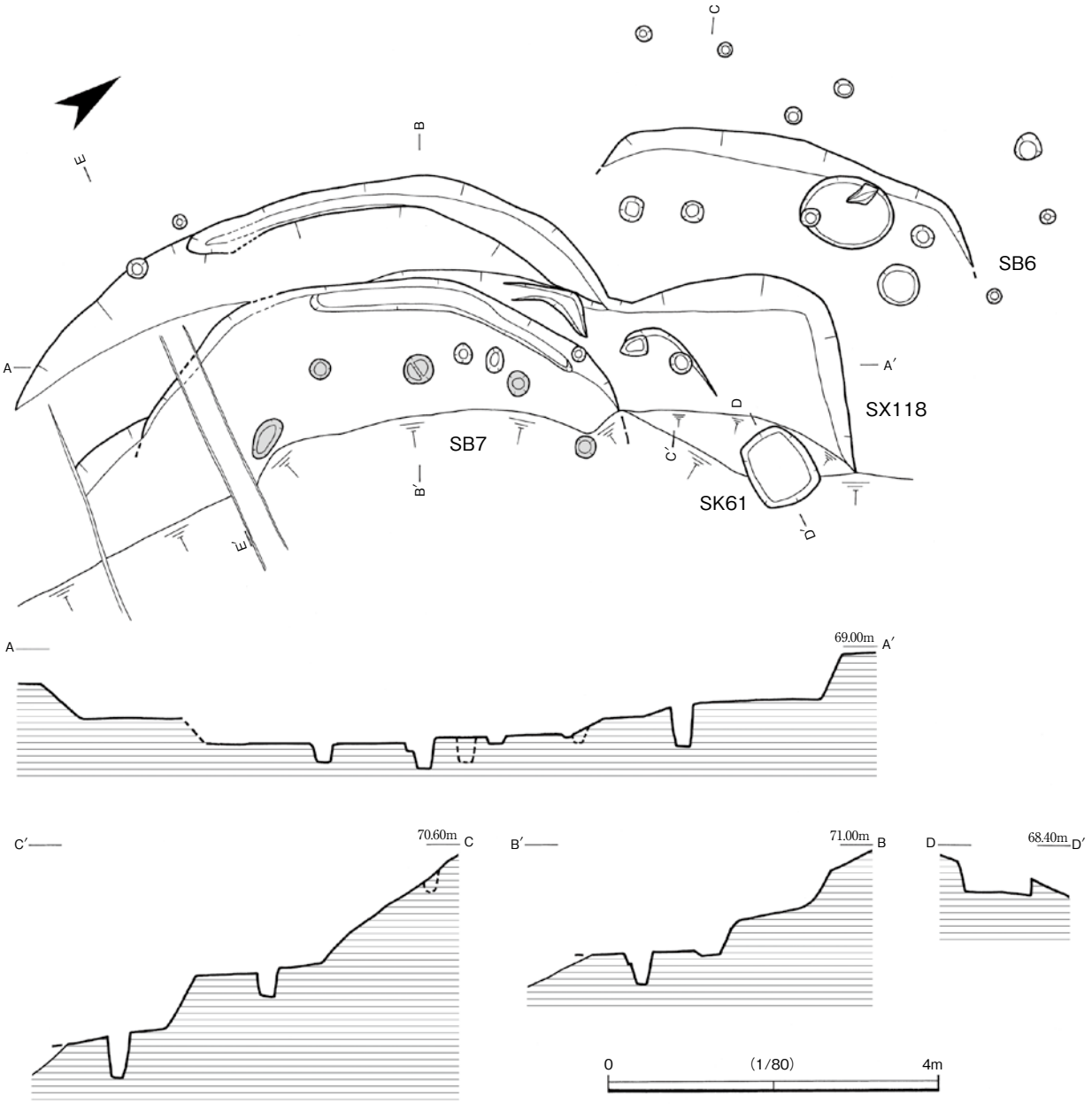
ＳＢ６・ＳＢ７（第10・11図　図版９）

西側斜面下にあり、11号段状遺構の東端に位置する。今回出土したＳＢの中で最も低い場所にある

住居跡である。遺構の切り合いや土層観察（第11図）から判断して、遺構の構築順序は次のようになる。まず斜面低位にＳＢ７が構築される。このとき住居本体を構築するため、より広い面積の斜面を掘削して平坦面をつくり出している。ＳＢ７壁面に沿って約1.2ｍの幅で段カットがこれにあたる。ＳＢ７の規模はいずれも残存値で長軸5.75ｍ、短軸1.71ｍで、平面形は円形である。ＳＢ７の残存する壁の高さは48㎝で、西側の壁に長さ約３ｍの周溝を検出した。主柱穴は残存するもので５本で、その規模は径40～60㎝、深さ25～60㎝である。おそらく８本程度の主柱穴が並ぶ大きな住居であったと考えられる。出土遺物は弥生土器（23～27）が出土。ＳＢ７の東側にはＳＸ118が位置する。当初方形住居の一部と考えたが、住居に属する柱穴が見あたらないこと、他に方形住居が確認されていないことなどから、住居跡ではなく、方形の段カットであると判断して、ＳＸ（性格不明遺構）として取り扱うこととした（詳細はＰ42参照）。なおＳＢ７とＳＸ118との新旧関係は明らかでない。出土遺物は弥生土器片が出土した。



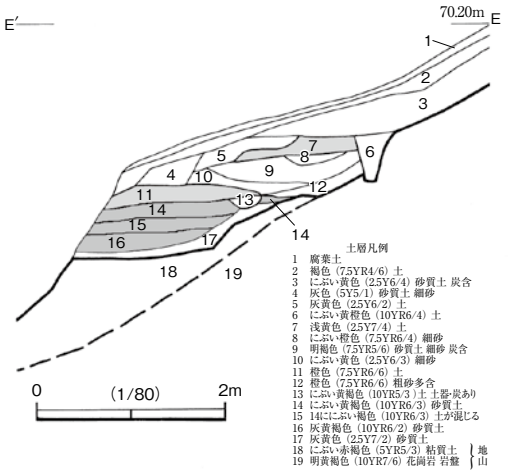
第９図　Ⅳ地区ＳＢ実測図（5）



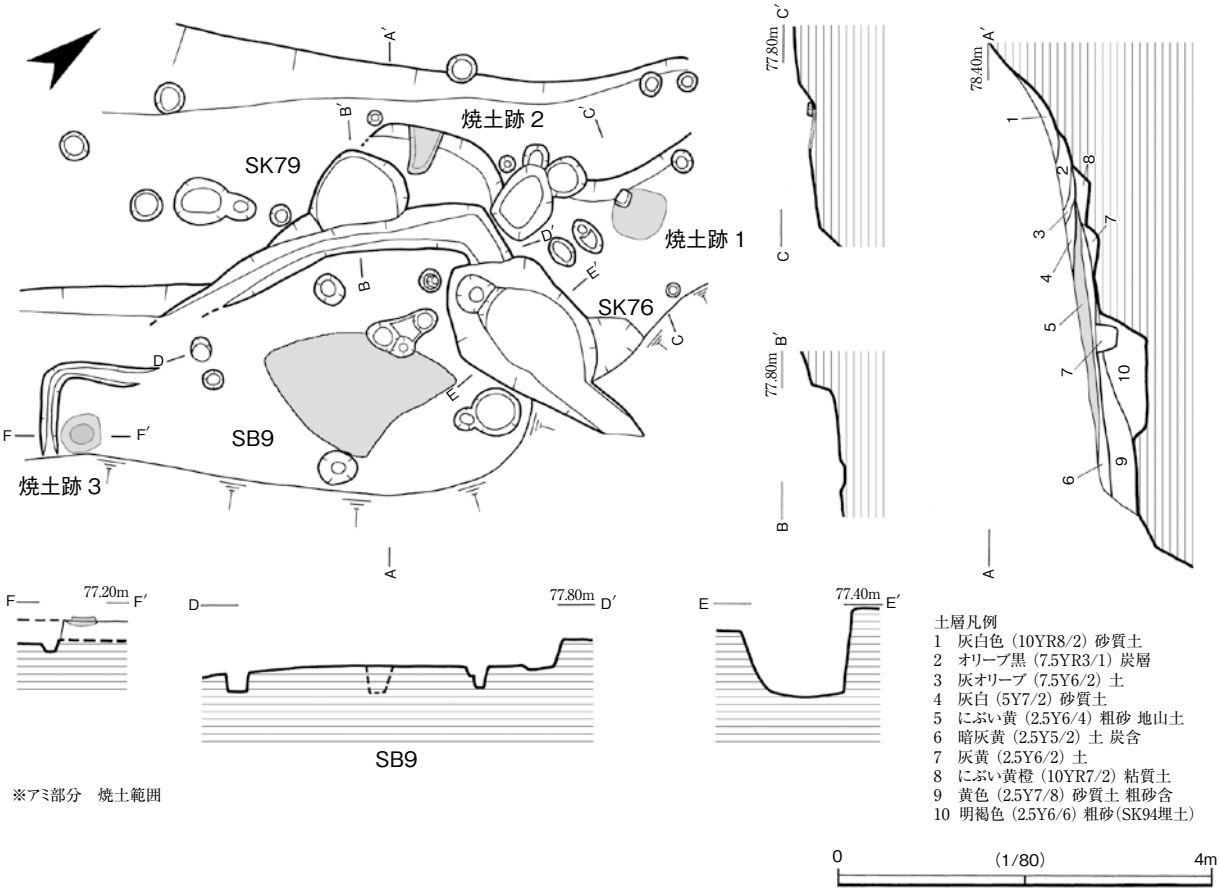
第10図　Ⅳ地区ＳＢ実測図（6）

土層観察ではＳＢ７廃絶後、その上面に地山土を客土した整地層が認められる。これは西側斜面にある一定の範囲に行われたとみられ、斜面低位に客土、整地により新たな生活面を構築している。第11図土層断面では、ＳＢ７上面と、さらに堆積層を挟んで２度の整地層が確認できる。その最後の遺構面ではそこから掘り込まれた柱穴が認められる。

ＳＢ６はＳＢ７の北側に位置する。ＳＢ６床面とみられる面がＳＢ７、ＳＸ118の埋土上面に連続する



第11図　ＳＢ７断面図



第12図　Ⅳ地区ＳＢ実測図（7）

ことから、ＳＢ６が時期的に新しいと判断した。

ＳＢ６の残存する壁面の高さは65㎝で、残存規模は長軸4.58ｍ、短軸1.08ｍ。平面形は隅丸方形である。床面には２本の主柱穴が残存し、配置から計４本の主柱であったとみられる。また斜面高位側に等間隔に柱穴が並び、その規模は径約20㎝、深さは20～30㎝である。位置関係からＳＢ６に付属するものとみられ、覆屋の支柱または、斜面上位からの土砂流れ込みを防ぐ柵等の施設が考えられる。いずれにしても覆屋の葺き降ろしを考えた場合、ＳＢ６は一般的な竪穴住居跡ではなく、傾斜を利用して構築された建物跡であろう。出土遺物は弥生土器片（14～22）の他、敲石（318）が出土。

ＳＢ９（第12図　図版８）

頂上部中央の東側緩斜面に位置する。土層観察によれば、ＳＫ94などが位置する３号段状遺構（弥生時代中期）の段及び東側斜面を整地し平坦面を形成し、そこにＳＢ９が検出された。ＳＢ９とみられる遺構は、周溝とみられる溝状遺構と柱穴である。周溝はコーナーが認められ、一部壁面が40㎝残っていることから、住居跡と判断した。整地貼り床した床面には、中央と見られるところに50㎝四方の赤色化した焼土面があり、焼けしまっていた。ここから須恵器、土師器が出土している。柱穴はこの床面で検出された。周溝は幅15㎝、長さ3.7ｍ、深さは平均で9㎝を測る。ＳＢ９は埋没した後に地山土による整地がなされており、その面で焼土跡１～３が検出されたことから、何度かの古代の生活面があったと推察される。なおＳＢ９は周溝はあるものの、竪穴住居跡であったかどうかについては、遺構の残存状況が十分でなく、今後当該期資料との検討が必要である。出土遺物は須恵器･土師器（246～254）が出土した。

イ　土坑（ＳＫ）

土坑は113基確認された（第１表）。平面形は大別して円形、方形の２つがあり、断面は底面が上面よりも広がり袋状となる（オーバーハング）ものもある。また覆屋の柱穴が伴うものや、貼床をして再利用したもの、炭化米・炭化種子が出土したもの、壁面や床面が被熱したものなどが検出された。

ＳＫ93（第13図　図版13）

ＳＢ２と重複する土坑で、新旧関係は不明である。長軸164㎝、短軸152㎝で、平面形は円形を呈する。20基を超える頂上部東側の土坑群では最大である。壁面は垂直に立ち上がり、深さは105㎝を測る。最下層のにぶい黄褐色砂質土からは廃棄したとみられる弥生土器（148・149）が出土。

ＳＫ105（第13図　図版13）

頂上部東側で、１号段状遺構より東に位置する。平面形が長方形で、長軸112㎝、短軸105㎝、深さ108㎝に達する。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。土層観察では中位まで弥生土器を含む自然堆積で、そののち一斉に埋め戻したとみられる。弥生土器（165）、炭化種子が出土した。

ＳＫ101（第13図　図版13）

ＳＢ５と重複する土坑で、平面形は円形。長軸113㎝、短軸97㎝で深さが104㎝を測る。断面は東西方向で袋状となりオーバーハングしている。弥生土器と石鏃（284）１点が出土。埋土上位にある黄褐色砂質土は礫状の地山土を含み、堆積状況からみて人為的に埋め戻した可能性がある。

ＳＫ81・82（第13図　図版13）

頂上部東側で調査区のもっとも東端斜面に位置する。平面形は、ＳＫ81が円形で、ＳＫ82が長方形である。重複した２つの土坑の新旧関係は、ＳＫ82がＳＫ81より新しい。壁面はいずれも外傾して立ち上がる。深さはＳＫ81が45㎝、ＳＫ82が31㎝で周辺の土坑に比べると浅い。埋土はそれぞれ単層で、ＳＫ81が黄褐色砂質土、ＳＫ82が明黄褐色砂質土で地山土を多く含む。ＳＫ82から弥生土器片が出土。

ＳＫ104（第６図　図版６）

頂上部東側で、ＳＢ３内に位置する。ＳＢ３と重複してるが、土層断面からＳＫ104 の方が新しい。規模は長軸124㎝、短軸90㎝、深さ53㎝で、平面形は不整な長方形である。底面から２層目に貼り床を施した形跡が見られる。出土遺物は弥生土器（163・164）である。

ＳＫ75（図版19）

頂上部東側で、ＳＫ81・82に隣接する。長軸102㎝、短軸100㎝とほぼ円形で、深さが75㎝である。底面はほぼ平坦で、壁は垂直に立ち上がる。斜面上位に柱穴があり、位置関係からこの土坑に付属する可能性がある。出土遺物は弥生土器片である。

ＳＫ10（第14図　図版11）

頂上部東側で谷部に近い所に位置する。平面形は長円形で、谷側の壁面は検出されなかった。規模は長軸141 ㎝、短軸81㎝、深さ53㎝を測る。埋土は２層に別れ、下層の黄灰色砂質土から炭や木片、炭化種子（カシ・シイのドングリ類が2.3リットル）が出土した。また同層から弥生土器（68～72）が出土。木の葉文のある壺胴部片（69）も出土した。

ＳＫ19（第14図　図版13）

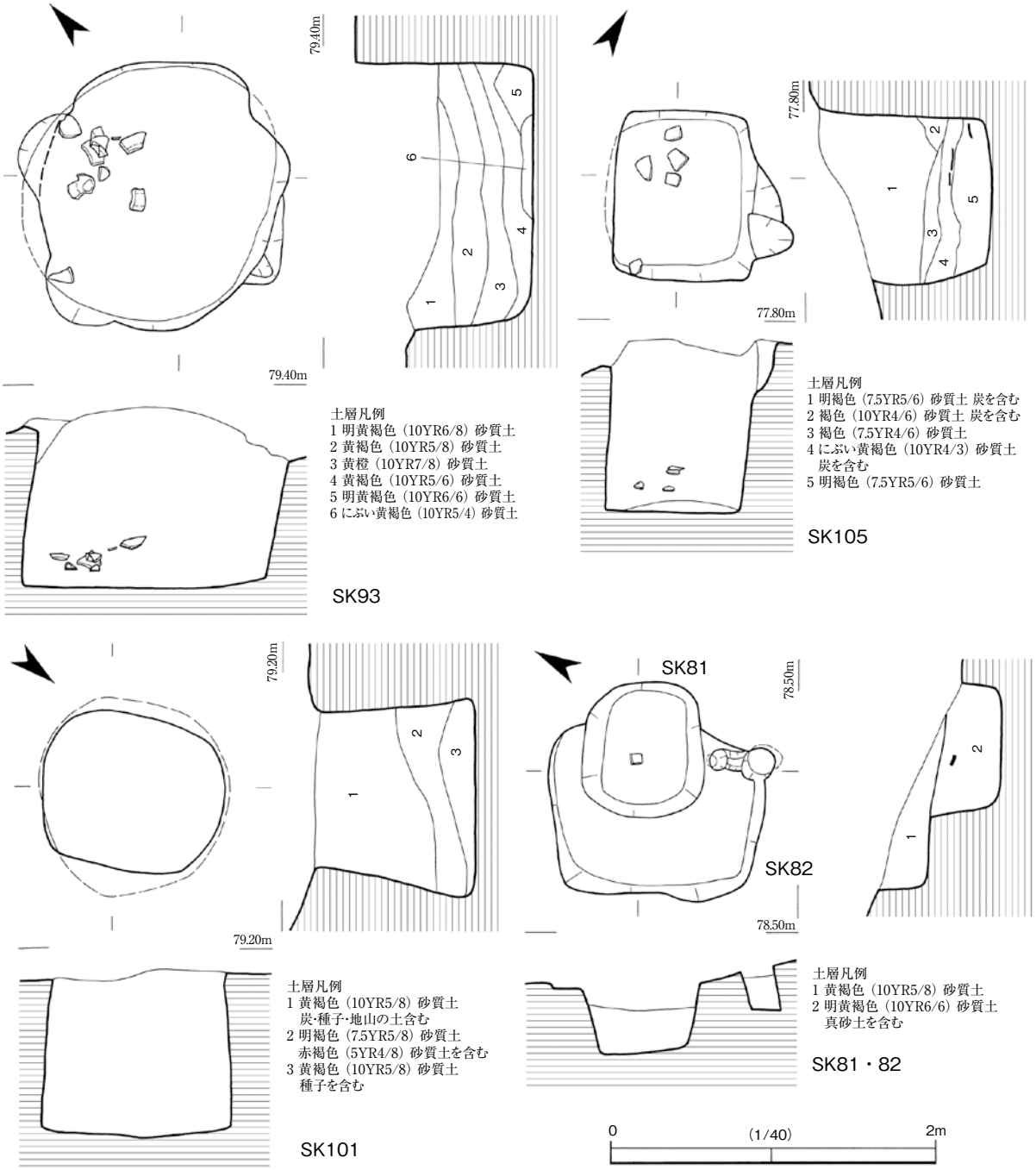
第１表　Ⅳ地区土坑一覧表

（　　）は残存値

遺構番号	平面形	規模（cm）			主な出土遺物	備考
		長軸	短軸	深さ		
ＳＫ１	円形	100	96	116	弥生土器	
ＳＫ２	長円形	95	94	80	弥生土器、炭	オーバーハング
ＳＫ３	不整円形	84	76	76	弥生土器	オーバーハング
ＳＫ４	円形	103	97	99	弥生土器	壁面に小坑あり
ＳＫ５	長円形	162	127	80	弥生土器	昇降用の段差が隣接する
ＳＫ８	長円形	141	99	97	弥生土器	底面に柱穴状の凹みあり
ＳＫ９	方形	154	140	139	弥生土器、水晶片	
ＳＫ10	長円形	141	81	53	弥生土器、剥片、炭化種子	
ＳＫ11	円形	145	130	105	弥生土器、炭化種子	北側斜面に柱穴あり
ＳＫ12	不整円形	200	170	120		坑内に段あり
ＳＫ13	長円形	92	54	60	弥生土器、炭化種子	オーバーハング
ＳＫ14	不整形	84	68	39		柱穴あり、堆積土を遺構面とする
ＳＫ15	不整形	91	90	28		ＳＢ４と切り合い、底面に柱穴あり
ＳＫ16	長方形	119	99	113		底面中央に柱穴あり
ＳＫ17	円形	104	92	97	弥生土器、黒曜石剥片	
ＳＫ18	不整円形	106	100	64	弥生土器、砥石、敲石、黒曜石剥片、炭化種子	北側に柱穴あり、上面に焼土が重複する
ＳＫ19	円形	110	107	74		
ＳＫ20	円形	110	110	77	弥生土器	底面中央に柱穴あり
ＳＫ21	長方形	164	130	98	弥生土器、石鏃、剥片、炭化種子	
ＳＫ22	円形	135	116	110	弥生土器、石鏃	
ＳＫ23	円形	124	114	70	弥生土器、炭化種子	
ＳＫ24	長方形	300	148	33		ＳＫ25と切り合い
ＳＫ25	円形	90	82	51	弥生土器片	ＳＫ24と切り合い
ＳＫ26	長方形	235	185	90		テラス状段差あり
ＳＫ27	長円形	150	97	65		
ＳＫ28	不整円形	204	182	112	弥生土器、石斧	貼り床あり
ＳＫ29	長円形	144	116	32	弥生土器	
ＳＫ30	長円形	103	96	62		壁面に柱穴あり
ＳＫ32	円形	90	83	52		オーバーハング
ＳＫ33	円形	131	123	139	弥生土器、剥片	底面中央に柱穴、貼り床、オーバーハング
ＳＫ34	不整形	152	134	52		
ＳＫ36	方形	112	87	20	弥生土器	ＳＤ１に囲まれる
ＳＫ37	長円形	127	104	91		
ＳＫ38	不整形	100	93	37		
ＳＫ39	円形	91	84	60	土器片	
ＳＫ40	円形	132	119	115	弥生土器	オーバーハング
ＳＫ41	円形	112	110	110	弥生土器片	底面中央に柱穴あり、オーバーハング
ＳＫ42	円形	126	120	109	弥生土器	
ＳＫ43	不整形	346	152	68	弥生土器（弥生時代終末期）、炭	
ＳＫ44	長円形	139	93	80	弥生土器	
ＳＫ45	長円形	168	(124)	53		
ＳＫ46	長円形	77	57	75		
ＳＫ47	円形	98	87	105	弥生土器	
ＳＫ48	不整形	139	117	108	弥生土器	オーバーハング
ＳＫ49	円形	74	(56)	70		
ＳＫ50	円形	92	84	106	弥生土器、石鏃	
ＳＫ51	円形	142	138	204	弥生土器、炭化種子、炭	底面中央に柱穴、貼り床、オーバーハング
ＳＫ52	円形	114	90	107	弥生土器、炭	オーバーハング
ＳＫ53	方形	130	114	97	弥生土器	テラス状段差あり
ＳＫ54	不整形	(136)	95	74		
ＳＫ55	円形	91	92	58		
ＳＫ56	長方形	190	160	55	弥生土器	
ＳＫ57	円形	(83)	82	111	土器片	オーバーハング、貼り床あり
ＳＫ58	長円形	114	87	84		
ＳＫ59	円形	84	78	72	弥生土器	
ＳＫ60	円形	85	76	64		

（　　）は残存値

遺構番号	平面形	規模（cm）			主な出土遺物	備考
		長軸	短軸	深さ		
ＳＫ 61	長方形	96	78	20		ＳＸ 118 内
ＳＫ 62	長円形	127	95	70	弥生土器	
ＳＫ 63	不整形	171	(77)	64		
ＳＫ 64	長円形	162	152	147	弥生土器、炭	ＳＫ 115 と切り合い、ＳＫ 115 が新
ＳＫ 65	長円形	134	112	102	弥生土器	
ＳＫ 66	円形	105	105	107	弥生土器、石斧	オーバーハング
ＳＫ 67	長円形	148	127	112	弥生土器	オーバーハング
ＳＫ 68	長円形	140	84	71		底面中央に柱穴あり
ＳＫ 69	長円形	145	122	108	弥生土器	
ＳＫ 70	長円形	139	81	107	弥生土器	
ＳＫ 71	長方形	116	91	21		
ＳＫ 72	長方形	94	74	25		
ＳＫ 73	不整形	154	131	59	弥生土器	
ＳＫ 74	不整形	123	96	27	弥生土器	
ＳＫ 75	円形	102	100	75	弥生土器片	西側斜面に柱穴あり
ＳＫ 76	不整形	(291)	222	124	弥生土器	
ＳＫ 77	長円形	136	104	88		
ＳＫ 78	長円形	76	56	48		
ＳＫ 79	円形	100	(79)	30		ＳＢ９、焼土跡２と切り合い
ＳＫ 80	円形	138	116	114	弥生土器	ＳＤ５と切り合い、オーバーハング
ＳＫ 81	円形	83	76	45		ＳＫ 82 に切られる
ＳＫ 82	長方形	134	108	31	土器片	ＳＫ 81 を切る、脇に柱穴あり
ＳＫ 83	長円形	148	90	125	弥生土器	オーバーハング
ＳＫ 84	方形	129	110	86	弥生土器	
ＳＫ 85	不整円形	135	130	116	弥生土器	
ＳＫ 86	円形	123	113	93	弥生土器	
ＳＫ 87	正方形	106	104	50	弥生土器片	
ＳＫ 88	円形	100	100	103	弥生土器、石鏃、炭化種子	底面中央に柱穴状の凹み、種子大量に出土
ＳＫ 89	円形	85	81	109	弥生土器、石鏃、炭化種子、炭	壁面に被熱痕、 種子大量に出土
ＳＫ 90	長方形	170	(109)	44	弥生土器、炭化種子、炭	ＳＫ 91 と切り合い
ＳＫ 91	円形	84	(76)	57		ＳＫ 90 と切り合い
ＳＫ 92	円形	92	83	98	弥生土器、炭化種子	
ＳＫ 93	円形	164	152	105	弥生土器	ＳＢ２と切り合い
ＳＫ 94	円形	153	142	55		
ＳＫ 95	長方形	109	80	84	弥生土器	
ＳＫ 96	正方形	136	126	88	弥生土器、炭化米	
ＳＫ 97	正方形	105	100	107		
ＳＫ 98	方形	(101)	94	56	弥生土器、石鏃、炭化種子	中に柱穴２つあり
ＳＫ 99	不整円形	151	149	74	弥生土器、炭化米	炭化米出土
ＳＫ 100	長円形	78	63	44	弥生土器、石鏃、剥片	底面に柱穴状の凹みあり
ＳＫ 101	円形	113	97	104	弥生土器片、石鏃、炭化種子	オーバーハング
ＳＫ 102	長円形	180	127	87		
ＳＫ 103	長円形	140	124	113	弥生土器	
ＳＫ 104	長方形	124	90	53	弥生土器	ＳＢ３内、貼り床あり
ＳＫ 105	長方形	112	105	108	弥生土器、剥片、炭化種子	
ＳＫ 106	長円形	143	100	111		
ＳＫ 107	長方形	158	122	78	弥生土器片	底面に柱穴あり
ＳＫ 108	長円形	154	115	99		
ＳＫ 109	長方形	107	70	68		
ＳＫ 110	長円形	103	92	53		
ＳＫ 111	円形	122	107	72		底面中央に柱穴あり
ＳＫ 112	方形	193	(158)	76	弥生土器	底面に柱穴２、SK119 と切り合い
ＳＫ 113	円形	91	86	101	弥生土器	
ＳＫ 114	円形	74	70	34		
ＳＫ 115	長円形	112	72	37		ＳＫ 64 と切り合い
ＳＫ 116	長円形	127	123	153	弥生土器	オーバーハング、貼り床あり、斜面に柱穴
ＳＫ 119	円形	87	78	18		焼土坑、SK112 と切り合い



第13図　Ⅳ地区ＳＫ実測図（1）

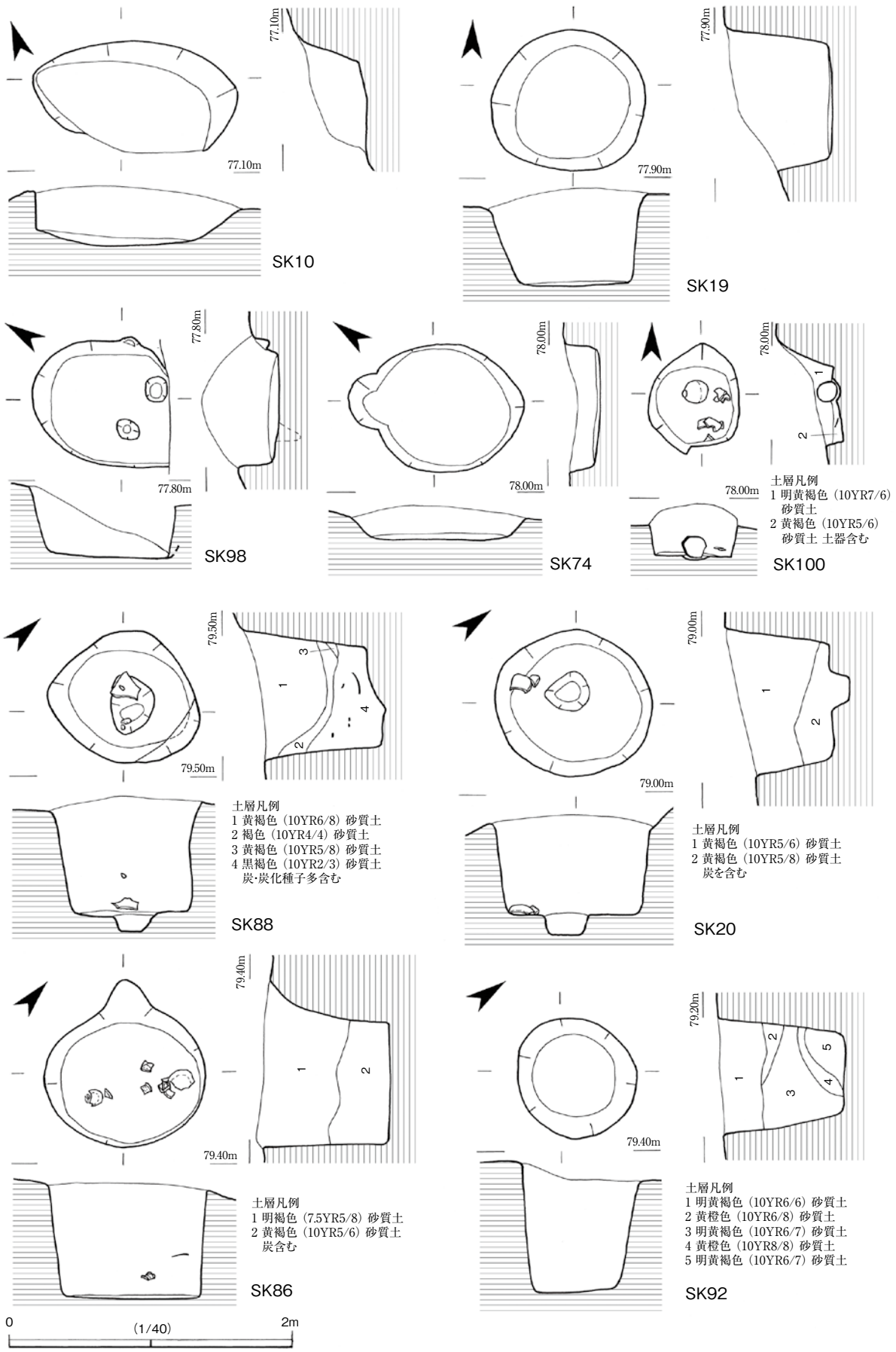
頂上部東側で谷部に近いところに位置する。平面形は円形で、規模は長軸110 ㎝、短軸107 ㎝、深さ74㎝を測る。底面はほぼ平坦で、壁面は外傾する。埋土はにぶい黄色砂質土の単層である。

ＳＫ98（第14図　図版13）

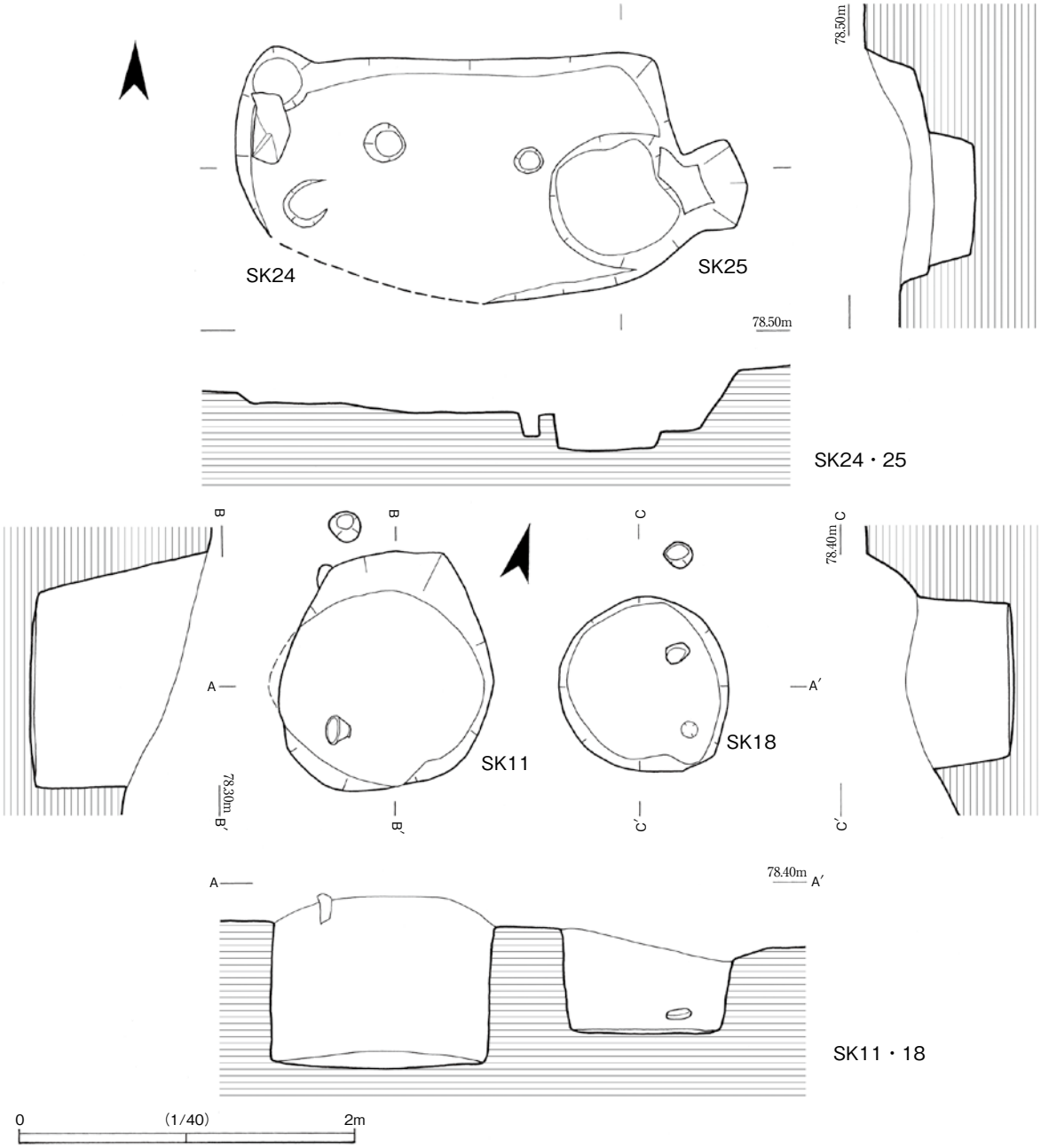
頂上部東側で１号段状遺構の東、調査区に接して位置する。底面の平面形は方形で、規模は長軸残存値101 ㎝、短軸94㎝、深さ56㎝を測る。埋土は褐色砂質土の単層である。底面に柱穴２つが検出された。弥生土器片、石鏃（282）、炭化種子が出土した。

ＳＫ74（第14図　図版13）

東側頂上部で谷部に近いところに位置する。平面形は不整形で、規模は長軸123 ㎝、短軸96㎝、深



第14図　Ⅳ地区ＳＫ実測図（2）



第15図　Ⅳ地区ＳＫ実測図（3）

さ27㎝を測る。埋土は明黄褐色砂質土の単層である。弥生土器（126）が出土した。

ＳＫ100（第14図　図版13）

東側頂上部で１号段状遺構の端に位置する。平面形は長円形で、規模は長軸78㎝、短軸63㎝、深さ44㎝を測る。底面に径４㎝の浅い凹みがあり、ここから壺（177）が出土した。このほか甕（178）、石鏃（283）、剥片が出土した。

ＳＫ88（第14図　図版12）

頂上部東側で、ＳＢ２、３、５に囲まれるようにその中央に位置する。平面形は円形で、規模は径100 ㎝、深さ103 ㎝を測る。底面中央に浅い柱穴状の凹みがあり、壁面は直線的に立ち上がる。埋土は４層に分かれ、下層の黒褐色砂質土層からは、弥生土器（138～146）や石鏃（280）のほか、カシ・

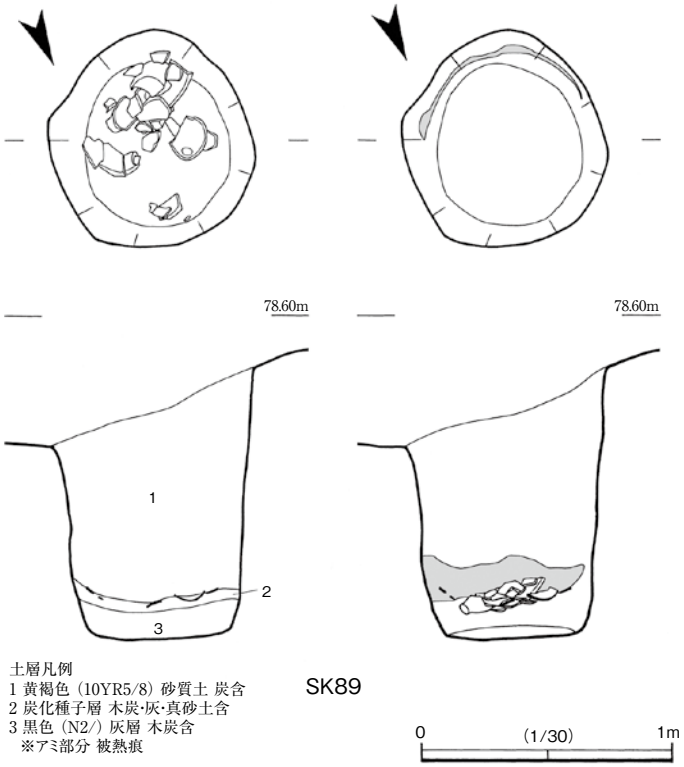
シイのドングリ類、ムクロジ、イネ、ダイズ・アズキ類似のマメ類、アサの種などの炭化種子が計7.2リットル出土した。これらの炭化種子は、均一に堆積していないことから、土器とともに廃棄された可能性が高い。

ＳＫ20（第14図　図版14）

頂上部東側に位置する。平面形は円形で、規模は径110㎝、深さ77㎝を測る。壁面は外傾して立ち上がり、底面中央には柱穴がある。弥生土器片が出土した。

ＳＫ86（第14図　図版14）

頂上部東側でＳＢ２に隣接する。平面形は円形で、規模は長軸123 ㎝、短軸113㎝、深さ93㎝を測る。底面は平坦で、壁面は垂直である。埋土は２層に分かれる。弥生土器（147）が出土した。



第16図　Ⅳ地区ＳＫ実測図（4）

ＳＫ92（第14図　図版14）

頂上部東側でＳＢ３の北側に隣接するように位置する。平面形は円形で、規模は長軸92㎝、短軸83㎝、深さ98㎝を測る。上面径に対して深さのある、円筒状の土坑である。弥生土器片や炭化種子が出土した。

ＳＫ24・25（第15図　図版14）

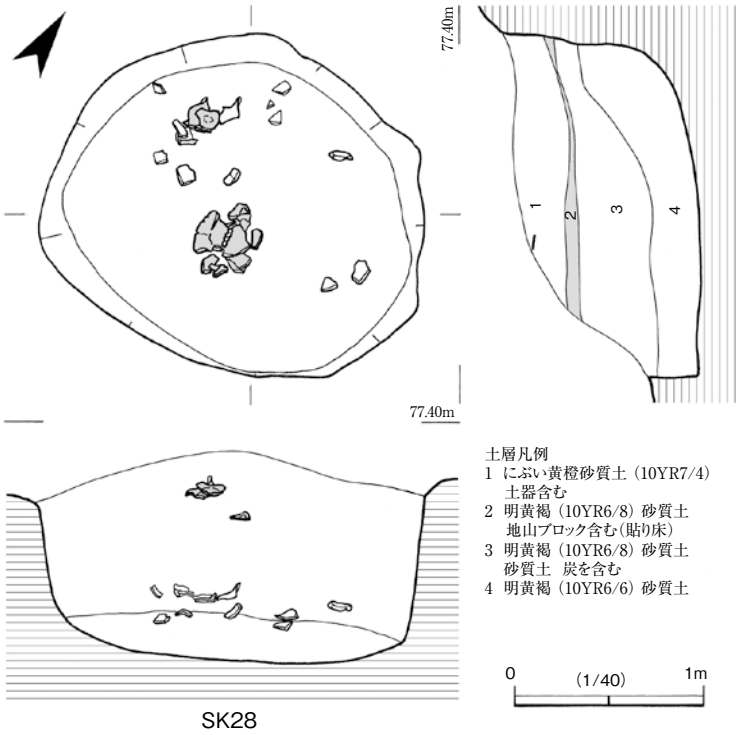
頂上部東側で階段状遺構の上位に位置する。ＳＫ24の内部におさまるようにＳＫ25が検出されたが、同一の遺構であるかは明らかでない。ＳＫ24の平面形は長方形で、規模は長軸300㎝、短軸148 ㎝、深さ33㎝を測る。底面は平坦で、柱穴が４つ検出された。埋土は灰黄色砂質土の単層である。ＳＫ25の平面形は円形で、規模は長軸90㎝、短軸82㎝、深さ51㎝を測る。埋土は２層に分かれており、上層がにぶい黄色砂質土、下層がにぶい黄橙色砂質土である。ＳＫ25からは弥生土器片が出土した。

ＳＫ11・18（第15図　図版14）

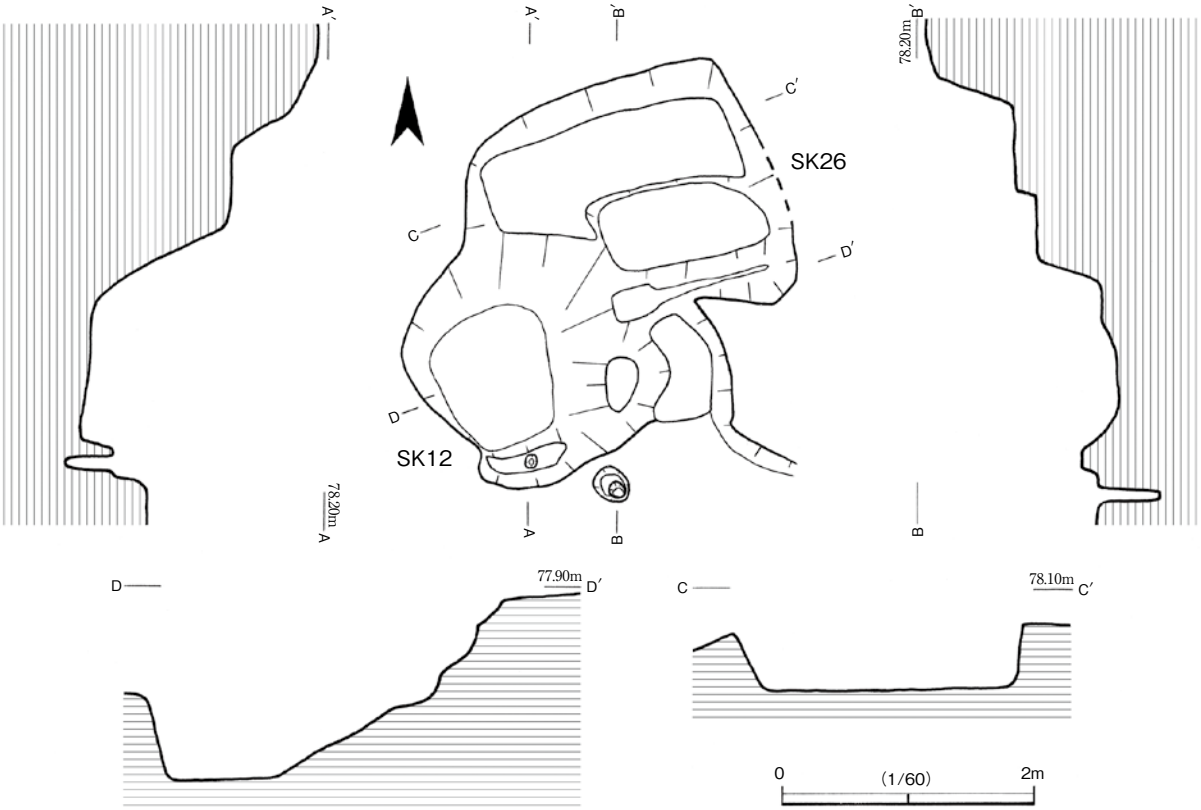
頂上部東側の１号段状遺構の中央部に位置する。両者は並列した位置関係であり、規模や形態、頂上側に柱穴を持つなど共通点が多いことから、一つのまとまりとして併存していた可能性がある。ＳＫ11の平面形は円形で、規模は長軸145 ㎝、短軸130 ㎝、深さ105 ㎝を測る。ＳＫ11の斜面北側に覆屋の支柱と考えられる柱穴が検出された。埋土は橙色砂質土の炭や炭化種子を含む単層である。壁面はほぼ垂直に立ち上がるが、西側壁面だけがオーバーハングしている。弥生土器（73～76）、炭化種子が出土した。ＳＫ18の平面形は不整円形で、規模は長軸106 ㎝、短軸100 ㎝、深さ64㎝を測る。ＳＫ18の斜面北側にもＳＫ11と同様の柱穴が検出された。埋土は褐色砂質土の炭や炭化種子を含む単層である。なお埋土上面に時期の異なる焼土が検出された。出土遺物は弥生土器片、砥石（310）、敲石、黒曜石剥片である。

ＳＫ89（第16図　図版11）

頂上部東側で１号段状遺構の東端に位置する。平面形は円形で長軸85㎝、短軸81㎝、深さ109㎝を測り、底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がっている。断面形は円筒形を呈し、多量の炭化種子が検出されたＳＫ88と形態が似ている。南壁面には、底面から10～30㎝程度のところに幅20㎝でベルト状に赤色化した部分が確認された。おそらく被熱による痕跡とみられ、土坑内で火を断続的に焚いたことがうかがえる。土層観察によれば、底面に10㎝の黒色灰層が堆積し、その上に木炭・灰・真砂土を含む炭化種子層が堆積していた。炭化種子層の上には黄褐色砂質土が上面まで堆積していた。土坑出土の弥生土器（148～159）のほとんどは、この炭化種子層に含まれていた。また、壁面の被熱痕と炭化種子層との関係は、層上半より上のレベルで重複する。このようにみてみると、内部で火を使用し、その後炭化種子類を土器と共に廃棄し、そして埋め戻したことがうかがえる。美祢市下村遺跡（2007）例でも弥生中期初



第17図　Ⅳ地区ＳＫ実測図（5）



第18図　Ⅳ地区ＳＫ実測図（6）

頭の土坑に被熱の痕跡と炭化種子の出土があることから、食料の保存や防虫のための燻蒸の可能性が示されており、ＳＫ89も同様な性格を有するものかもしれない。なお種子鑑定の結果、ＳＫ89からは、カシ・シイのドングリ類、イネ、ダイズ・アズキ類似のマメ類などの炭化種子が計4.2リットル出土した。弥生土器（148～159）、石鏃（281）が出土。

ＳＫ28（第17図　図版14）

東側頂上部で谷部上位に位置する。平面形は不整円形で、規模は長軸204 ㎝、短軸182 ㎝、深さ112 ㎝を測る大型土坑である。埋土は４層からなっており、地山土を厚さ８㎝に埋めて第２層を貼り床としている。出土遺物は弥生土器（87～92）のうち87・92が貼り床より上、88・90は下から出土した。他に石斧（312）が出土した。

ＳＫ12・26（第18図　図版14）

ＳＫ12・26は、頂上部東側、階段状遺構を上がりきった位置にある。長方形のＳＫ26と不整円形のＳＫ12が重複しており、ＳＫ26は長軸が235㎝、短軸が185㎝、深さ90㎝である。ＳＫ12は径170～200㎝で、深さはＳＫ26の底面から120㎝を測る。ＳＫ26底面からＳＫ12の底面に降りるようなテラス状の段差が検出された。テラス状の段差は３ないし４段あり、ＳＫ26から南へ、そしてＳＫ12底面へ向けて15㎝下るごとに２段のテラス状の平坦面が続く。埋土は、いずれも粗砂や地山土が混じる浅黄色砂質土で、新旧関係は判然としないことから、両土坑は一体の遺構である可能性がある。

ＳＫ51（第19図　図版10）

谷部の中央付近に位置する。平面形は円形で、規模は長軸142 ㎝、短軸138 ㎝、深さは204 ㎝と、検出された土坑のうち最も深い。底面は平坦で、中央に深さ15㎝の柱穴を持つ。壁面は北から西にかけて、上端よりも下端が広がってオーバーハングしている。埋土は９層からなっており、第８層は黄褐色砂質土（粘土含む）が薄く堆積し、貼り床状となっている。出土遺物は弥生土器（112～118）、炭化種子、炭である。

ＳＫ21・52（第19図　図版14）

谷部で階段状遺構の下部に位置する。ＳＫ21とＳＫ52が切り合いになっているが、その関係は明らかでない。ＳＫ21の平面形は長方形で、規模は長軸164 ㎝、短軸130 ㎝、深さ98㎝を測る。埋土は６層に分かれており、いずれの層も炭を含んでいる。最下層である暗灰黄色砂質土で多くの土器が出土している。出土遺物は弥生土器（77～83）、石鏃（277）、剥片、炭化種子である。

ＳＫ52の平面形は円形で、規模は長軸114 ㎝、短軸90㎝、深さ107 ㎝を測る。断面形は袋状で、底面に柱穴を１つ検出した。埋土は４層に分かれており、いずれの層も花崗岩風化土や炭粒を含む。出土遺物は弥生土器片（59）、炭である。

ＳＫ40（第19図　図版15）

谷部中央付近に位置する。平面形は円形で、規模は長軸132 ㎝、短軸119 ㎝、深さ115 ㎝を測る。埋土は黄褐色砂質土で、炭や炭化種子を含んだ単層である。底面は上面よりも大きく広がり、オーバーハングしている。出土遺物は弥生土器（84・85）である。

ＳＫ22（第20図　図版15）

谷部の階段状遺構の東隣に位置にする。平面形は円形である。規模は長軸135㎝、短軸116㎝、深

さ110㎝を測る。弥生土器片と使用痕跡が確認できない25㎝四方の石材、石鏃（278）が出土した。北壁には柱穴が認められた。

ＳＫ１（第20図　図版15）

谷部で６号段状遺構上方の斜面上に位置する。平面形は円形で規模は長軸100㎝、短軸96㎝、深さ116㎝を測る。埋土は炭化種子を含む明黄褐色砂質土で、弥生土器の壺口縁（39）と石材が底面で出土した。

ＳＫ33（第20図　図版10、15）

谷部上位のやや急な斜面上に位置する。平面形は円形で、規模は長軸131㎝、短軸123㎝、深さ139㎝を測る。北壁のみがわずかにオーバーハングし、他の壁面は垂直又はやや開いて立ち上がる。平坦な底面の中央に径30㎝、深さ８㎝の柱穴が確認された。底面から40㎝のところで、地山土を含む貼り床が行われており、この上面から弥生土器（93～106）、剥片が出土した。

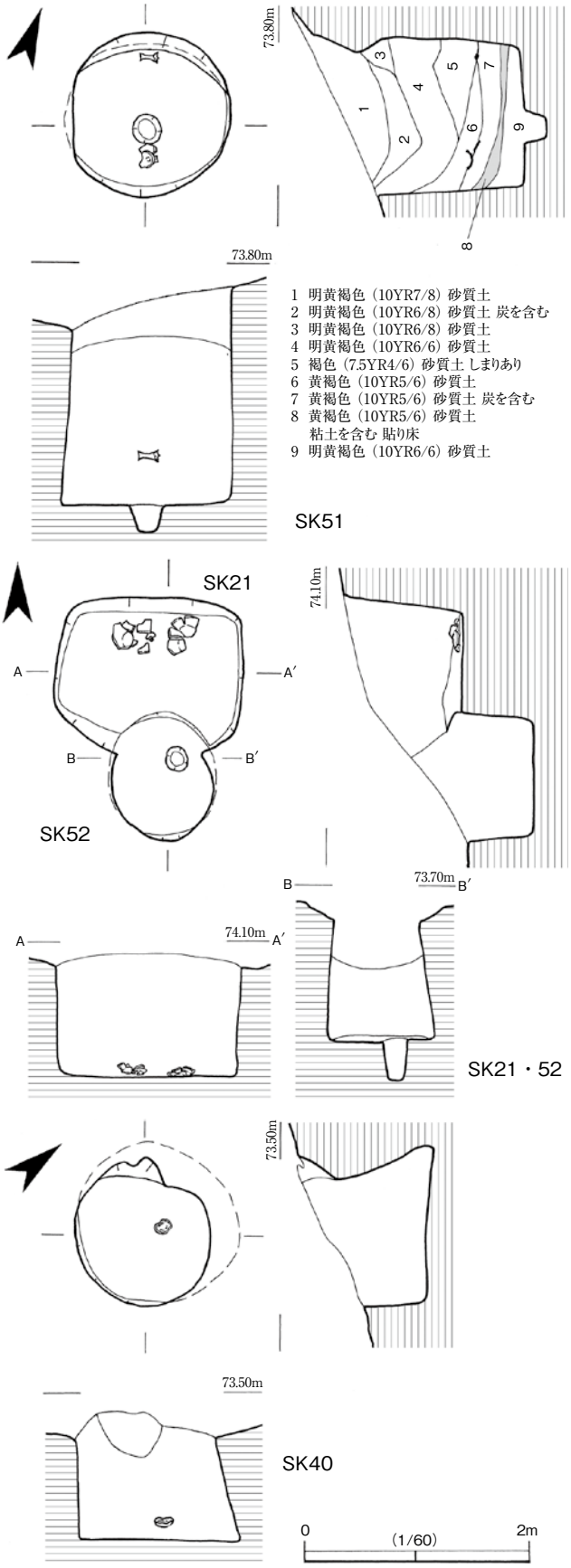
ＳＫ23（第20図　図版15）

ＳＫ１と並ぶように斜面上に位置する。平面形は円形で長軸124㎝、短軸114㎝、深さ70㎝を測る。南壁面の一部は残存していない。埋土は褐色砂質土で、弥生土器片と炭化種子が出土した。

ＳＫ80（第35図　図版20）

谷部下方に位置し、ＳＤ５と重複している。土層観察では切り合い関係は確認できず、両者は併存していたとも考えられる。規模は長軸138㎝、短軸116㎝、深さ114㎝で、平面形は円形である。ＳＫ80の斜面上位側に位置するＳＤ３、４は、ＳＫを取り巻くように位置することから、上位からの流水などを防ぐ目的があったとみられる。弥生土器片が出土。

ＳＫ68（第35図　図版20）



第19図　Ⅳ地区ＳＫ実測図（7）

谷部下方に位置し、ＳＤ３・ＳＤ４と隣接するように位置する。規模は長軸140 ㎝、短軸84㎝、深さ71㎝で、平面形は長円形である。底面に柱穴がある。

ＳＫ36（第35図　図版20）

谷部中央付近に位置し、ＳＤ１がＬ字状に取り囲んだ中に位置する。規模は長軸112 ㎝、短軸87㎝、深さ20㎝で、平面形は方形である。斜面側の壁面は流出して残存していない。弥生土器片が出土した。

ＳＫ112 （第21図　図版15）

頂上部で３号段状遺構の緩やかな斜面上に位置し、焼土坑（ＳＫ119）の下部に検出された土坑である。平面形は丸みのある方形で、長軸193㎝、短軸は残存値で158㎝、深さ76㎝を測る。西側壁面は残存せず、底面には直径50㎝、深さ26㎝、13㎝の２つの柱穴が検出された。出土遺物は弥生土器（160～162）が出土した。単層で、オリーブ黄色～灰黄色の砂質土である。

ＳＫ83（第21図　図版15）

頂上部中央、４号段状遺構の中央に位置している。平面形は長円形で長軸148㎝、短軸90㎝、深さ125㎝を測る。壁面は北面がオ－バ－ハングする他は、垂直に立ち上がっている。埋土はにぶい黄色砂質土で、弥生土器片が出土した。

ＳＫ56（第21図　図版15）

頂上部中央の尾根筋に位置する。平面形は長方形で長軸190㎝、短軸160㎝、深さ55㎝を測る。弥生土器片が出土した。

ＳＫ62（第22図　図版16）

頂上部中央で３号段状遺構の西の端に位置する。平面形は長円形で、規模は長軸127 ㎝、短軸95㎝、深さ70㎝を測る。東壁側が残存していない。埋土はにぶい黄色砂質土で粗砂を含む単層である。弥生土器（124）が出土した。

ＳＫ２（第22図　図版16）

頂上部中央に位置する。平面形は長円形で、規模は長軸95㎝、短軸94㎝、深さ80㎝を測る。壁面は北壁でオーバーハングし、その他は垂直に立ち上がる。埋土は２層に分かれており、上層からは弥生土器（40～45）が破棄された状態で出土した。

ＳＫ67（第22図　図版16）

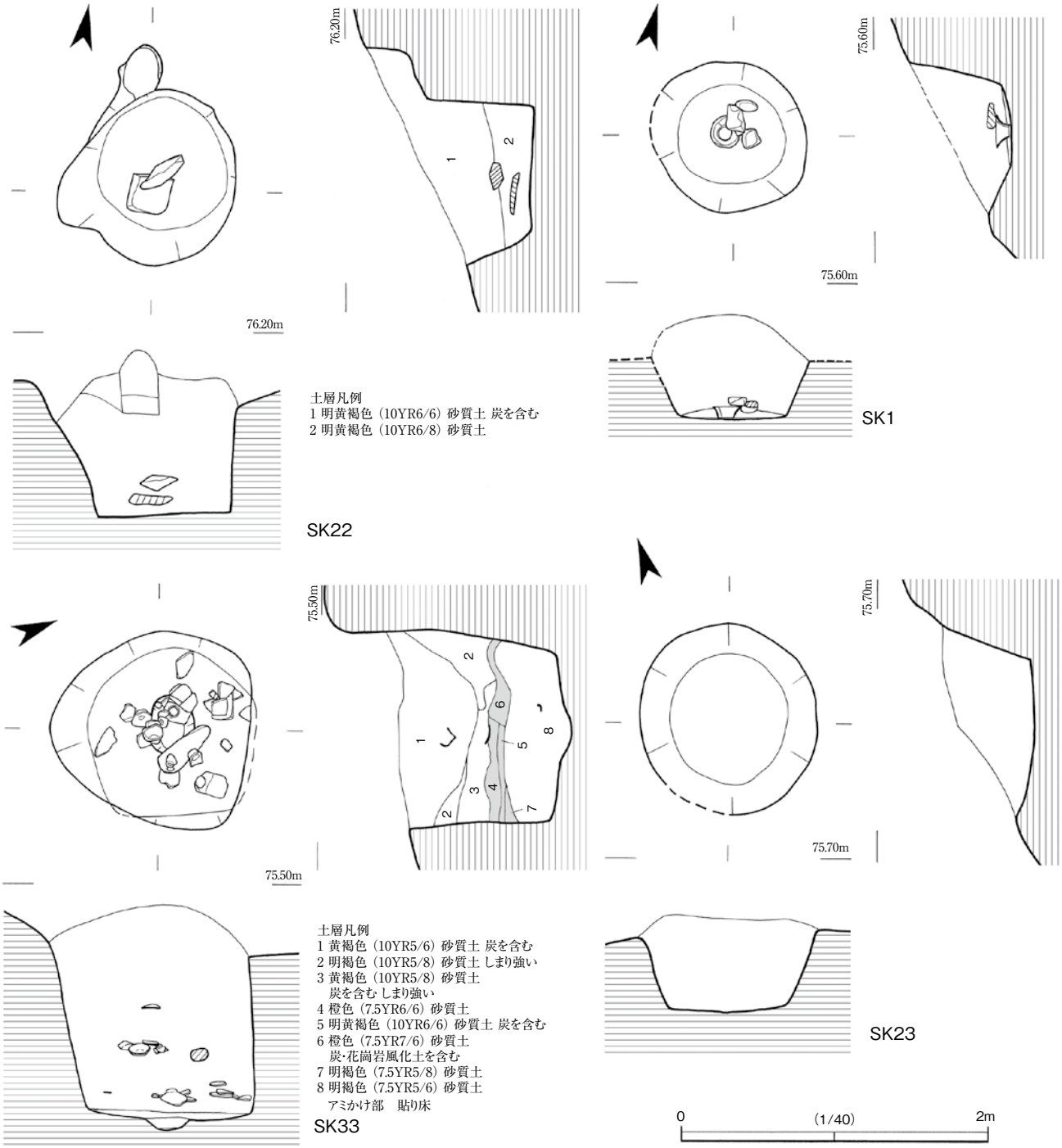
頂上部中央で、３号段状遺構の西の端に位置する。平面形は長円形で、規模は長軸148 ㎝、短軸127 ㎝、深さ112 ㎝を測る。壁面は西側でわずかにオーバーハングする。埋土はにぶい黄色砂質土で粗砂を含む単層である。弥生土器（119～123）が出土した。

ＳＫ３（第22図　図版16）

頂上部中央の尾根筋平坦面に位置する。平面形は不整円形で、長軸84㎝、短軸76㎝、深さ76㎝を測る。壁面は北壁でオーバーハングしている。埋土は２層に分かれているが、下層より弥生土器（46～48）が破棄された状態で出土した。ＳＫ２とＳＫ３は位置関係や形状、さらに土器出土状況が類似しており、土坑として利用されなくなった後、土器等の廃棄場所となったとみられる。

ＳＫ15（第９図　図版20）

頂上部中央で、ＳＢ４焼失後につくられた土坑である。規模は長軸91㎝、短軸90㎝、深さ28㎝で、



第20図　Ⅳ地区ＳＫ実測図（8）

平面形は不整形である。底面に柱穴を検出した。

ＳＫ79（図版20）

頂上部中央のＳＢ９と切り合う。規模は長軸100 ㎝、短軸残存値79㎝、深さ30㎝で平面形は円形である。遺物の出土がみられず、時期は不明である。

ＳＫ84・85（第23図　図版16）

頂上部中央の西側緩斜面に位置する。ＳＫ84は方形で、長軸129㎝、短軸110㎝、深さ86㎝を測る。ＳＫ85は不整円形で、長軸135㎝、短軸130㎝、深さ116㎝を測り、両者は深さで30㎝の差がある。

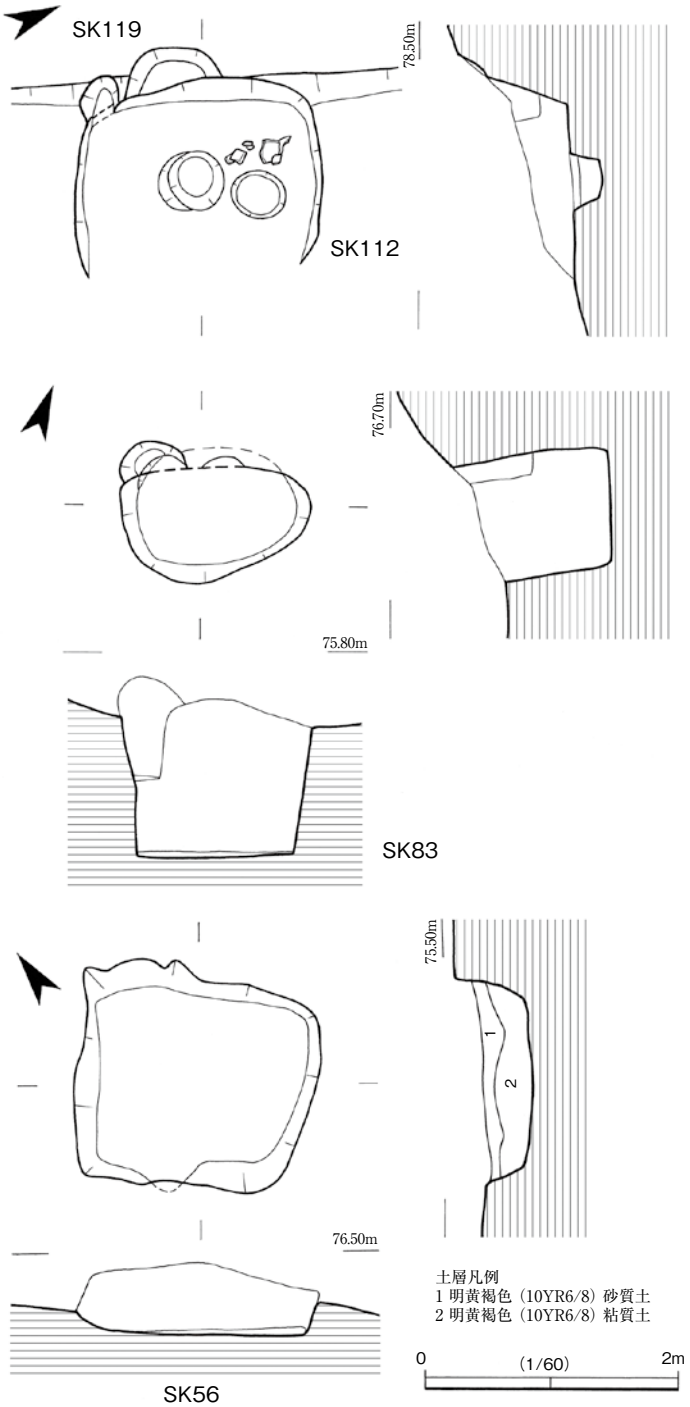
ＳＫ85は埋土中位で黒色の炭層が薄く堆積する。ＳＫ84は灰オリーブ色の単層である。位置関係から両者は併存していた可能性がある。ＳＫ84から弥生土器（125）が出土。

ＳＫ77・87（第23図　図版16）

頂上部からの張り出し部で、３号段状遺構の平坦面にある。ＳＫ87は平面形が正方形で長軸106㎝、短軸104㎝、深さ50㎝を測る。ＳＫ77は平面形が長円形で、長軸136㎝、104㎝、深さ88㎝を測る。２つの土坑は深さは異なるものの、軸線が南北で揃っていることや平面形が似るなど共通点があり、先のＳＫ84・85と同様に併存していた可能性がある。埋土の土色は、ＳＫ87は灰オリーブ色粗砂土で弥生土器と炭・焼土を含み、ＳＫ77は浅黄色粗砂土で出土遺物はない。

ＳＫ43（第24図　図版16）

頂上部西側の平坦部と斜面の変換点に位置する。検出した平面形は不整形で細長い土坑であるが、斜面側への土砂流出により遺構の残存状況は悪く、本来の形状をとらえることは出来なかった。長軸346㎝、短軸152㎝、深さ68㎝を測る。埋土はにぶい黄橙色砂質土で炭を含む単層である。土坑南端から弥生時代終末期の土器群（51～55）がまとまって出土した。なお今回の調査で終末期の土器が出土したのは、ＳＫ43のみである。

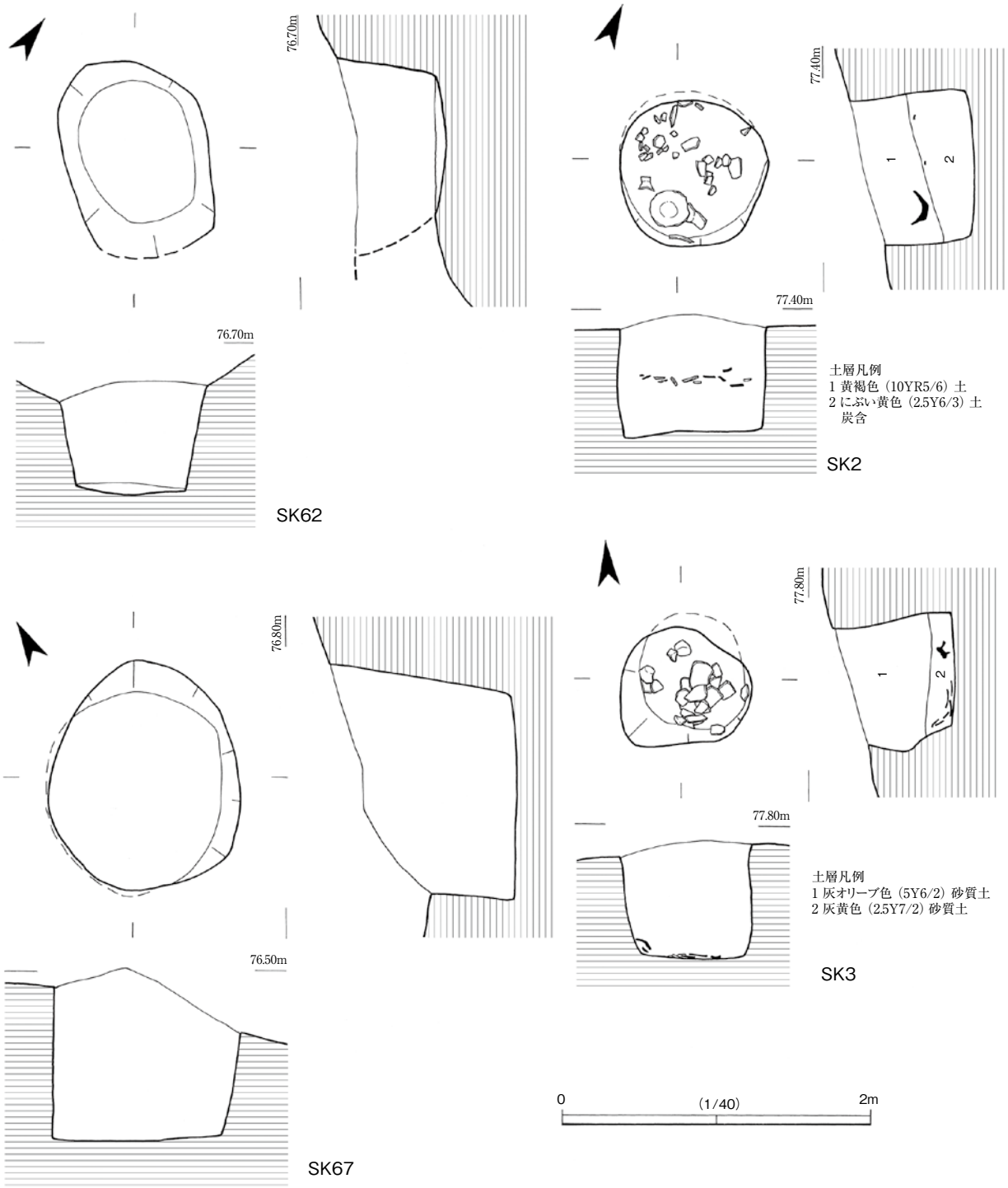


第21図　Ⅳ地区ＳＫ実測図（9）

ＳＫ４（第24図　図版17）

頂上部西側の緩斜面に位置する。平面形は円形で長軸103㎝、短軸97㎝、深さ99㎝である。埋土は灰黄色土の単層で炭を含む。壁面はわずかに中膨れで、南側には壁に対して直交する直径22㎝、奥行き21㎝の小坑が穿ってある。覆屋または土坑を使用する際の支柱のためのものとみられる。弥生土器（49・50）が出土した。

ＳＫ57（第24図　図版17）

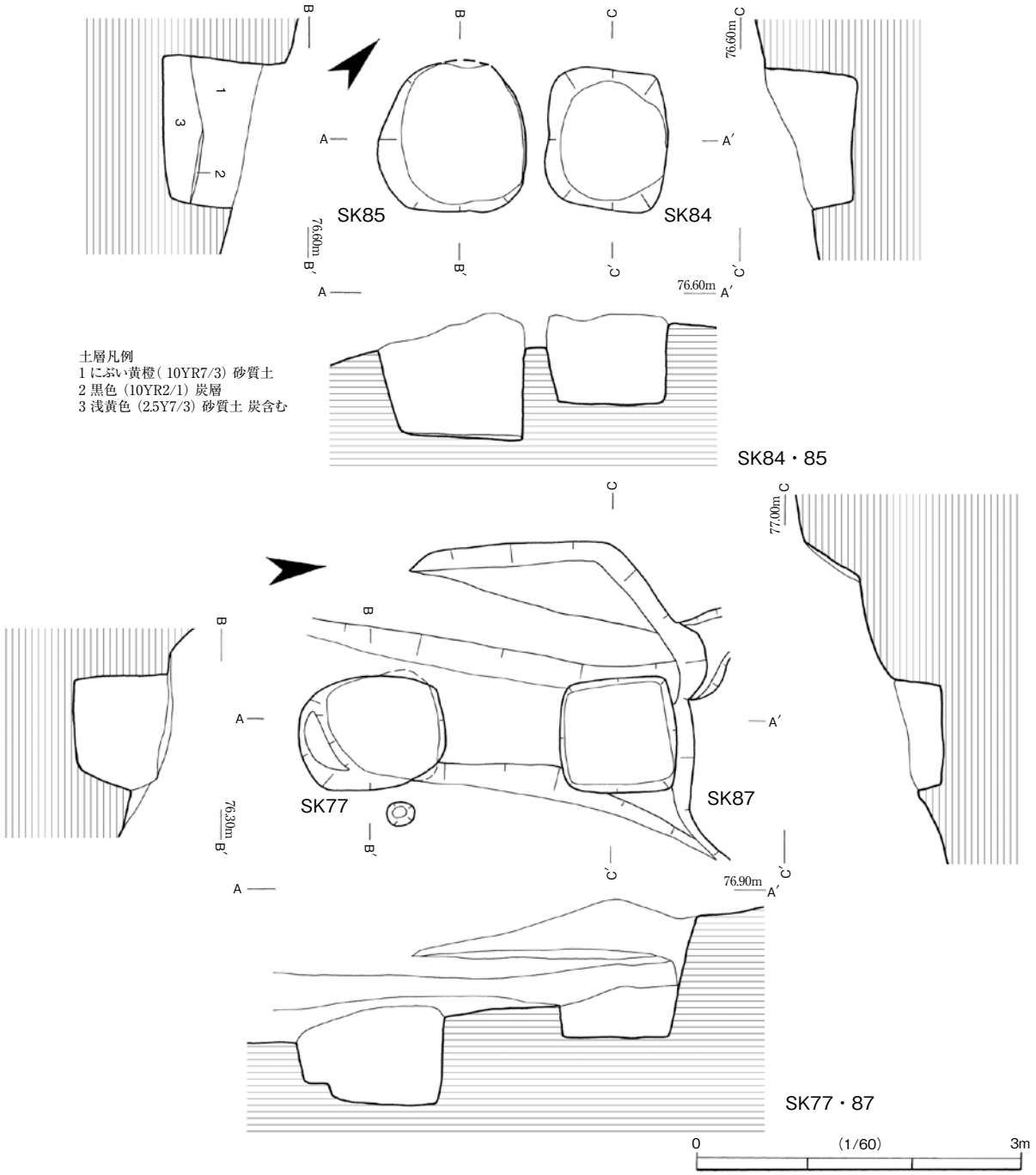


第22図　Ⅳ地区ＳＫ実測図（10）

頂上部西側の平坦面に位置する。平面形は円形で長軸残存値83㎝、短軸82㎝、深さ111㎝を測る。北側は樹根による攪乱を受けている。壁面は全体的にオーバーハングして中位で膨らみを持つ。底面から50㎝のところで厚さ13㎝のしまった橙色砂質土の堆積が検出された。土坑の再利用を目的とした貼り床と考えられる。弥生土器片が出土した。

ＳＫ42（第24図　図版17）

西側頂上部のＳＢ８の北隣に位置する。平面形は円形で長軸126㎝、短軸120㎝、深さ109㎝を測る。壁面は外傾して立ち上がる。床面中央で弥生土器の壺（86）が出土した。



第23図　Ⅳ地区ＳＫ実測図（11）

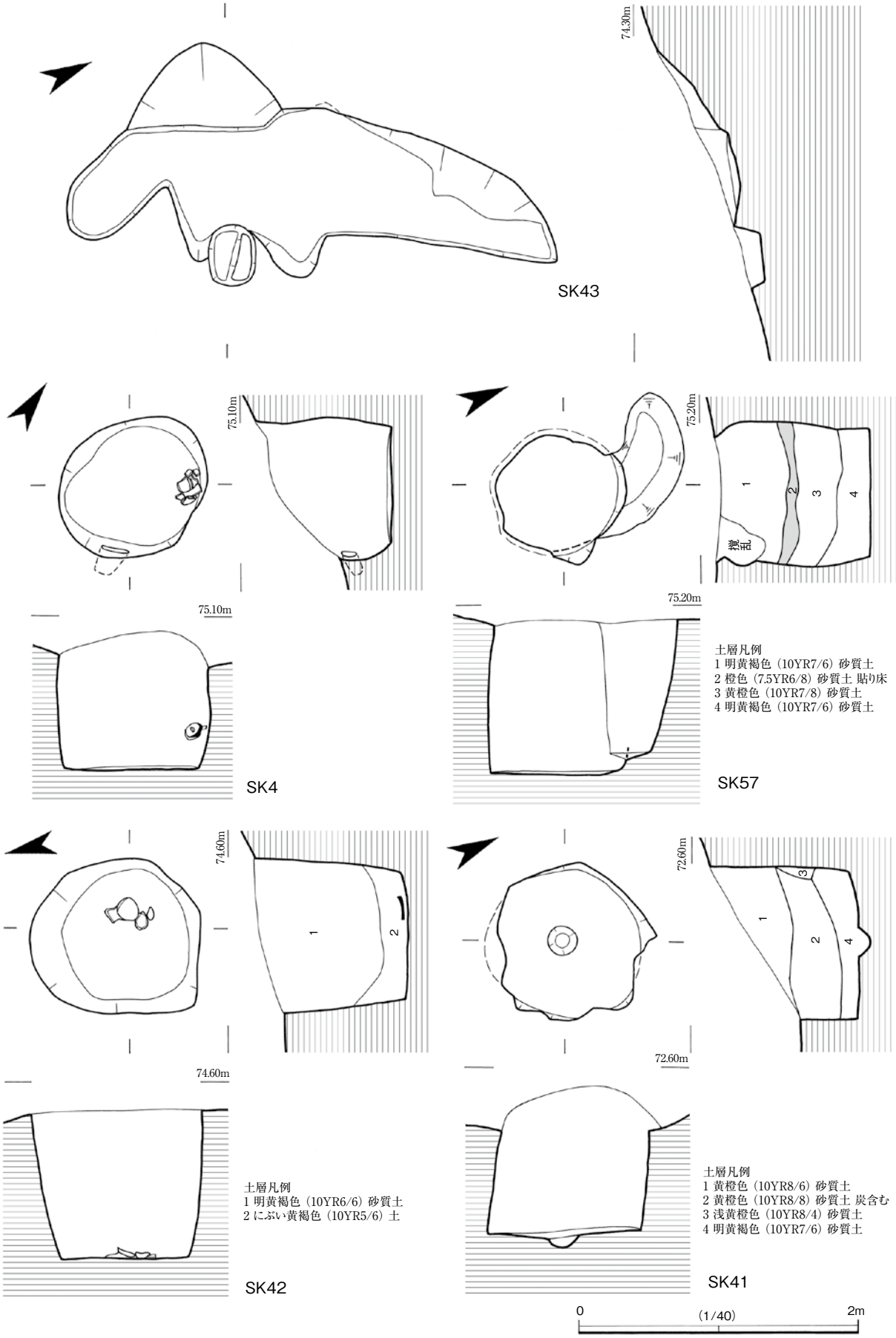
ＳＫ41（第24図　図版17）

頂上部西側、７号段状遺構の北端斜面上に位置する。土坑上面は崩落より不整な形となるが、本来の平面形は円形であるとみられる。長軸112㎝、短軸110㎝、深さ110㎝を測る。谷側の壁面はオーバーハングし、底面中央には径22㎝、深さ７㎝の柱穴がある。弥生土器片が出土した。

ＳＫ66（第25図　図版17）

頂上からの張り出し部にある４号段状遺構内に位置する。平面形は円形で、径が105㎝、深さ107㎝を測る。壁は山側のみオーバーハングし、他はほぼ垂直に立ち上がる。遺物は弥生土器片と蛤刃石斧（313）が出土した。埋土は浅黄色粗砂土の単層である。

ＳＫ95（第25図　図版17）



第24図　Ⅳ地区ＳＫ実測図（12）

４号段状遺構上にあり、ＳＢ11の南西に位置する。平面形は長方形で長軸109㎝、短軸80㎝、深さ84㎝を測る。底面はわずかに中央が凹む。壁が全面垂直に立ち上がり、直方体の様を呈す。埋土は灰黄色砂質土で炭を含む。弥生土器片が出土した。

ＳＫ103（第25図　図版17）

ＳＢ11の南に位置する。平面形は不整な長円形で長軸140㎝、短軸124㎝、深さ113㎝を測る。底面が平坦で、壁面は外傾して立ち上がる。埋土は浅黄色粗砂土の単層である。土坑からは弥生土器（166～172）が出土した。

ＳＫ97（第25図　図版17）

ＳＢ11の南東に位置する。平面形は正方形で長軸105㎝、短軸100㎝、深さ107㎝を測る。底面がほぼ平坦で、壁面は垂直に立ち上がる。埋土は黄褐色砂質土単層である。

ＳＫ96（第25図　図版18）

ＳＢ11の北東に位置にする。平面形は正方形で長軸136㎝、短軸126㎝、深さ88㎝を測る。底面は平坦で、山側の壁面は垂直に立ち上がり、谷側の壁面はやや外傾する。埋土は、にぶい黄色砂質土で炭を含む。出土遺物は弥生土器（173～176）、炭化米が出土した。

ＳＫ64・115（第25図　図版18）

頂上からの張り出し部尾根筋で、４号段状遺構の東端に位置する。ＳＫ64は平面形は長円形で長軸162㎝、短軸152㎝、深さ147㎝を測る。底面はほぼ平坦で、山側の壁（西壁）がやや外傾し、谷側の壁が垂直に立ち上がる。炭が多く混じる第４層付近で、弥生土器（107～111）が出土した。ＳＫ115は平面形は長円形で、長軸112㎝、短軸72㎝、深さ37㎝を測る。底面は平坦で壁面はほぼ垂直に立ち上がっている。埋土は、黄褐色砂質土で遺物は出土しない。両者の新旧関係は、ＳＫ115が新しく掘り込まれている。

ＳＫ８（第26図　図版18）

西側斜面部の５号段状遺構南側には、土坑が集中し、その中のひとつである。平面形は長円形で長軸141 ㎝、短軸99㎝、深さ97㎝で、谷斜面側では壁面は20㎝しか残存していない。底面には長軸40㎝、短軸30㎝、深さ10㎝の凹みが検出された。埋土は２層で、下層の褐灰色砂質土には炭を含む。弥生土器片が出土した。

ＳＫ16（第26図　図版18）

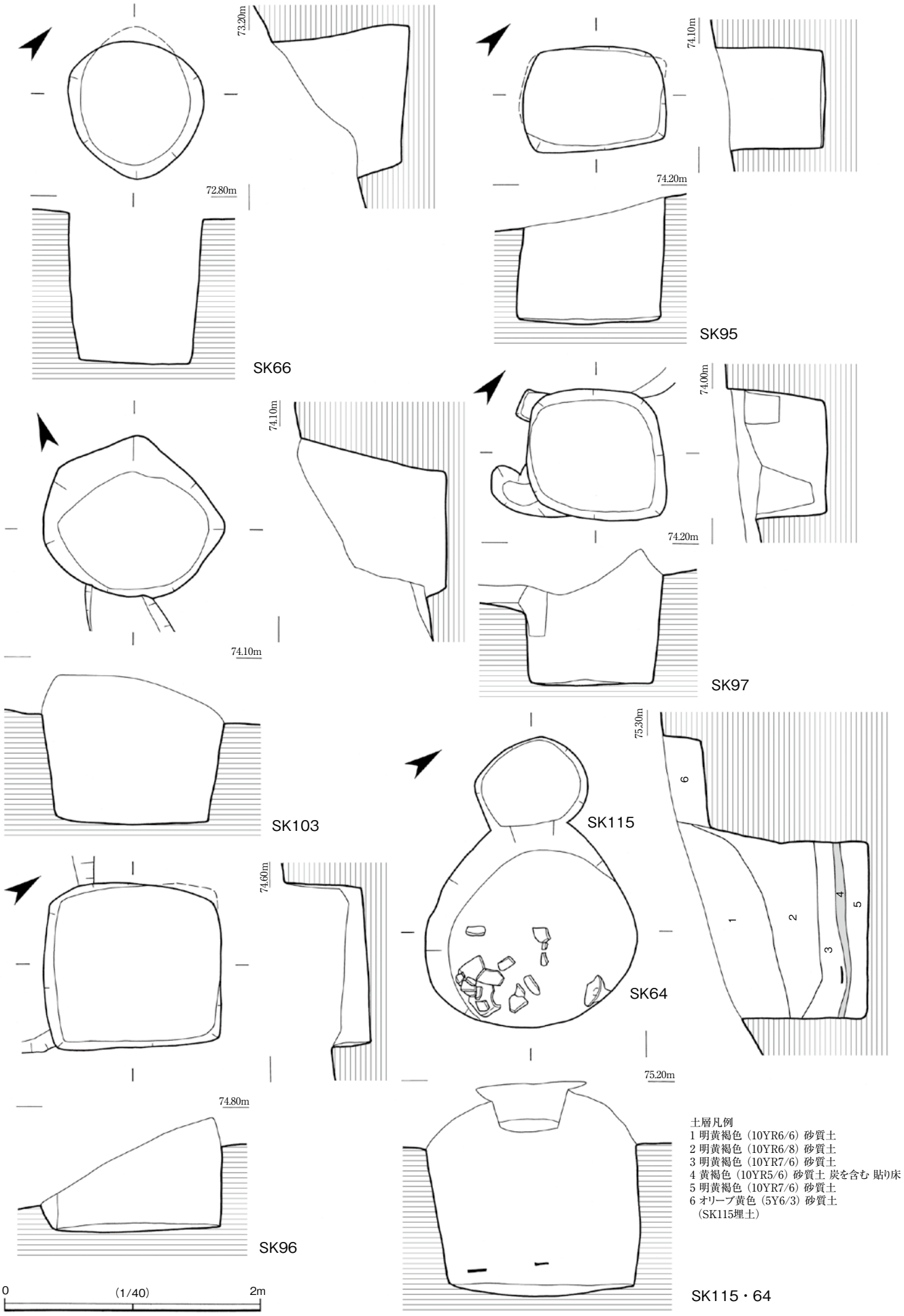
５号段状遺構南側の土坑群内に位置する。平面形は長方形で長軸119 ㎝、短軸99㎝、深さ113 ㎝で、谷斜面側では壁面は10㎝しか残存していない。底面の中央付近に浅い柱穴が検出された。埋土は２層である。弥生土器片が出土した。

ＳＫ９（第26図　図版18）

５号段状遺構南側の土坑群内に位置する。上面平面形は長円形であるが、底面は方形である。長軸154㎝、短軸 140㎝、深さ 139㎝を測る。埋土は暗灰黄色砂質土の単層である。弥生土器（36～38）、水晶片が出土した。

ＳＫ 110（第26図　図版18）

５号段状遺構南端に３基の土坑（ＳＫ110、111、116）が集中し、そのうちのひとつである。平面形



第25図　Ⅳ地区ＳＫ実測図（13）

は長円形で、長軸103 ㎝、短軸92㎝、深さ53㎝を測る。谷側で接する柱穴は、土坑の支柱等であった可能性がある。埋土は明黄褐色砂質土で地山の土を含んでいる。

ＳＫ 111（第26図　図版18）

５号段状遺構南端の土坑群内に位置する。西側斜面部で５号段状遺構の西端に位置する。ＳＫ110とＳＫ111 とＳＫ116 が隣接する。平面形は円形で、長軸122 ㎝、短軸107 ㎝、深さ72㎝を測る。底面に20㎝のしっかりした柱穴が検出された。埋土は明黄褐色砂質土で地山の土を含んでいる。

ＳＫ 116（第26図　図版18）

５号段状遺構南端の土坑群内に位置する。ＳＫ110 とＳＫ111 とＳＫ116 が隣接する。平面形は長円形で、長軸127 ㎝、短軸123 ㎝、深さ153 ㎝を測る。頂上部側壁面は大きくオーバーハングしフラスコ状となる。谷側には柱穴が接し、単独であることから、ＳＫ116に関わる支柱等があった可能性がある。埋土は浅黄橙色砂質土が中位まで堆積しており、この深さまで埋め戻された可能性がある。弥生土器（181）が出土した。

ＳＫ５（第27図　図版19）

５号段状遺構中央の土坑群内に位置する。平面形は長円形で、長軸162㎝、短軸127㎝、深さ80㎝を測る。底面は緩やかに傾斜するがほぼ平坦である。埋土は灰白色砂質土で単層、弥生土器片が出土した。ＳＫ５は急斜面に構築されたため、まず頂上側を径約２ｍほど半円形にカットし、緩斜面にしたうえで構築された土坑とみられる。そのとき土坑に南側に接するように２ないし３段の小テラスをつくり出し、昇降用の段差として利用されたとみられる。さらにこの段差を降りたところに、幅40㎝の二股に分かれた溝状の掘り込みがある。途中で崖面によって寸断された格好となるが、５号段状遺構へ降りる通路の一部とみることもできる。弥生土器片が出土した。

ＳＫ99（第28図　図版12）

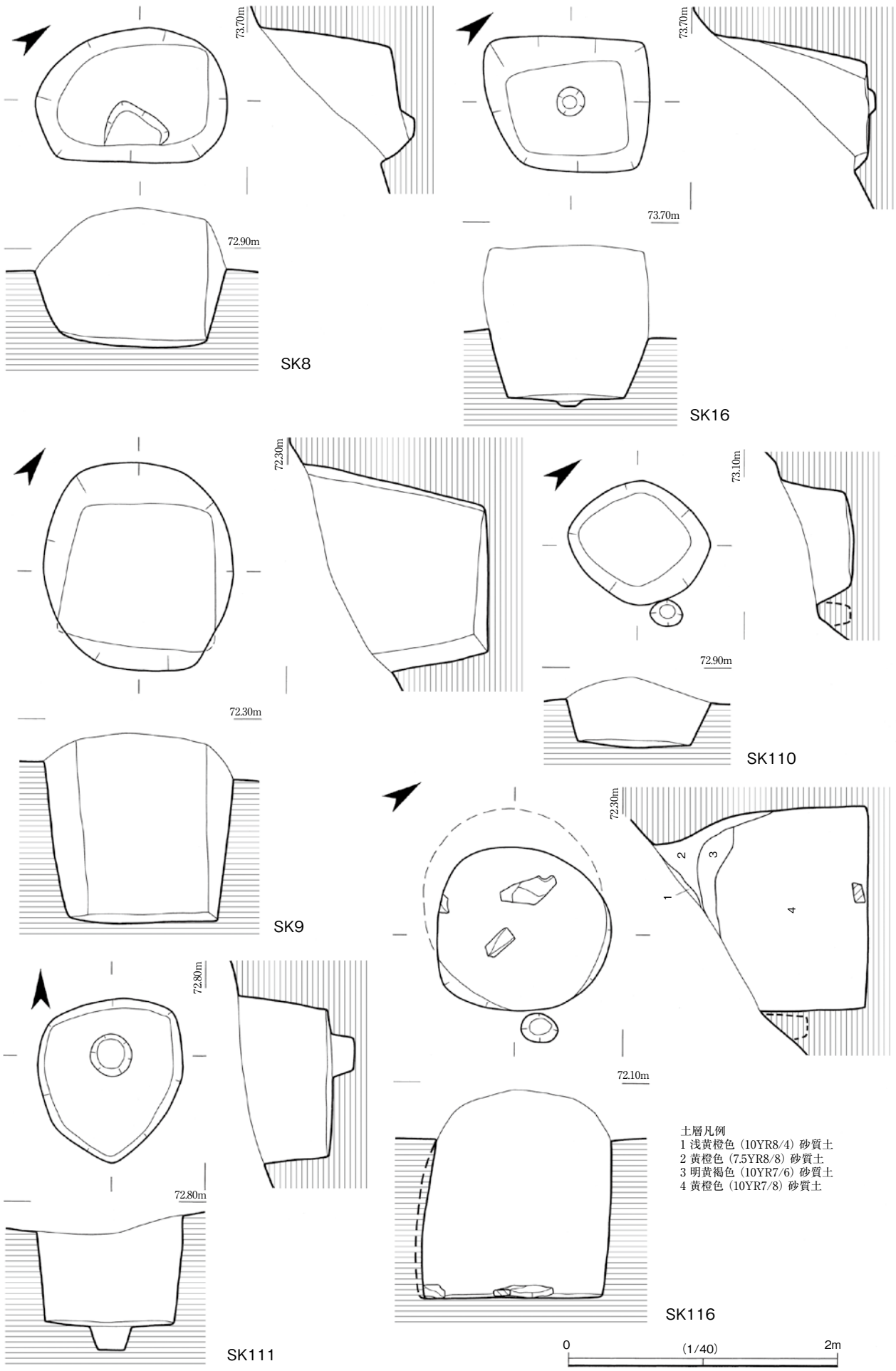
頂上からの張り出し部で、５号段状遺構の東端に位置し、ＳＢ10に隣接する。平面形は不整円形で、長軸151 ㎝、短軸149 ㎝、深さ74㎝を測る。底面上に厚さ15㎝にわたって炭化米を多量に含んだ黒褐色砂質土が検出された。この層は底面全体に広がり、炭化米の出土量は7.2㍑におよぶ。層中からは弥生土器片も混在し、特に炭化米を繊維質などの袋に詰めたような痕跡はみあたらず、裸の状態でまとめて廃棄したと考えられる。なお壁面には被熱の痕跡がないため、イネの炭化がどこで行われたかについては明らかでない。弥生土器（179・180）が出土した。

ＳＫ69（第29図　図版19）

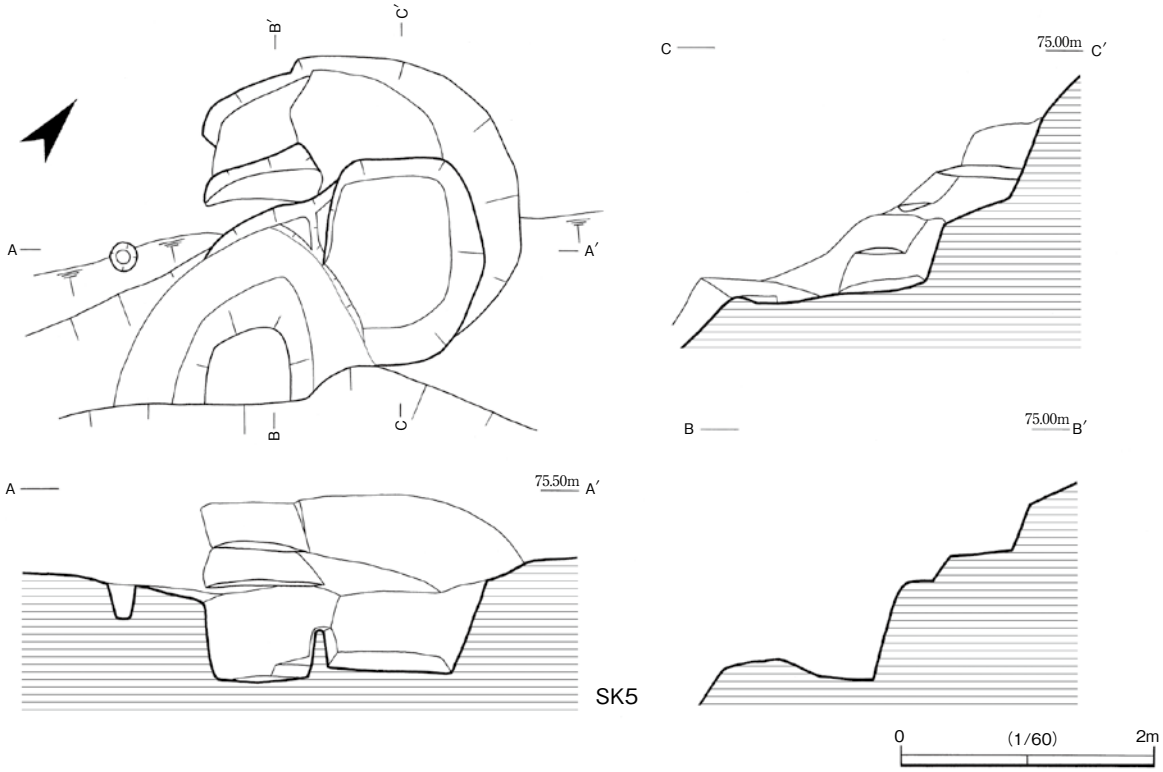
西側斜面部で、10号段状遺構に位置する。平面形は長円形で、長軸145 ㎝、短軸122 ㎝、深さ108㎝を測る。壁面はほぼ垂直で、底面は平坦である。この底面付近の土層は炭を多く含んでおり、ここから弥生土器（127～137）が出土した。

ＳＫ59（第29図　図版19）

西側斜面部で調査区の西端に位置する。平面形は円形で、長軸84㎝、短軸78㎝、深さ72㎝を測る。壁面はほぼ垂直で、底面は平坦である。埋土は明黄褐色砂質土の単層で、炭を多く含む。この土坑からは、弥生土器のミニチュア土器（67）が出土したが、この周辺からは遺構検出時に同様のミニチュア土器（207・208）が出土しており、関連性が指摘される。



第26図　Ⅳ地区ＳＫ実測図（14）



第27図　Ⅳ地区ＳＫ実測図（15）

ＳＫ48（第29図　図版19）

西側斜面部で８号段状遺構内に位置する。平面形は不整形で、長軸139 ㎝、短軸117 ㎝、深さ108 ㎝を測る。壁面は斜面の高い側で、ややオーバーハングしている。弥生土器（60）が出土した。

ＳＫ50（第29図　図版19）

西側斜面部で11号段状遺構内の西端に位置する。平面形は円形で、長軸92㎝、短軸84㎝、深さは西壁で106 ㎝、東壁で10㎝を測る。弥生土器片（56～58）、石鏃（279）が出土した。

ＳＫ61（図版20）

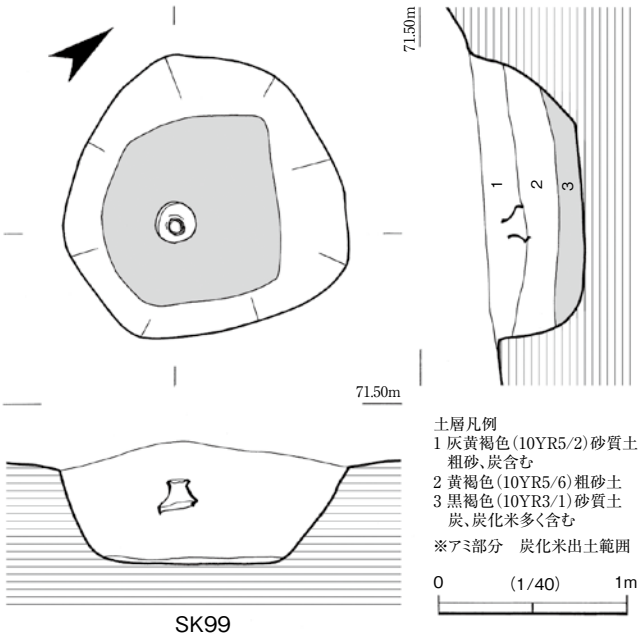
西側斜面部で、11号段状遺構の東端にあり、ＳＸ118内に位置する。規模は長軸96㎝、短軸78㎝、深さ20㎝で、平面形は長方形である。

ＳＫ53（第29図　図版19）

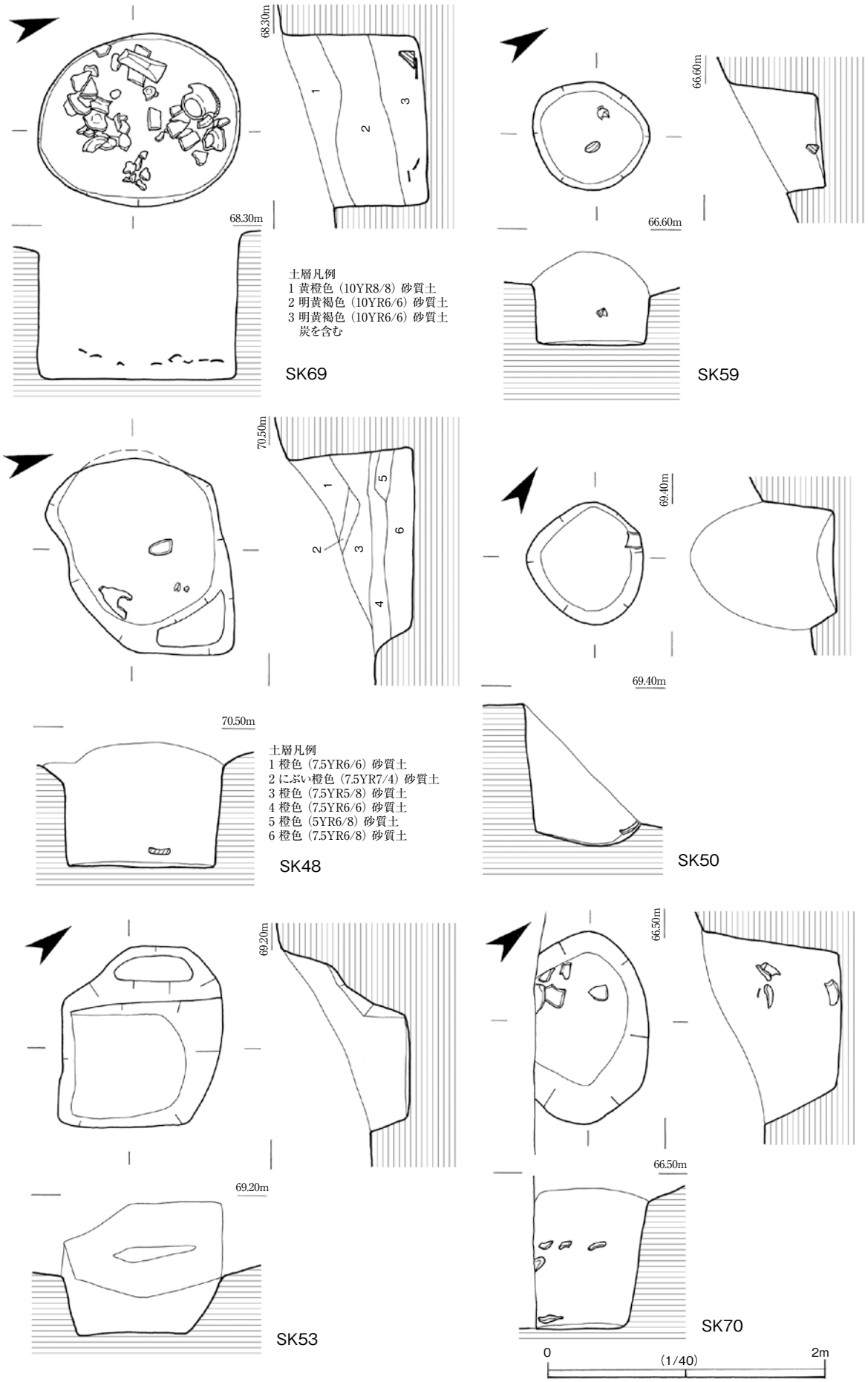
西側斜面部で10号段状遺構内の北端に位置する。平面形は方形で、頂上側に幅20㎝のテラス状の段が付属する。長軸130 ㎝、短軸114 ㎝、深さ97㎝を測る。埋土は明黄褐色砂質土である。弥生土器（61～64）が出土。

ＳＫ70（第29図　図版19）

西側斜面部で、調査区のもっとも西側に



第28図　Ⅳ地区ＳＫ実測図（16）



第29図　Ⅳ地区ＳＫ実測図（17）

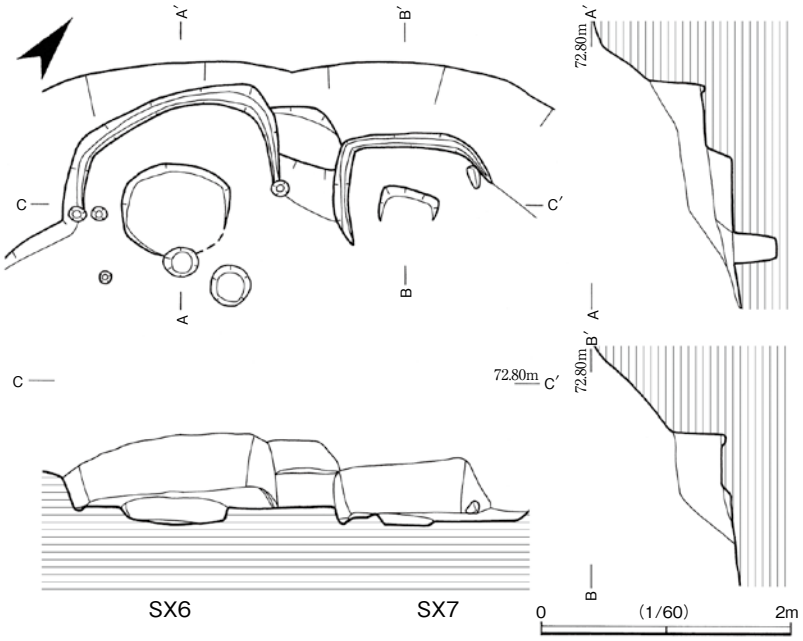
位置する。南半部は調査区外に埋存する。平面形は長円形で、長軸139 ㎝、短軸81㎝、深さ107 ㎝を測る。埋土は橙色砂質土で、弥生土器片が出土した。

ウ　不明遺構（ＳＸ）

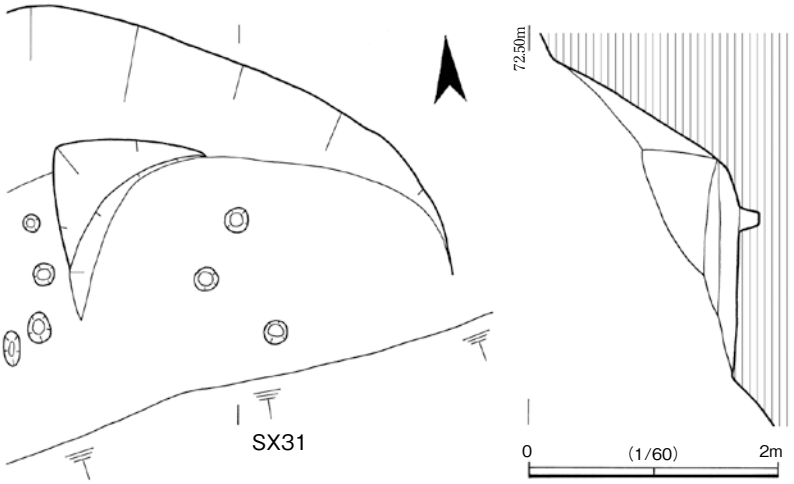
段状遺構内において、方形の段カットをして小面積の区画を設けているものを、ここでは性格不明遺構として扱う。当初は土坑として調査したが、土坑のように斜面低位側に壁面の立ち上がりはない。規模も他の土坑と比較して大型であるが、住居跡ほどの広さはなく、また住居跡を示す柱穴や周溝などは伴わないなどの特徴がある。遺構の性格については明らかでないが、今後の資料増加を待って検討したい。

ＳＸ６　（第30図　図版22）

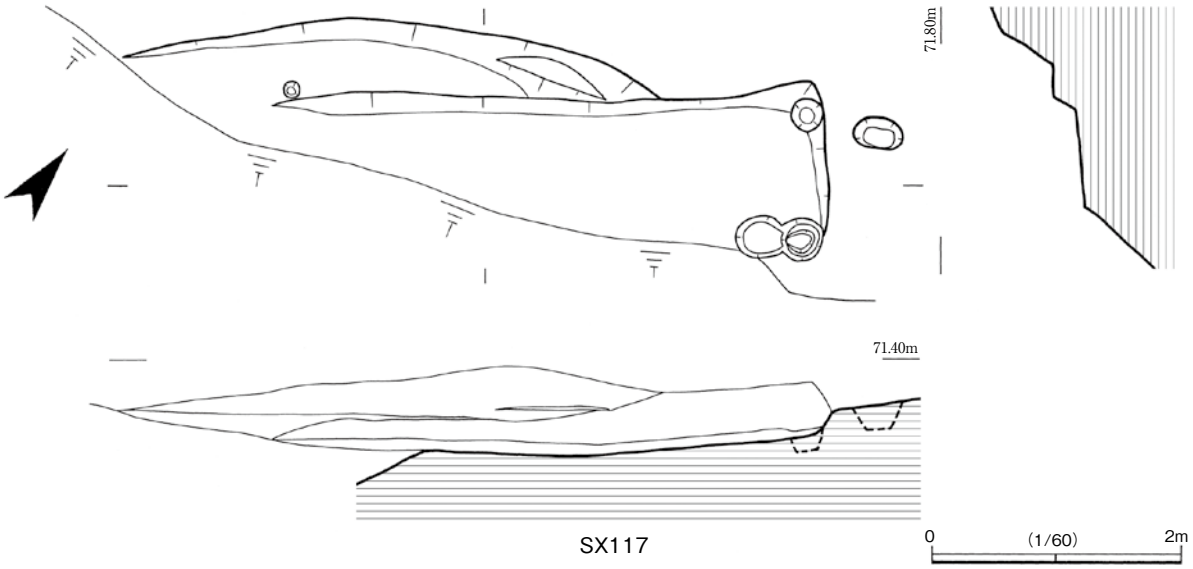
５号段状遺構の中央に位置している。隅丸方形のコの字形で、



第30図　Ⅳ地区ＳＸ実測図（1）



第31図　Ⅳ地区ＳＸ実測図（2）



第32図　Ⅳ地区ＳＸ実測図（3）

残存規模は、長軸が168㎝、短軸が148㎝、深さ71㎝を測る。壁面に沿って浅い溝が巡り、中央には長軸85㎝、短軸74㎝、深さ20㎝の土坑が位置する。また両端には小さな柱穴がある。弥生土器（28～32）が出土している。

ＳＸ７　（第30図　図版22）

ＳＸ６の東側に隣接している。隅丸方形のコの字形で、規模は長軸が125㎝、短軸が90㎝、深さ56㎝を測る。周溝がめぐり、長軸47㎝、短軸39㎝、深さ９㎝の小土坑が認められる。弥生土器（33～35）が出土している。ＳＸ６と平面形が類似することから、一連の遺構である可能性がある。

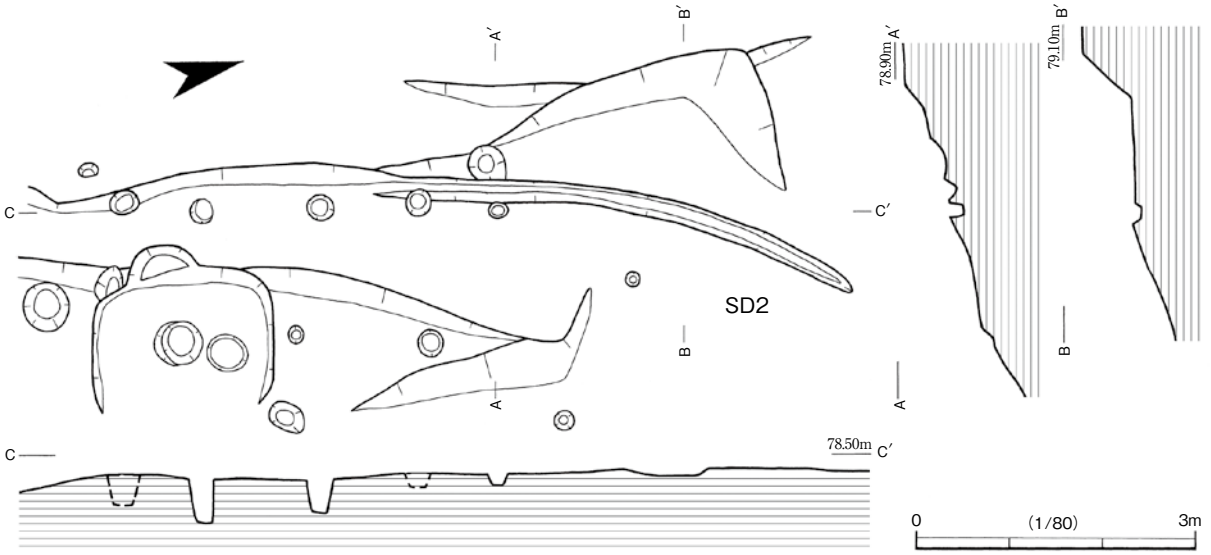
ＳＸ31　（第31図　図版21）

５号段状遺構の中央に位置する。平面コの字形で、西側コーナーは方形であるが、東側コーナーは円形である。規模は長軸1.5ｍ、短軸70㎝、深さ1.8ｍを測る。平坦面には小柱穴があるが、遺構に伴うかどうかは不明である。

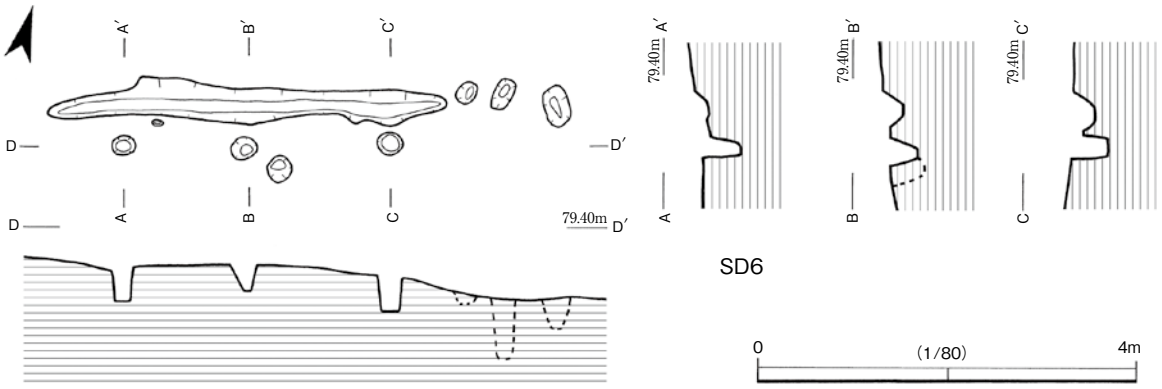
ＳＸ117　（第32図　図版21）

５号段状遺構の東側に位置する。全長5.2ｍ、幅0.4～1.2ｍで、段差15㎝で上下２段の平坦面をもつ。東側に４つの柱穴があり、径25～40㎝、深さ15～25㎝を測る。

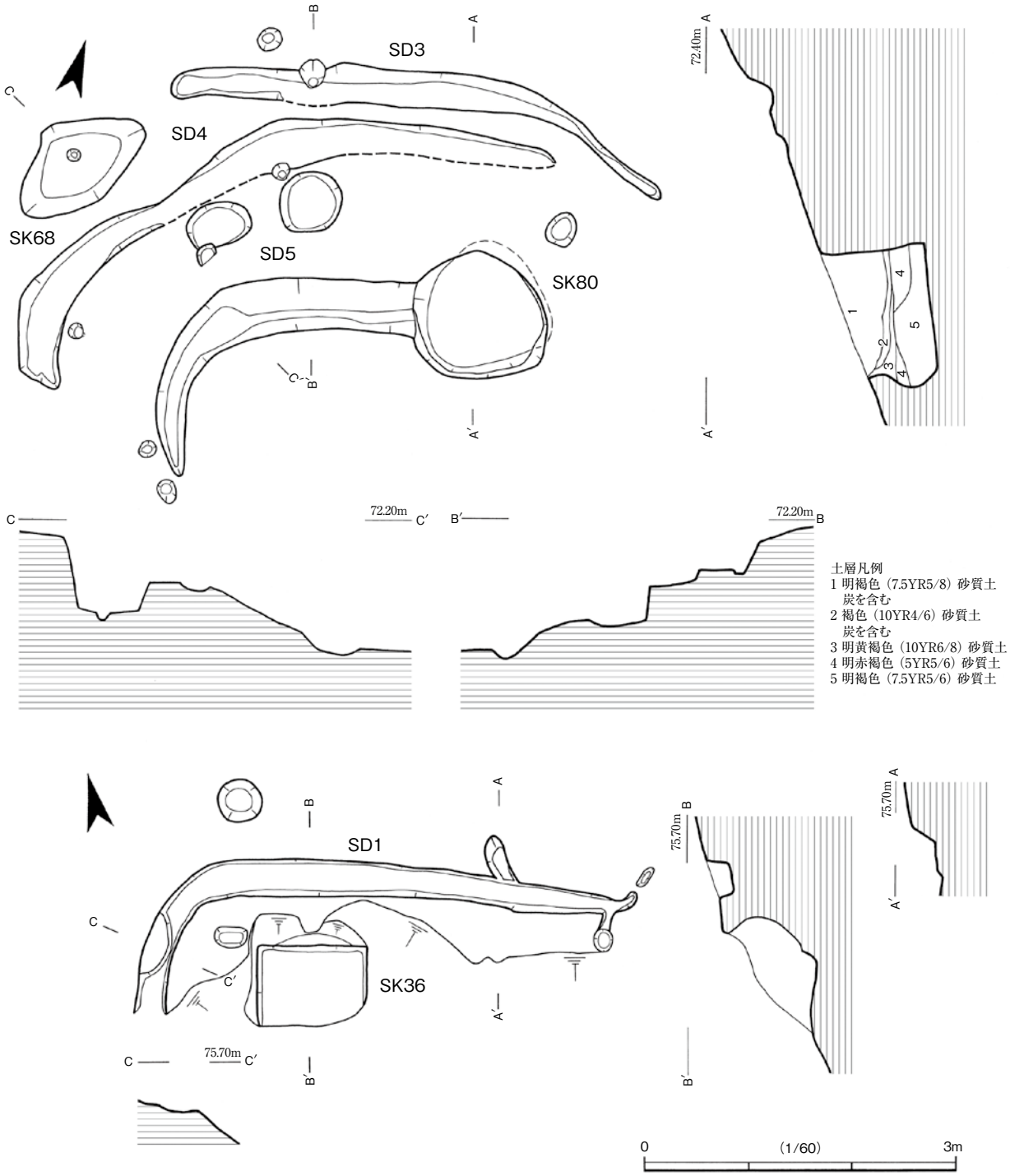
ＳＸ118　（第10図　図版９）



第33図　Ⅳ地区ＳＤ実測図（1）



第34図　Ⅳ地区ＳＤ実測図（2）



第35図　Ⅳ地区ＳＤ実測図（3）

11号段状遺構の東側で、ＳＢ７に重複して位置するが、その新旧関係は明らかでない。方形の一角が確認され、残存規模は長軸260㎝、短軸230㎝、深さ60㎝である。底面に２つ柱穴を検出した。なおＳＸ118周辺を埋めて整地ＳＢ６の床面が構築されている。

エ　溝状遺構（ＳＤ）

溝状遺構は頂上部中央から東側と谷部に、６条検出された。このうち、ＳＤ１・３・４・５は谷部斜面に、等高線に沿うように孤状に掘り込まれている。谷部に掘られた土坑に対して、雨水や土砂の流入を防ぐことを目的にとして溝を巡らした可能性がある。

ＳＤ１（第35図　図版20）

ＳＫ36の上位に隣接してＬ字状に位置する。現存規模は長さ478㎝、幅28～34㎝、深さ21～25㎝を測る。位置関係からＳＫ36およびそれより下位の土坑に対して、雨水や土砂の流入を防ぐ目的でつくられたと考えられる。遺構内からは、弥生土器（183）が出土している。

ＳＤ２（第33図　図版20）

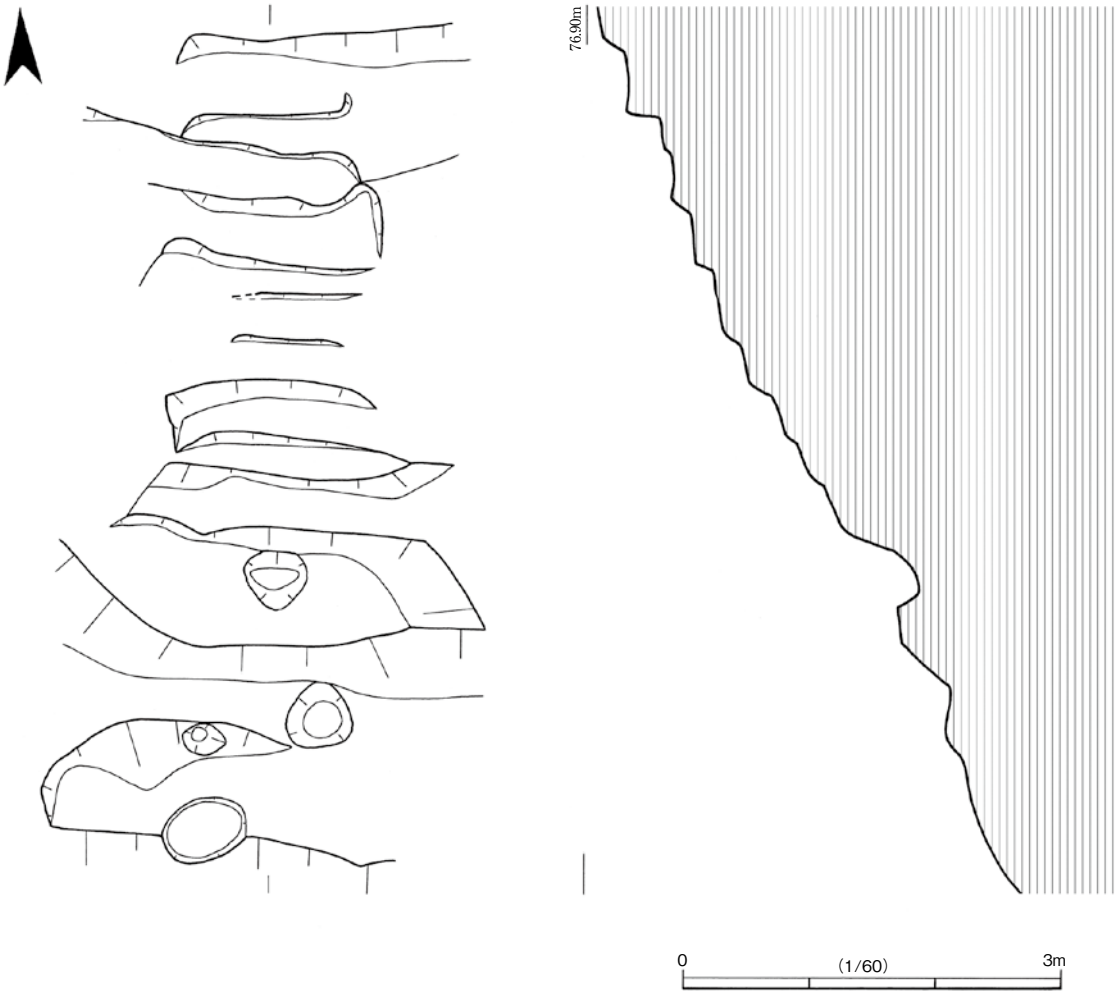
３号段状遺構の北側に位置する。現存規模は長さ518㎝、幅24㎝、深さ９～12㎝で北側に下っている。南側で0.8～1.2ｍの間隔で柱穴が並ぶことから柵跡である可能性があり、ＳＤ２とともに防御・区画の目的があった可能性がある。弥生土器（184）が出土している。

ＳＤ３・４・５（第35図　図版20）

谷部斜面の中位に位置し、３条の溝状遺構が孤状に掘られている。現存規模はＳＤ３は長さ476㎝、幅32～38㎝、深さ16～29㎝。ＳＤ４は長さ546㎝、幅39～47㎝、深さ13～25㎝。ＳＤ５は長さ264㎝、幅32～47㎝、深さ24～31㎝を測る。いずれも谷部を流れ落ちる雨水を脇に逃がすことを目的とし、下位にある遺構を保護したものとみられる。なお３条の溝状遺構が併存していたかどうかは明らかでない。

ＳＤ６（第34図　図版20）

頂上部東側に位置し、ＳＢ３の東側に隣接する。現存規模は長さ420㎝、幅28～38㎝、、深さ18～25㎝を測る。南西から北東に下っており、溝にそって約1.4ｍの間隔で径27㎝の柱穴が位置するこ



第36図　Ⅳ地区階段状遺構実測図

とから、排水のみでなく区画目的の溝であった可能性がある。

オ　階段状遺構（第36図　図版21）

谷部の中位、２号段状遺構と６号段状遺構に挟まれるように位置する。残存規模は、長さ6.5ｍ、幅1.5～３ｍで、比高差3.8ｍの間に、幅20～30㎝の段を13段検出した。段は地山を削りだしてつくっているが、表面が流れて明瞭でない部分もある。位置関係から、２号段状遺構と６号段状遺構を繋ぐように設けられ、谷部中央に配置された土坑や、頂上部と谷底とを結ぶ通路としての機能があったとみられる。遺構の時期は、明確に伴う遺物がないものの、２号段状遺構や６号段状遺構と併存しているとみられることから、弥生時代のものと判断される。谷部は急斜面であることから、このほかにも同様な昇降用の遺構があった可能性がある。なお階段状遺構ほど明瞭ではないものの、高低差のある場所に昇降のための簡単な段を２～４段設けているところがある。ＳＢ11、ＳＫ５に隣接して検出された段がそれにあたる。

カ　段状遺構

調査区内からは14基の段状遺構を確認した。段状遺構は、等高線に沿って斜面をＬ字状に削平し、平坦面をつくり出しており、長さは6.6～35.3ｍ、幅0.9～4.5ｍである。頂上部からの張り出し部には３段が設けられ、いずれも広範囲に掘削して段をつくり出している。また西側斜面の段状遺構は、急斜面であるためか、段の幅、長さが短いのが特徴である。これらの段状遺構には、平坦面に土坑を中心とする遺構が付設される。平坦面が狭い場合は、段状遺構の上位または下位に隣接する傾向があることから、通路として機能していたと考えられる。以下それぞれの段状遺構について述べる。

１号段状遺構（第４、38図　図版24、25）

ＳＢ３・５の南側に位置する。規模は長さ20.3m、平坦面幅2.5ｍを測る。細長く東西に広がり南方向に緩やかに傾斜している。平坦面にはＳＫ91・98・105・100・109などの土坑が１列に並んで検出された。なお北側には10世紀代の土師器が出土する幅１ｍの段が隣接し、これによってＳＢ５が削平されている。

２号段状遺構（第４、39図　図版４、24）

谷部の北側に位置する。規模は長さ幅11.8ｍ、平坦面幅1.2ｍを測る。６号段状遺構とは階段状遺構とで結ばれており、段にそって径25～35㎝、深さ27～65㎝の柱穴が、1.35～1.52ｍの間隔で配置される（Ａ－Ａ′、Ｂ－Ｂ′）ことから、柵のようなものが併設されていた可能性がある。

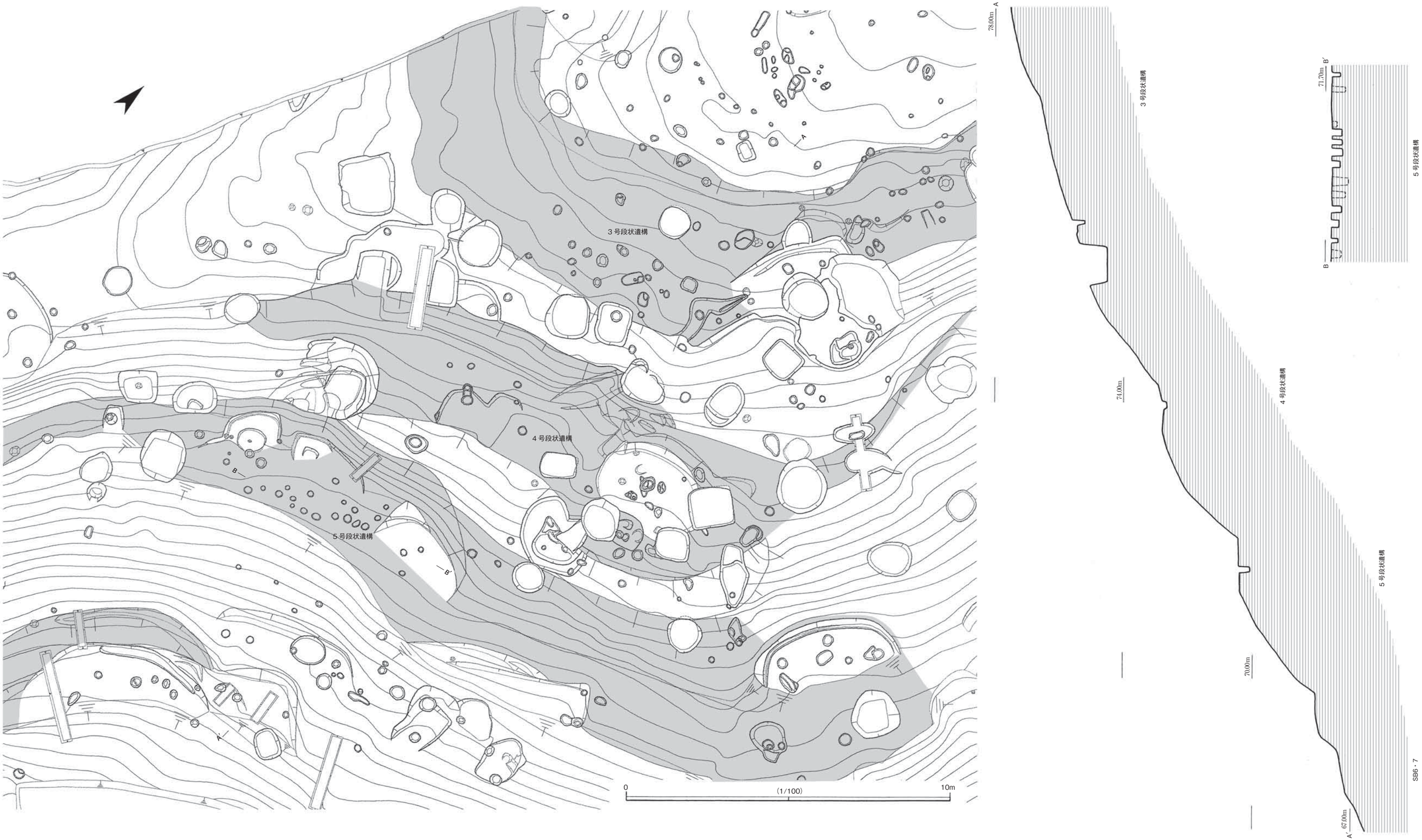
３号段状遺構（第４、37図　図版４）

頂上部中央に位置し、規模は長さ幅23.1ｍ、平坦面幅は1.6～４.6ｍである。東方向に緩やかに傾斜している。中央部になだらかな平坦部があり、ここにＳＢ９等の遺構が検出された。弥生時代の段状遺構を９世紀代に整地し、新たな平坦面をつくり出していることが認められる。

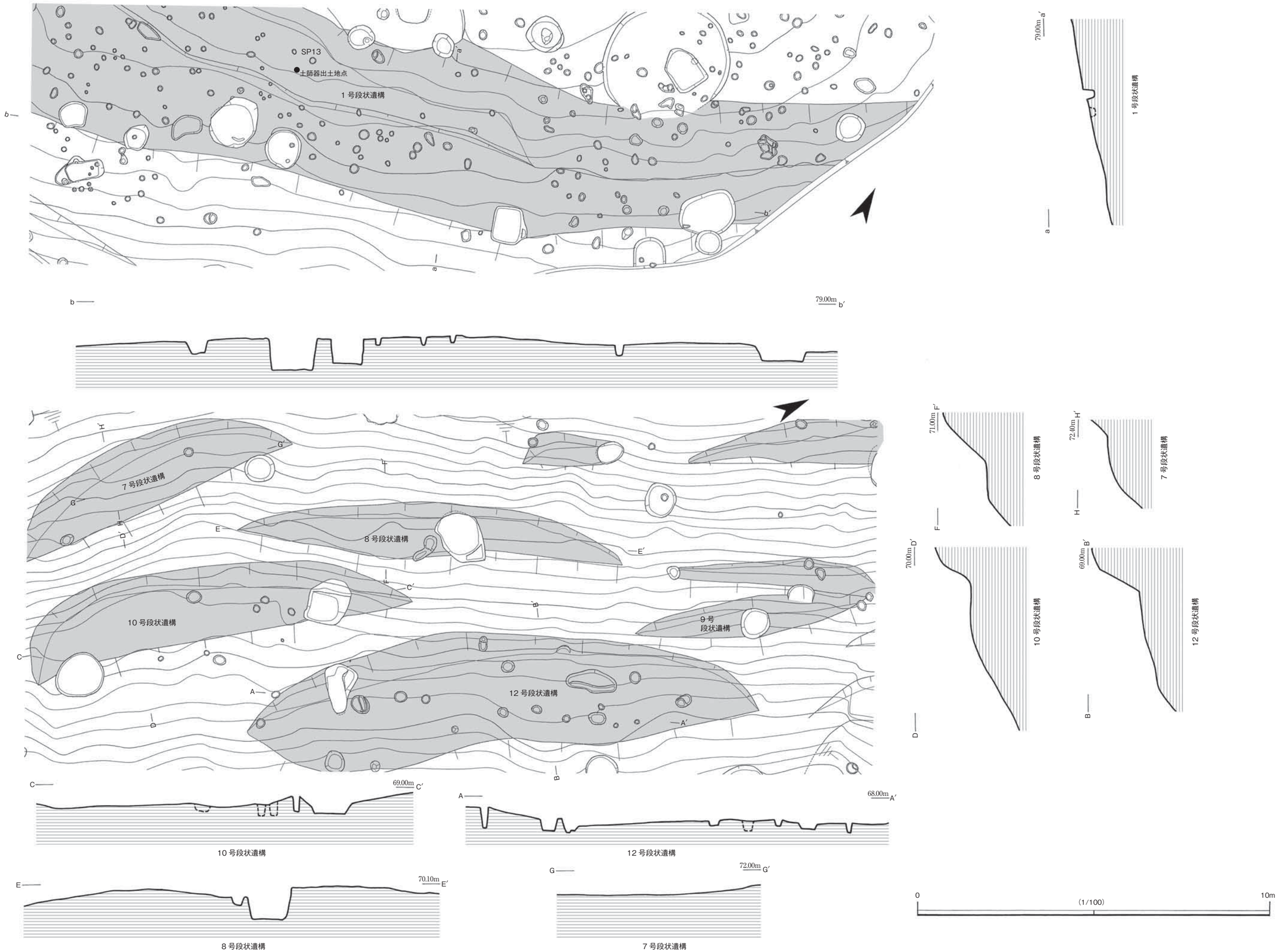
４号段状遺構（第４、37図　図版25）

頂上部からの張り出し部の中位に位置する。規模は長さ17.7ｍ、平坦面幅1.4～3.6ｍを測る。張り出し部にそって弧状に巡っており、中央部に幅３ｍ程の平坦面がある。ＳＢ11を中心とする遺構群が検出された。

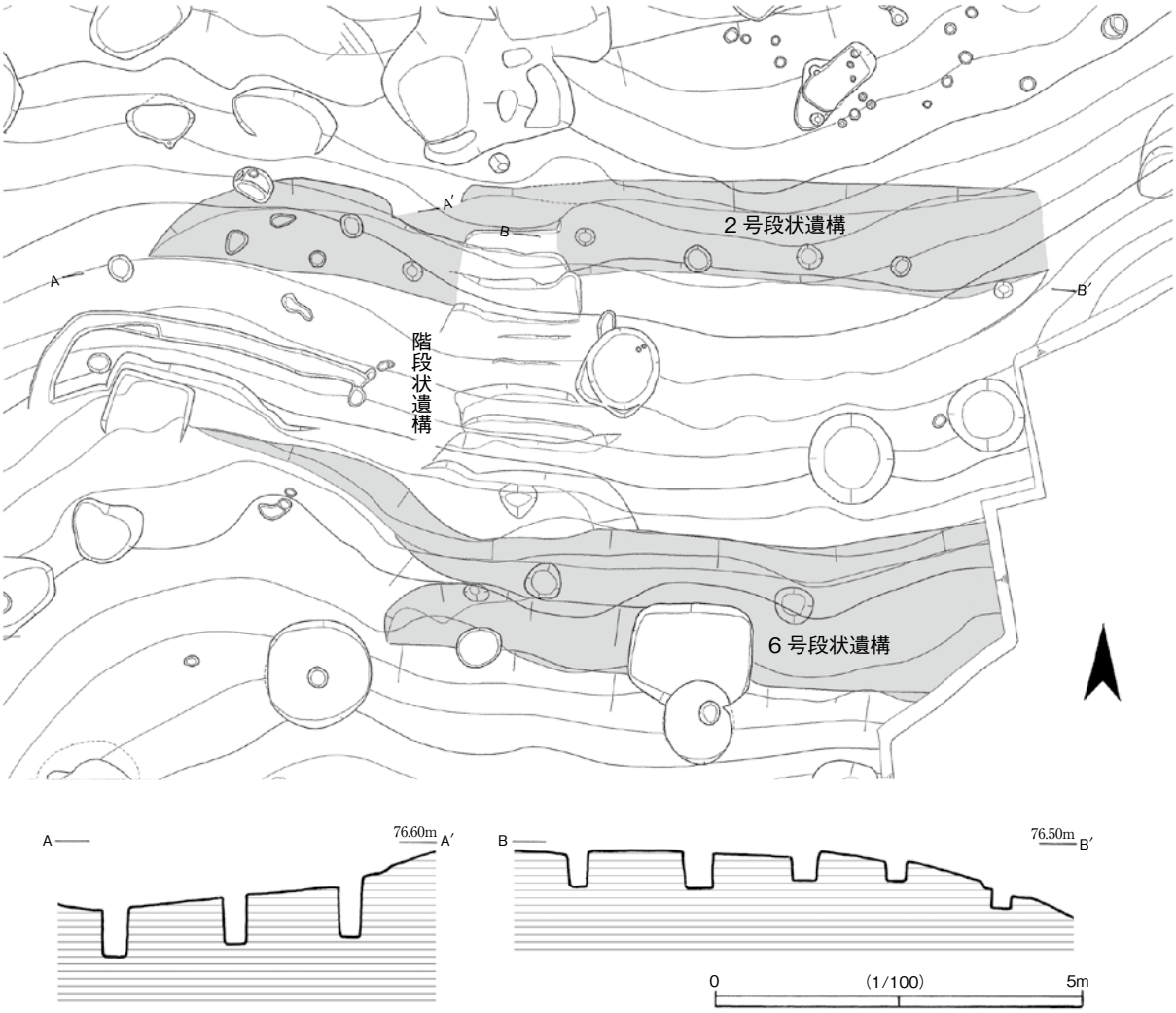
５号段状遺構（第４、37図　図版23、25）



第 37 図　IV 地区 段状遺構実測図（1）



第38図　IV地区 段状遺構実測図（2）



第39図　Ⅳ地区段状遺構実測図（3）

規模は長さ35.3ｍ、平坦面幅はＳＢ10のところで最大4.5ｍ、最も狭いところは0.9ｍを測る。今回の調査で最も大きな段状遺構である。頂上部からの張り出し部から西側斜面にかけての等高線に沿ってＳ字状にめぐり、南側は頂上部へ向かって傾斜している。中央ではＳＫ・ＳＸの遺構群があり、北端にはＳＢ10が位置することから、通常の生活面だけでなく、各遺構への通路のような性格があったとみられる。

６号段状遺構（第４、37図　図版23）

谷部の北側に位置し、階段状遺構で２号段状遺構と繋がる。規模は長さ11.4ｍ、幅1.6ｍ。頂上と谷のほぼ中間点に位置し、谷部の土坑への通路として大きな役割を果たしたと考えられる。

７号段状遺構（第４、38図　図版23、25）

西側斜面の南側に位置する。規模は長さ8.2ｍ、平坦面幅1.4ｍの細長い遺構である。段内からはＳＫ60、柱穴２個が検出された。段内中央部からは弥生土器（189～193）がまとまって出土した。

８号段状遺構（第４、38図　図版23、25）

西側斜面で、９、10号段状遺構に挟まれる。規模は長さ10.8ｍ、平坦面幅1.1ｍを測る。中央にＳＫ48があり周囲からは弥生土器（185・186）がまとまって出土した。

９号段状遺構（第38図　図版23）

西側斜面で８、11号段状遺構に隣接する。規模は長さ6.6ｍ、平坦面幅0.9ｍの小規模な段で、ＳＫ49・50を検出した。８号段状遺構から11号段状遺構に移動する際の通路とも考えられる。

10号段状遺構（第４、38図　図版23、25）

西側斜面南側に位置し、規模は長さ10.8ｍ、幅1.8ｍを測る。両端にＳＫ53とＳＫ69が位置が検出された。段内からは弥生土器（187・188）が出土した。

11号段状遺構（第４、38図　図版23）

西側斜面の中央に位置する。規模は長さ10.0ｍ、平坦面幅0.9～2.3ｍを測る。段内からＳＢ６・７、ＳＸ118の遺構群が検出され、これらを構築するための段状の掘削とみられる。

12号段状遺構（第４、38図　図版23、25）

西側斜面の中央で、調査区中最も低位に位置する。残存規模は幅14.5ｍ、平坦面幅2.5ｍを測る。段内にはＳＫ54や柱穴群が検出された。柱穴は径25～45㎝、深さ40～50㎝で、90～150ｍの間隔で配置されることから、柵跡があった可能性がある。

13号段状遺構（第38図　図版24）

頂上部東側斜面に位置する。調査区端であるため全体の様子は明らかでないが、西側にある６号段状遺構と一連の段である可能性がある。規模は長さ3.2ｍ、平坦面幅1.5ｍ。ＳＫ102が隣接する。

14号段状遺構（第４、38図　図版24）

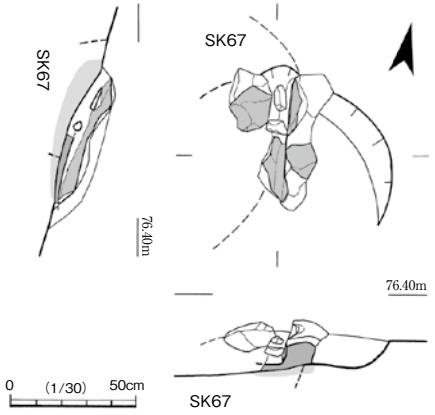
谷部の調査区東端に位置する。大部分は調査区外の北東へ向けて広がっており、詳細や規模は不明である。

キ　かまど跡（第40図　図版22）

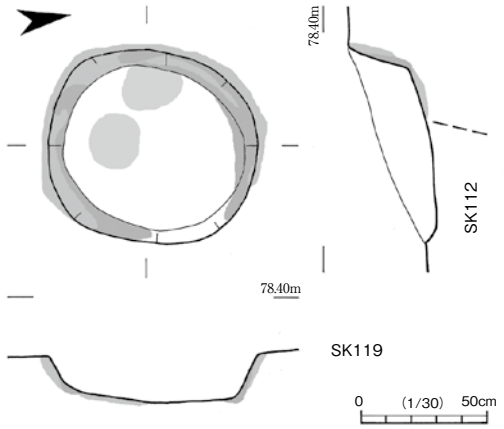
３号段状遺構の南端に位置する。ＳＫ67検出時に上面で、被熱により焼けしまった壁体が検出され、かまど跡と判断した。天井部は崩落しており、左袖部の残存は良くない。右袖部は比較的残っており、焚き口から煙出しに向かっては傾斜している。壁体面は被熱によりオリーブ灰色を呈する。残存規模は長軸62㎝、短軸51㎝、高さ12㎝を測る。床面はＳＫ67と重複して明確に検出できなかったが、周辺には焼土塊や炭が多く分布する。またこのかまどに伴う建物跡等の関連遺構は検出できなかった。

ク　焼土坑（ＳＫ119）（第41図　図版22）

３号段状遺構のほぼ中央部に位置し、ＳＫ112の上面で検出された。残存規模は長軸87㎝、短軸78



第40図　Ⅳ地区かまど跡実測図



第41図　Ⅳ地区焼土坑（SK119）実測図

cmを測る。壁面上部及び底部は赤く、壁面下部はオリーブ灰色に焼け締まる。出土遺物はないが、ＳＢ９や焼土跡に隣接すること、弥生時代土坑より新しいことなどから、ＳＢ９と同時期とみられる。

ケ　焼土跡（第12図　図版８、22）

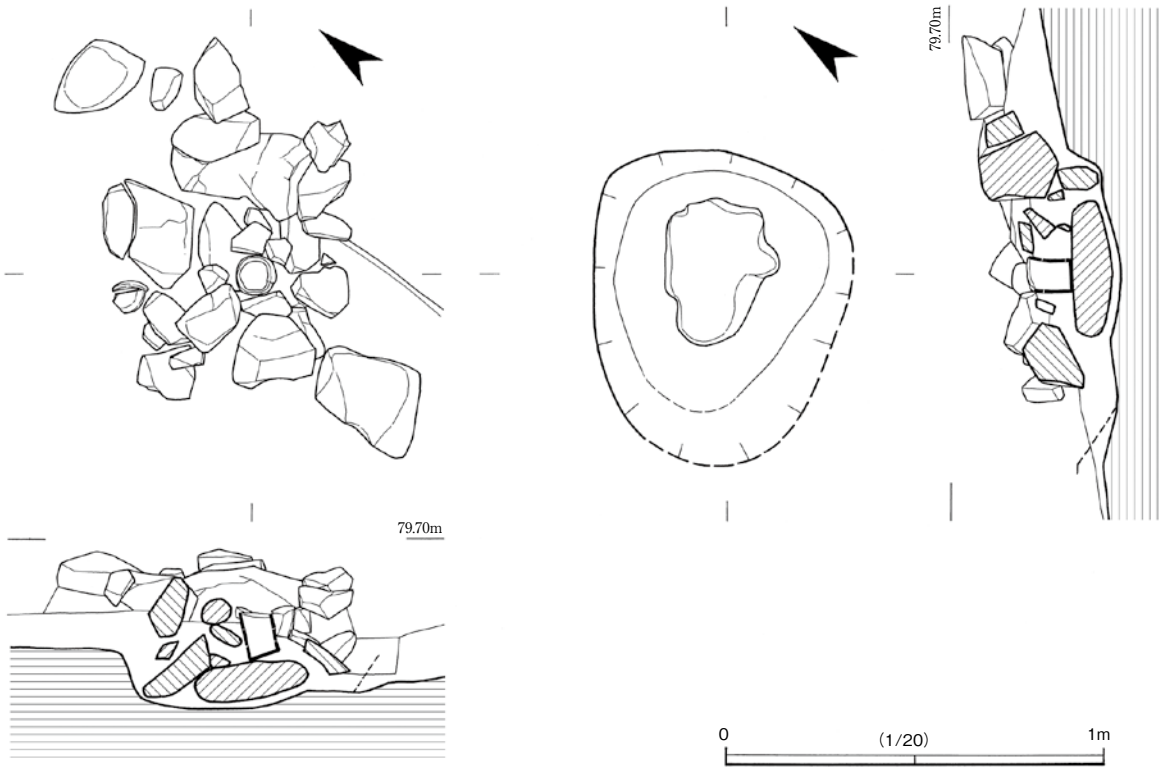
ＳＢ９の周辺で焼土跡１～３が確認された。径24～80cmに底面が被熱により赤化しており、周辺には炭や小焼土塊が散見される。これらはＳＢ９遺構面と同じ、またはその上面に位置していることから、ＳＢ９とほぼ同じ９世紀代と考えられる。なおこれらの関連遺構、たとえば建物跡に敷設されていたかどうかについては明らかでない。

コ　柱穴（図版22、26）

柱穴は頂上部や段状遺構の平坦面に分布し、特に頂上部東側で多く検出された。これらには規模が小さく、杭穴と呼ぶべきものも含まれる。柱穴の配置により復元できた建物跡は確認できなかったが、杭列跡または柵列跡とみられるものは認められる。これらは段状遺構や、頂上部から斜面にかけての変換点で、等高線に沿って検出された（第3図、第37～39図参照）。いずれも区画や防御のための施設と考えられる。このほか特徴的な柱穴として、ＳＰ１では柱を安定させるために自然石を詰め石としていた。またＳＰ36では、径20cm、深さ43cmの柱穴壁面が被熱により赤化し焼けしまっている状況が認められた。何度も火を受けた痕跡であることから、柱穴ではなく他の施設の一部とも考えられ、今後も検討が必要である。

サ　経塚（第42図　図版26）

標高約80ｍの丘陵頂上部に位置する。すでに経塚上部は攪乱を受けて、石材や経筒の一部が露出している状態であった。調査の結果、経塚の構造は次のとおりである。埋納坑は、南側で試掘坑により明らかでないが、長円形で、長軸は残存値75cm、短軸は67cm、深さは15cmであ



第42図　Ⅳ地区経塚実測図

る。この中に長さ40㎝の平たい石材を据え、その上に土師質経筒を安置する。経筒のまわりは自然石材を積み上げるが、一般的な経塚の主体部に比べると積み方が粗雑で簡易な作りである。さらにその周囲に大振りな石材を配置して主体部を被覆する石積みとしており、残存するその範囲は長軸110㎝、短軸95㎝である。なお封土はすでに流出したのか、確認できなかった。経塚関連の出土遺物は、土師質経筒（273）と、埋納坑の北西で土師器皿（274）が1点出土したのみである。

（２）Ⅴ地区

Ⅴ地区はⅣ地区と谷を隔てた東側丘陵にあり、北側からⅤ－１地区、Ⅴ－２地区である。調査区の標高は、Ⅴ－１地区は68～73ｍ、Ⅴ－２地区は61～69ｍで、両地区とも急勾配の斜面である。堆積の基本層序は、Ⅴ－１地区は橙色粘質土の地山の上に、上位からの流出土である黄色土、灰黄褐色土が堆積する。Ⅴ－２地区では黄褐色砂質土上に灰黄色土が堆積し、南半ではさらに旧表土と考えられる黒色土が認められた。Ⅴ地区からは、土坑８基、段状遺構４基、柱穴20個が検出された。住居跡は検出されなかったことから、集落本体は調査区東側の尾根頂部に存在する可能性がある。

ア　土坑（ＳＫ）

土坑はⅤ－１地区からは４基、Ⅴ－２地区からは４基の合計８基が検出された。両地区ともⅣ地区同様段状遺構の周辺に分布している。

ＳＫ１（第46図　図版27）

Ⅴ－１地区北斜面下位の１号段状遺構内に位置する。残存規模は長軸122㎝、短軸92㎝、深さ119㎝の不整円形の土坑である。細炭粒を含む埋土土層から弥生土器（227）が出土している。

ＳＫ２（第46図　図版27）

ＳＫ１と隣接し、１号段状遺構内に位置する。残存規模は長軸126㎝、短軸100㎝、深さ70㎝の隅丸円形の土坑である。頂上側斜面には土坑掘り込みにかかわる段状のカットがみられる。土坑底部から弥生土器（228・229）が出土している。

ＳＫ３（第46図　図版28）

Ⅴ－１地区東端に位置する。残存規模は長軸124㎝、短軸113㎝、深さ70㎝の円形の土坑である。弥生土器（230・231）が出土している。埋土は、明褐色弱粘質土の単層である。

ＳＫ４（第46図　図版28）

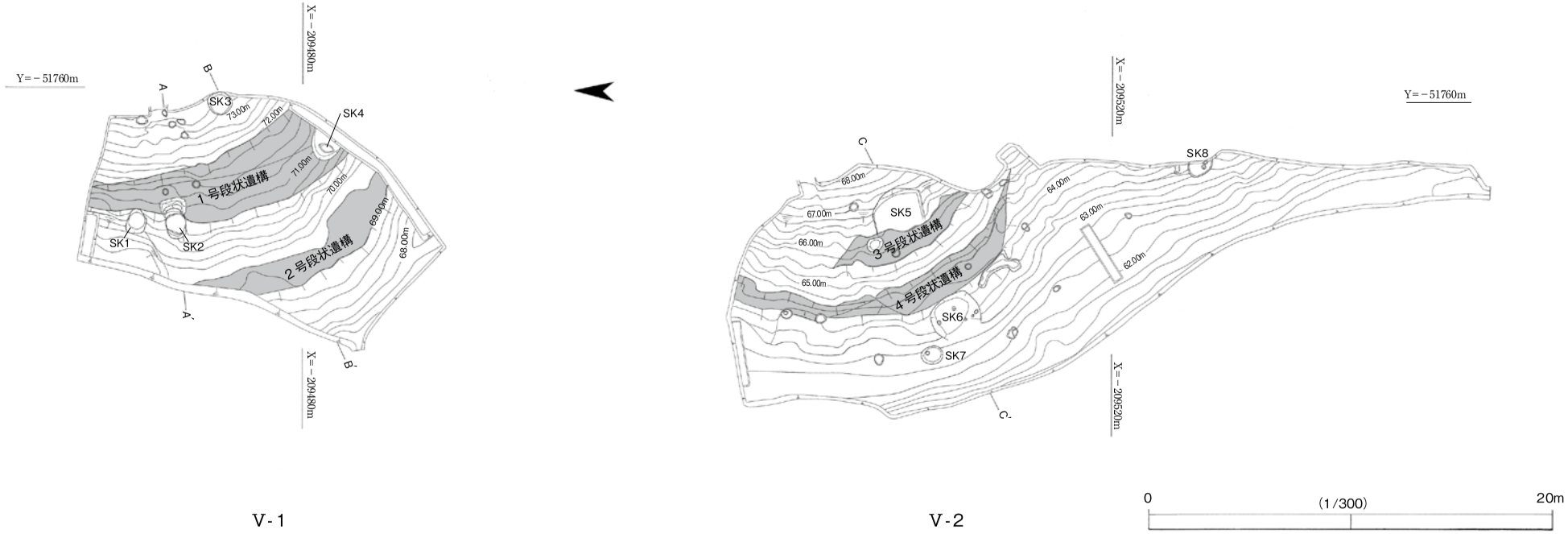
Ⅴ－１地区の南端に位置し、東半は調査区外に位置する。１号段状遺構に隣接する。規模は長軸154㎝、短軸残存値118㎝、深さ50㎝の長円形で、底面に柱穴状の浅い凹みがある。埋土は、明褐砂質土の単層である。

ＳＫ５（第45図　図版28）

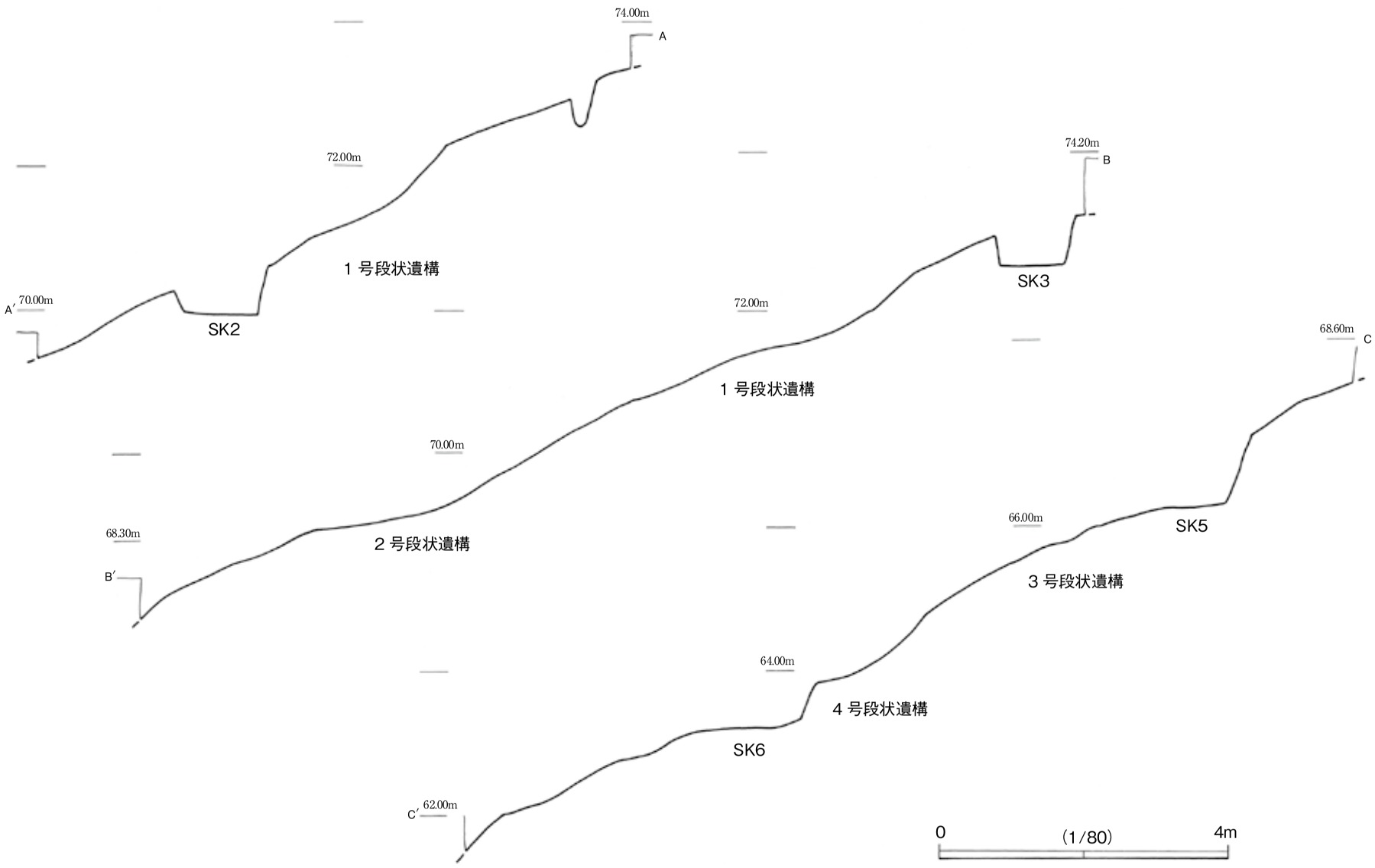
Ⅴ－２地区の東に位置し、西の斜面下位が消失している。３号段状遺構に隣接し、規模は長軸247㎝、短軸残存値187㎝、深さ123㎝の方形の土坑である。土坑底部から弥生土器（232・233）が出土している。埋土は、黄褐色砂質土の単層である。

ＳＫ６（第45図　図版28）

Ⅴ－２地区の西に位置し、西の斜面下位が消失している。４号段状遺構の下位の斜面にあり残存規模は長軸247㎝、短軸184㎝、深さ75㎝の長円形の土坑である。埋土中位に炭を含むにぶい黄褐砂質



第43図　V地区遺構配置図


74.00m
A
72.00m
1 号段状遺構
A′
70.00m
SK2
74.20m
B
SK3
72.00m
1 号段状遺構
68.60m
C
70.00m
68.30m
B′
2 号段状遺構
66.00m
SK5
3 号段状遺構
64.00m
4 号段状遺構
SK6
C′
62.00m
0
(1/80)
4m

第44図　Ⅴ地区断面図

土が堆積し、ここから弥生土器（234～236）が出土。

ＳＫ７（第46図　図版28）

ＳＫ６に隣接する。残存規模は長軸108㎝、短軸93㎝、深さ80㎝の円形である。土坑内には柱穴がある。埋土は黄褐色砂質土の単層である。

ＳＫ８（第46図　図版28）

Ｖ－２地区の西端に位置し、東半は調査区外に広がる平面形は長円形とみられ、長軸118㎝、短軸残存値76㎝、深さ41㎝である。遺構内に柱穴がある。埋土は、明黄褐色砂質土の単層で炭を含んでおり、弥生土器片が出土している。

イ　段状遺構

Ｖ－１地区、Ｖ－２地区に各２ヶ所段状遺構を検出した。Ⅳ地区同様等高線に沿って斜面を取り巻くように広がっている。以下それぞれの段状遺構をみていく。

１号段状遺構（第43、44図　図版27）

Ｖ－１地区の標高72ｍ付近に帯状に広がる。残存規模は、長さ12ｍ、平坦面幅３ｍであり、弥生土器片が出土している。ＳＫ１、２、４が段内にあり、これらに伴う平坦面をつくりだしている。

２号段状遺構（第43、44図　図版27）

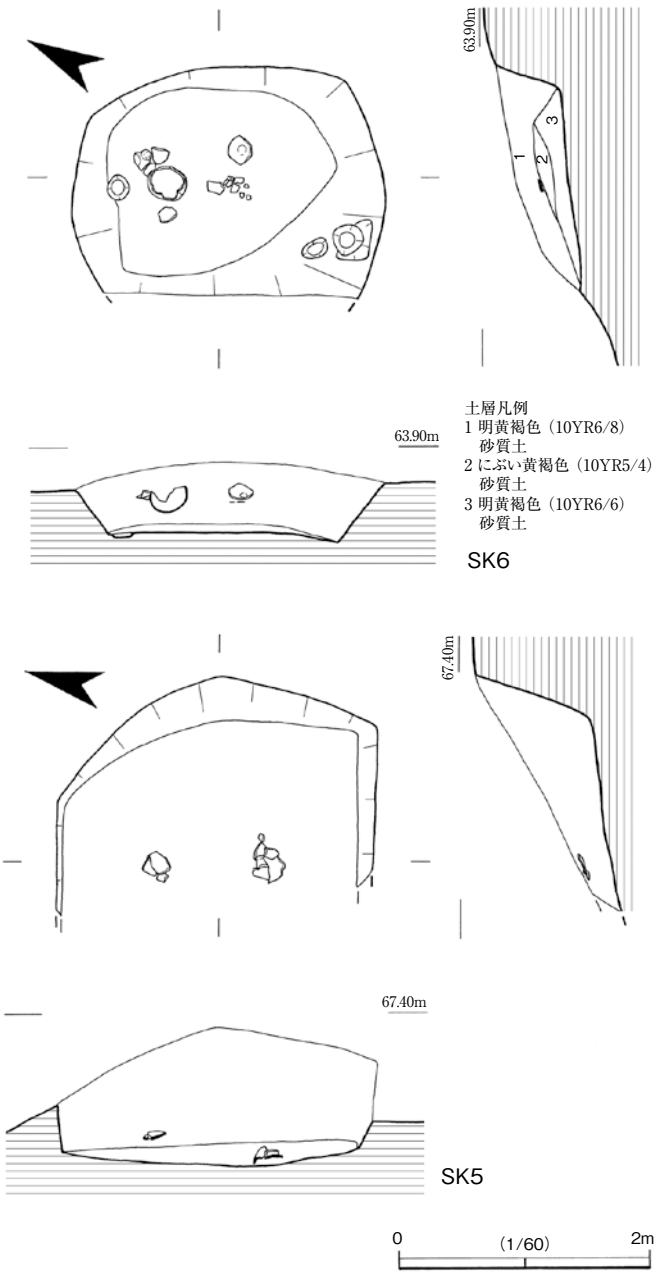
Ｖ－１地区の標高70ｍ付近に位置し残存規模は長さ13ｍ、幅２ｍである。１号段状遺構とほぼ平行に広がり、南端では弥生土器（237～239）が出土した。

３号段状遺構（第43、44図　図版27）

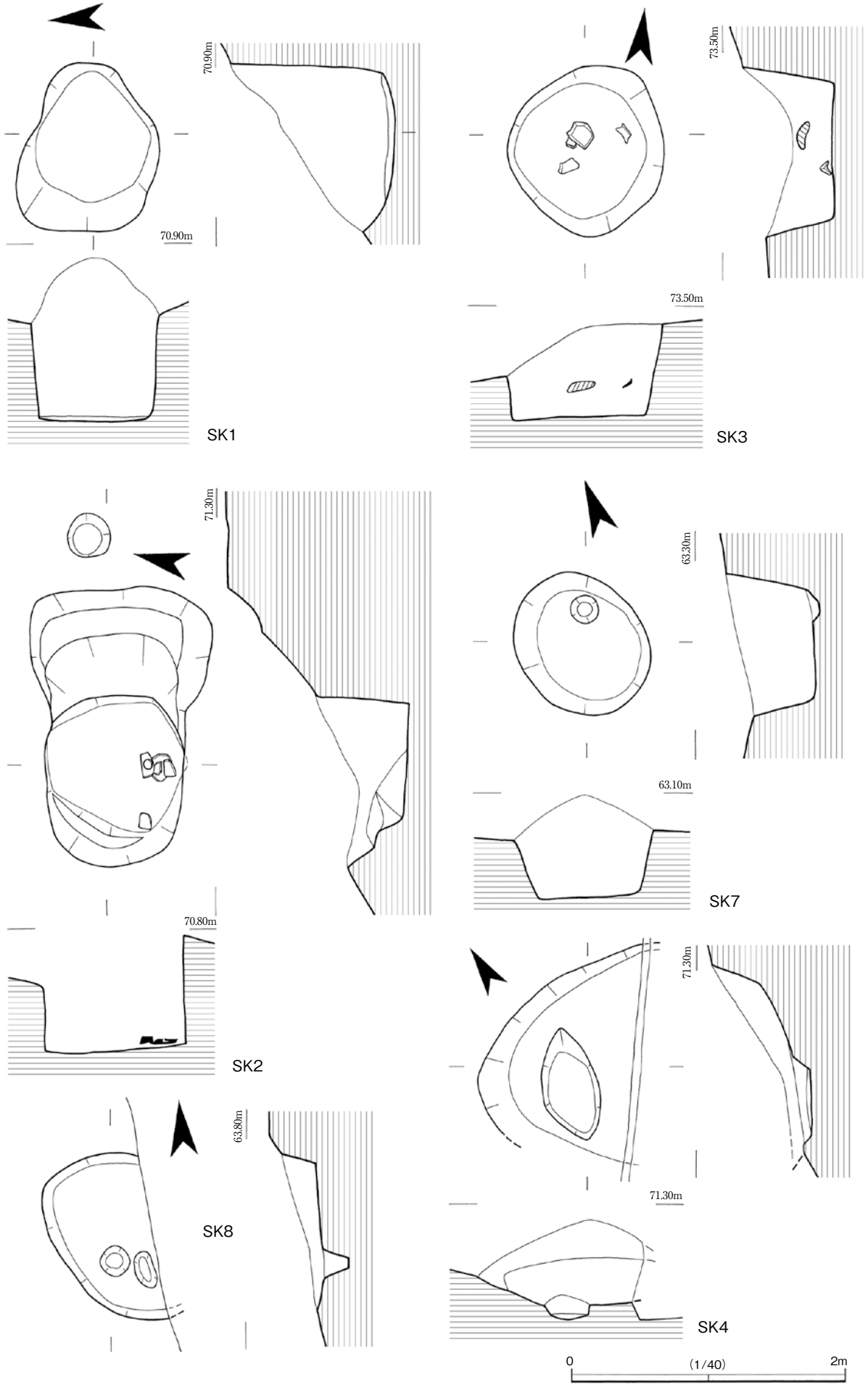
Ｖ－２地区の北東に位置する。残存規模は、長さ15ｍ、幅２ｍである。北及び南東の端は消失している。ＳＫ５に隣接し、これとの関連が指摘できる。

４号段状遺構（第43、44図　図版27）

３号段状遺構を取り囲むように標高64ｍ付近に広がり、残存規模は長さ25ｍ、幅２ｍである。南東端は調査区外に広がる可能性もある。



第45図　Ｖ地区ＳＫ実測図（1）



第46図　Ⅴ地区ＳＫ実測図（2）

２　遺　物

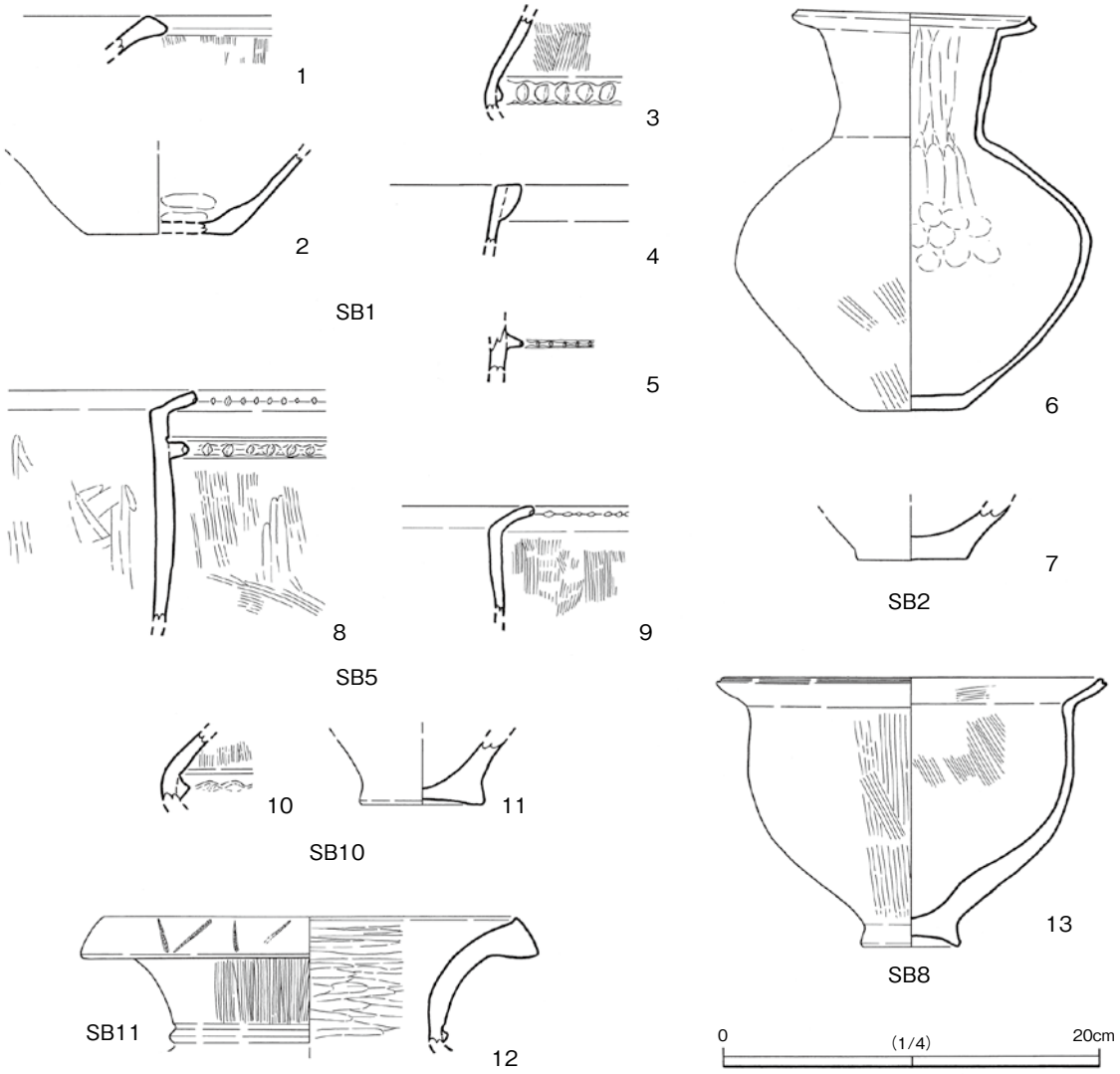
今回の調査では、Ⅳ、Ⅴ地区から弥生土器、古代の土師器・須恵器、土師質経筒、土製品、石器・石製品、金属製品が出土した。これらの遺物は、その多くが弥生時代に属するものである。地区別にみると、Ⅳ地区では弥生時代の遺物は調査区全域にわたって遺構及び斜面堆積土から出土している。古代以降の遺物は、調査区中央に位置する経塚周辺から北側の丘陵頂部およびその斜面から出土しており、その範囲に該当期の生活面があったとみられる。Ⅴ地区では、ほとんどが弥生時代に属する遺物であり、それ以外は土師器埦片が斜面包含層から１点出土したのみである。

ここでは出土遺物のうち、遺構出土のものを中心に代表的な遺物を、土器、土製品、石器、鉄器の順に述べていく。

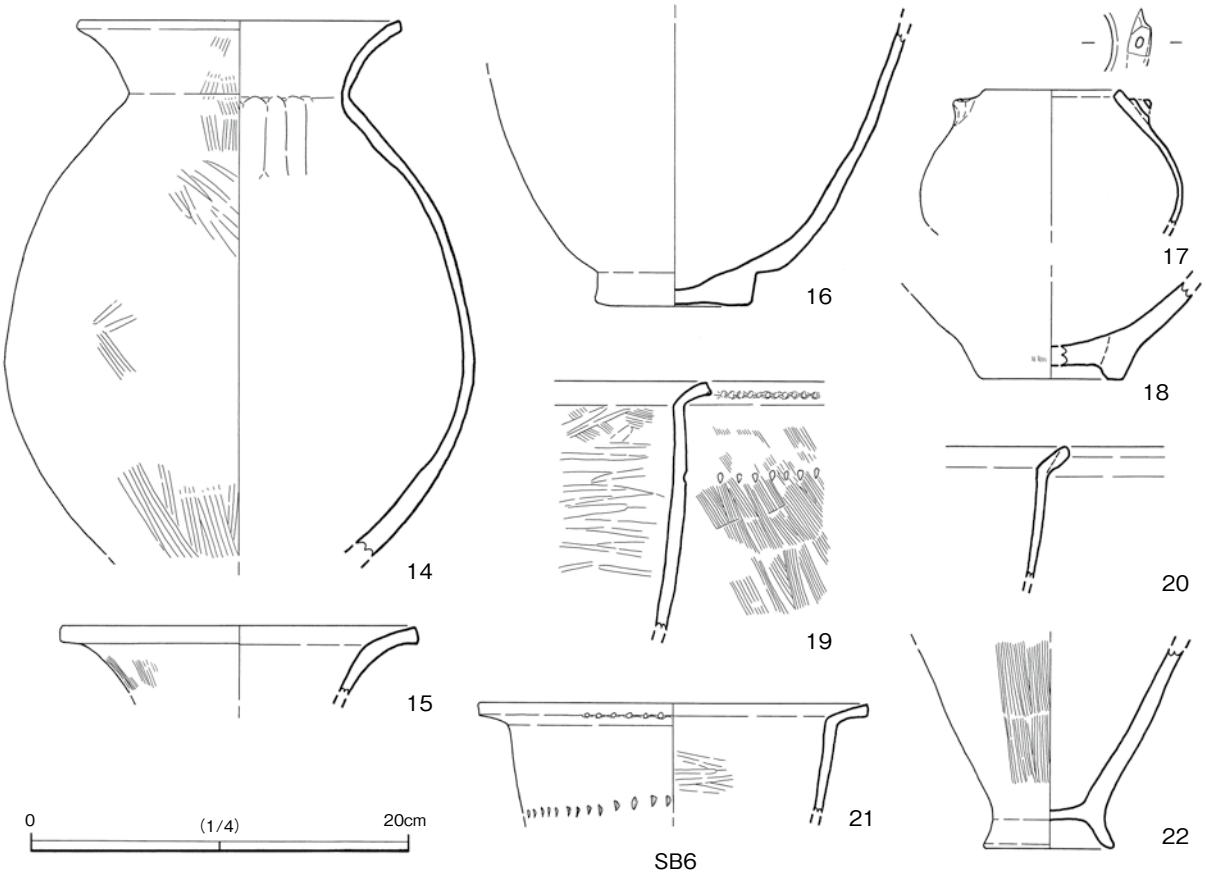
（１）弥生時代の土器（第47～68図　図版29～42）

次に掲載する弥生土器のうち１～226はⅣ地区出土である。

１～５はＳＢ１出土。１は壺口縁部片で、端部は斜め下方に拡張し、短く垂下した形態である。外面ハケメ調整、内面ミガキ調整。２は壺の底部。薄い平底で、小型の壺とみられる。内面指ナデ調整。３は壺の頸部。口縁部は外傾して立ち上がるとみられ、頸部には低い突帯に連鎖状の押圧が施され



第47図　Ⅳ地区出土土器実測図（1）



第 48 図　IV 地区出土土器実測図（2）

る。４は鉢の口縁部とみられる。口縁外面に粘土を貼り付けて台形状に肥厚させている。上面は平坦で、ミガキ調整。５は甕の胴部片とみられる。厚手の器壁につまみ出したような突帯を貼り付けており、刻み目を有する。外面丁寧なミガキ調整。６、７はＳＢ２出土。６は壺で、住居内の中央土坑出土である。薄い平底から、胴部は大きく張りだして中位で最大径となる。くびれた頸部から口縁部はわずかに外傾して立ち上がり、さらに屈曲して口縁となる。端部はつまみ出した形状で、跳ね上げ口縁甕のそれに似る。調整は、外面下半に粗いハケメが残り、上半はミガキを施す。内面は指押さえや指ナデの痕跡があり、頸部には成形時の絞り痕が認められる。７は平底の壺底部。

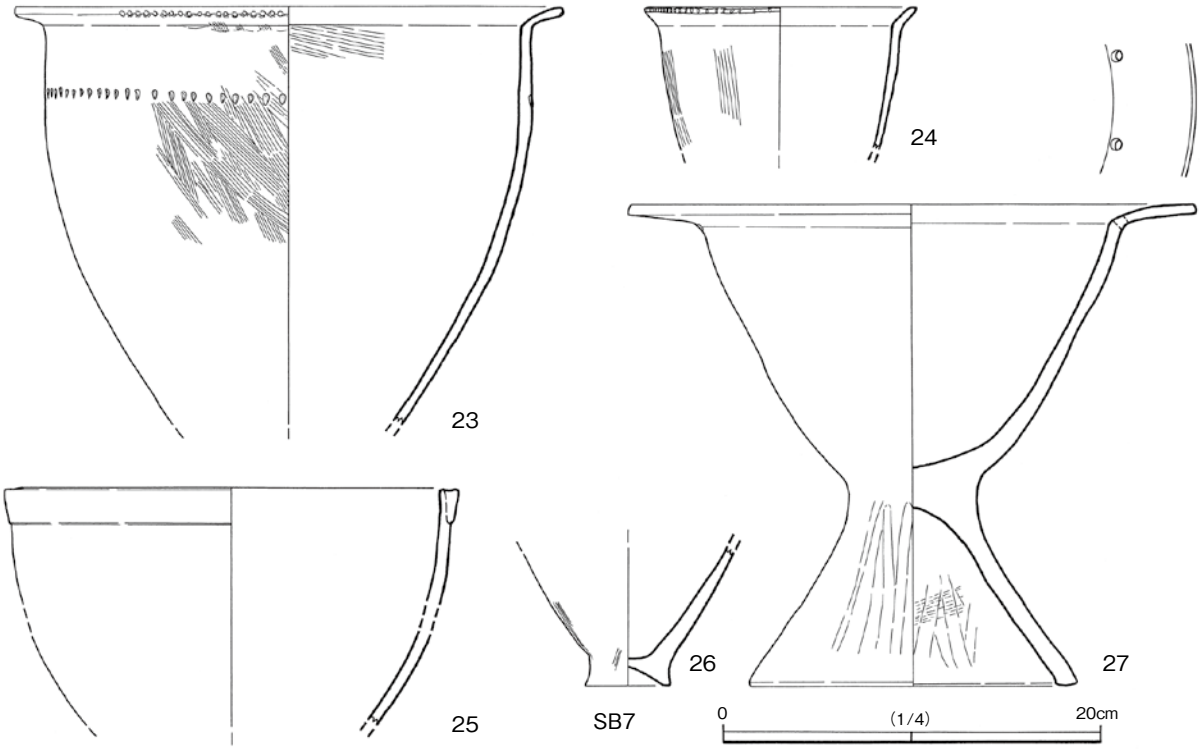
８、９はＳＢ５出土。８は大型の甕口縁部片。厚手の胴部は直線的に立ち上がり、鋭く屈曲して口縁部となる。口縁端部には刻みを有し、口縁下の貼付突帯にも幅広の刻み目を施す。外面は斜めとタテへのハケメ調整をし、内面はミガキ調整。９はくの字に屈曲する甕口縁部で、端部には刻み目を施す。外面ハケメ調整。内面はミガキ調整か。

10、11はＳＢ10出土。10は大きく開口する壺の頸部片。断面三角突帯を１条有する。外面ハケメ調整、内面ミガキ調整か。11は甕の底部で、やや上げ底となる。外面ナデ調整。

12はＳＢ11出土の壺口縁部。頸部から短く外反する口縁部は、端部で肥厚して下方に拡張する。端面には施文具を押圧して山形文を施している。頸部には断面三角形の低い突帯が１条貼り付けてある。調整は外面がタテのハケメ調整、内面がヨコへの粗いミガキ調整を施す。

13はＳＢ８出土の鉢。底部は小さく上げ底となる。器高に対して口径が広く、口縁部はくの字に屈曲し、端部には凹線が巡る。外面及び口縁内面は粗いハケメ調整、その他は細いハケメ調整である。

14～22はＳＢ６埋土中出土。14は壺である。長胴で、最大径は中位より下にあり、くびれた頸部



第 49 図　IV 地区出土土器実測図（3）

から口縁部は外反し、端部は面を持つ。外面はハケメの後ミガキ調整を行う。内面はナデとミガキ調整。15は外反する壺の口縁部。16は壺底部。厚手で平底の底部から、胴部は長胴となる。17は無頸壺。偏球形の胴部から内湾して口縁部に至り、端部は平坦である。口縁部付近に粘土を貼り付けてつまみとし、そこに紐通しの孔を穿っている。調整は内外面ミガキ調整。18は壺底部。上げ底で断面高台状をなす。19は甕の口縁部。短く外反する口縁部で、端部には刻み目を施す。口縁下には楕円形の刺突文を巡らしている。外面煤付着。調整は外面がハケメ調整、内面がハケメの後ミガキ調整を行う。20は甕の口縁部。外傾する胴部からくの字に屈曲する口縁で端部は丸くおさめる。21は甕口縁部。胴部から逆Ｌ字状に屈曲し、端部には刻み目を施す。口縁下には「ノ」の字状の刺突文を巡らす。内面ミガキ調整。22は甕の底部。上げ底で、外面ハケメ調整。

23～27はＳＢ７埋土中出土。23は甕。内湾して立ち上がり水平に屈曲する口縁部で、端部には刻み目を施す。口縁下には刺突文を巡らす。外面ハケメ調整、内面ハケメ調整の後ミガキまたはナデ調整を施す。外面には煤付着。24は小型の甕口縁部。短く屈曲する口縁部には刻み目を施す。外面ハケメ調整。内外面に煤付着。25は鉢口縁部。内湾して立ち上がり、外面を肥厚させ段状にして口縁としている。端部は平坦。内外面ともミガキ調整を施す。26は甕底部。上げ底の底部で外面ハケメ調整を施す。27は高坏。「ハ」の字に広がる脚部から、深さのある坏部が立ち上がり、口縁は水平に屈曲する。屈曲部に２ヶ所の穿孔があり、蓋受けの紐通しの孔とみられる。坏部はミガキ調整。脚部は外面が粗いミガキ調整、内面がハケメの後粗いミガキまたはナデ調整。

28～32はＳＸ６出土。28は壺の口縁部。端部は下方へ短く折れる垂下口縁で、端面には山形文を施文し、外面はハケメ調整。29は壺とみられる。胴部に対して器高が低く、寸詰まりな器形である。小さい平底から大きく張りだした胴部は中位で最大径となり、口縁は短くくの字に屈曲する。端部は

面を持つ。頸部には穿孔が1箇所認められる。内外ともミガキ調整。30は甕。小さい底部から張り出した胴部は上位で最大となり、口縁は短く屈曲する。内外ともヨコへのミガキ調整。また内外面に炭化物、煤が付着する。31は壺の底部。わずかに上げ底となる。32は高坏の口縁部。内傾する鋤先口縁で、端部はわずかに上方へ跳ね上がる。内外面ミガキ調整を施す。

33～35はＳＸ７出土。33、34は壺口縁部。33は頸部から立ち上がりさらに外反するのに対して、34は端部が斜め下方に短く垂下する。33は外面ハケメの後ミガキ調整。35は甕底部。

36～38はＳＫ９出土。36は壺。厚手の平底で、胴部は偏球形になるとみられる。37は甕の底部で、深い上げ底となる。38は甕の底部。上げ底で、胴部は外傾して立ち上がる。内面ミガキ調整。外面には成形時の指押さえが残り、煤が付着している。

39はＳＫ１出土。大きく広がるラッパ状の口縁部を呈する壺で、内外面ミガキ調整である。

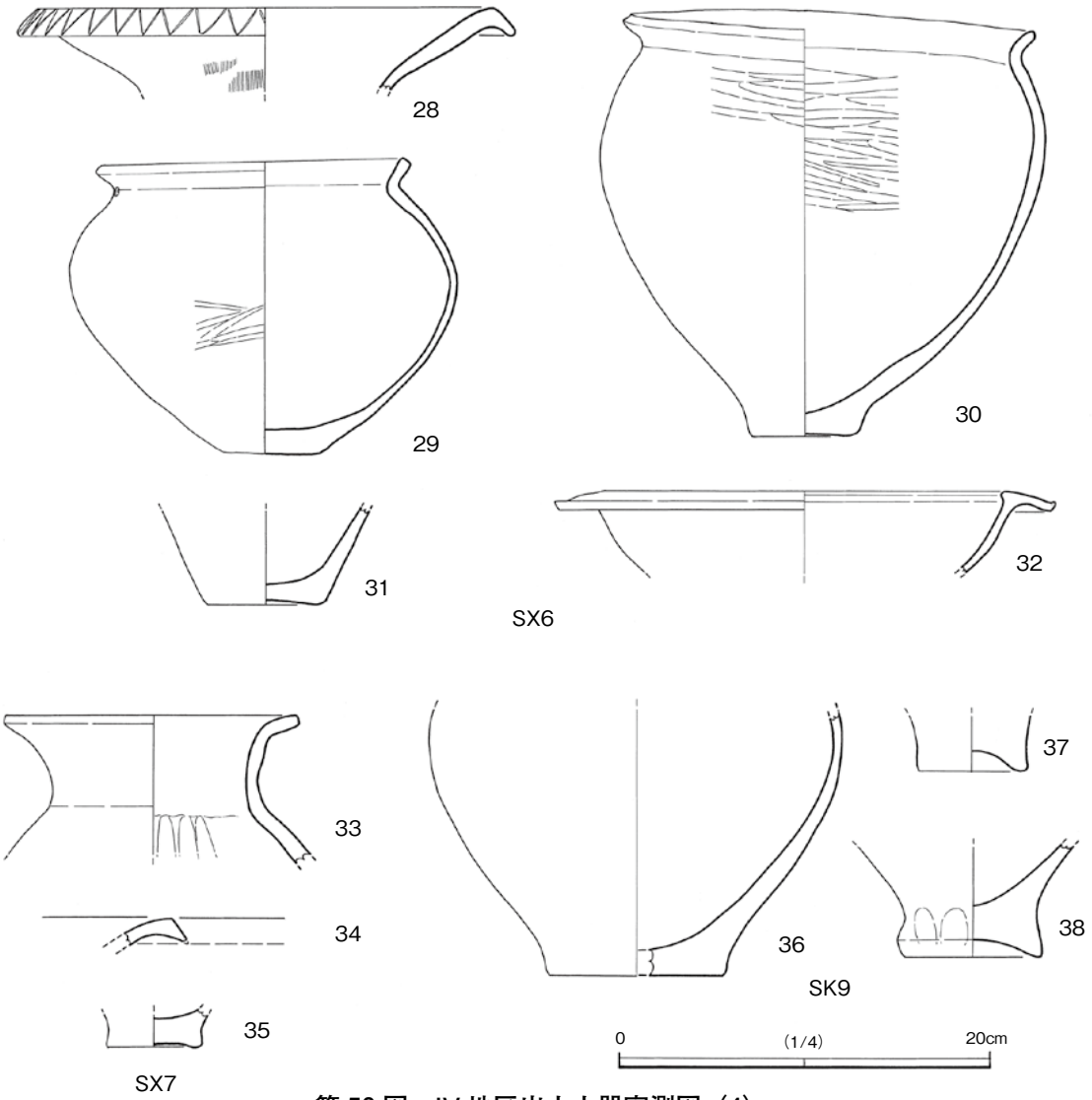
40～45はＳＫ２出土。40は壺。厚手の底部からそろばん玉状の胴部を有し、頸部には2条の三角突帯を貼り付ける。外面ミガキ調整、内面ハケメののちミガキ調整を行う。41は壺。平底の底部から、胴部は中位より上で最大径となる。ミガキ調整とみられる。42は壺で、わずかに上げ底の底部から球形の胴部となる。外面ミガキ調整、内面指押さえ痕あり。なお外面には被熱による煤付着が認められる。43は器高の低い甕で、底部欠損。口縁は水平近くに屈曲する。内外ともミガキ調整か。44は甕底部。ハの字にひろがる上げ底の底部で、外面ハケメ調整。45は壺底部で碁笥底状を呈す。

46～48はＳＫ３出土。46は甕。胴部は中位より上で最大径となり、口縁部はくの字に屈曲する。端部には刻み目を施し、口縁下には刺突文がめぐらされる。内外ともハケメ調整。47は鉢。厚手の底部から内湾して立ち上がり、口縁部はわずかに屈曲して端部は丸くおさめる。48は小型の壺とみられる底部である。わずかに上げ底の底部は薄手で、外面ハケメ調整、内面に指押さえあり。

49、50はＳＫ４出土。49は壺口縁部。ゆるやかに内傾して袋状をなし、端部は丸くおさまる。端面にはヘラ描斜格子文を施す。ハケメの後粗いミガキ調整を行う。50は無頸壺。平底で、胴部は中位より上に最大径があり、そこから内傾して口縁に至る。口縁部は肥厚させて成形しており、一部それが剥離した痕跡が認められる。また蓋を被せるための紐通しの２個の孔が１方向のみにある。

51～55はＳＫ43出土。51は甕。底部は小さく、胴部は長胴で、幅は中位で口径を上回る。口縁部はゆるく外反して立ち上がる。調整は内外に細かなハケメを施す。52、53は同一個体と見られる甕である。51と比較して底部がさらに小さく丸底に近い。口縁部はくの字で外反して開く。内外面ともハケメ調整であるが、内面のほうがやや粗いハケメとなる。また51～53はいずれも内外面に煤や炭化物の付着が認められる。54は甕。口径と器高がほぼ同じ大きさとみられ、胴部は口径近くまで張り出し、口縁はくの字に屈曲する。底部は欠損するが、他の土器と同じく丸底に近い小さい平底とみられる。外面が細かいハケメの後ミガキ調整。内面がハケメ調整で、ナデ、ミガキもみられる。焼成良好で、硬質、丁寧なつくりである。55は小型の壺底部。丸底に近い平底で、長胴となる。外面は細かいハケメ調整、内面はミガキ調整である。硬質で丁寧なつくりである。

56～58はＳＫ50出土。56は壺口縁部。外反する口縁部で、外面はハケメの後ミガキ調整、内面はミガキ調整。57は甕口縁部。短く曲がる如意形口縁で、端部に刻み目を有する。また口縁下に櫛描き状の多条（６～８条）沈線を、横および縦に施している。58は平底の甕底部。



第 50 図　IV 地区出土土器実測図（4）

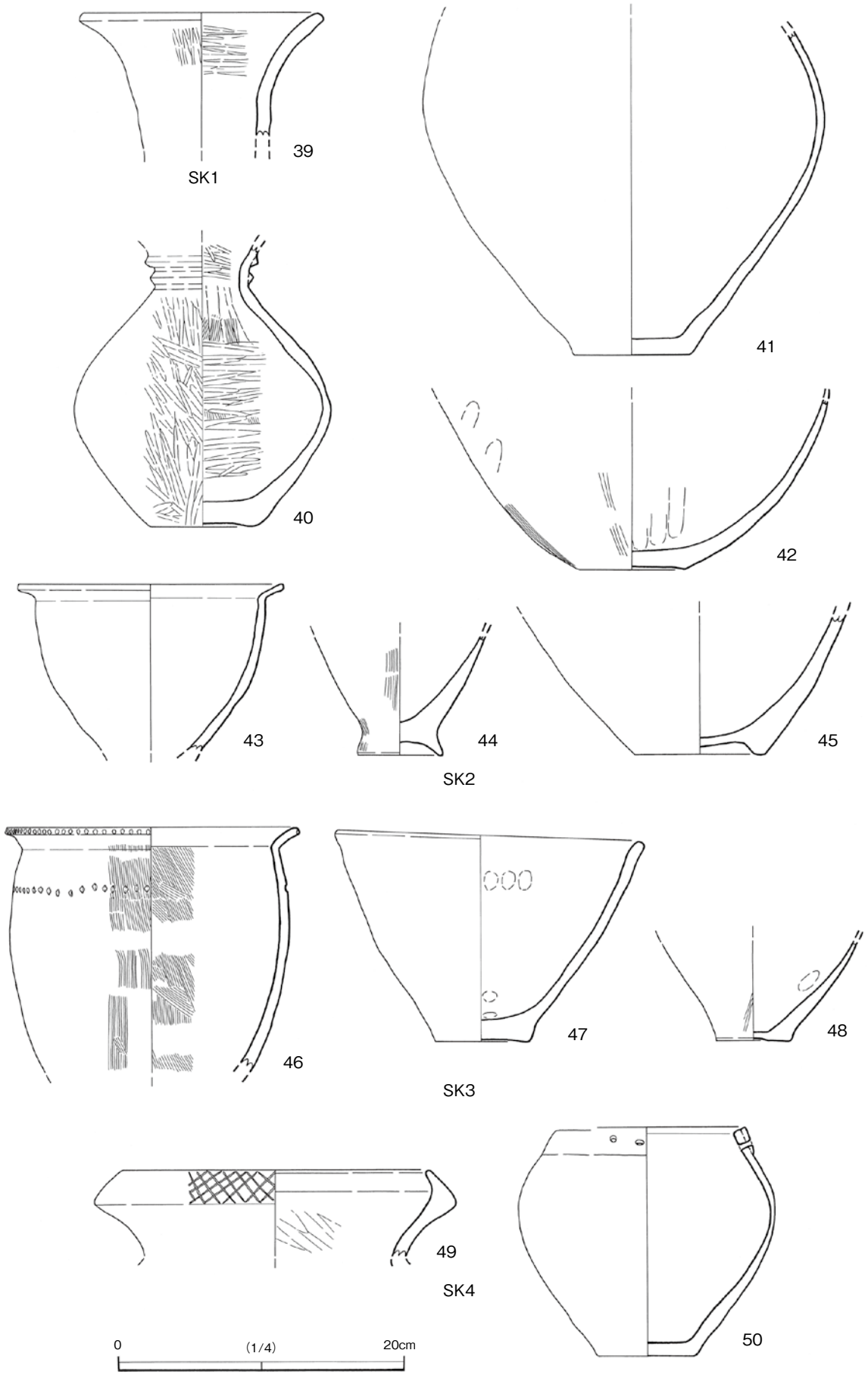
59はＳＫ52出土の甕底部。平底。

60はＳＫ48出土の甕。上げ底の底部に長胴で、口縁は大きく屈曲して、内湾気味に立ち上がる。外面ハケメ調整、内面ミガキ調整。外面には煤や炭化物が付着している。なお器面が剥落した部分にも煤の付着があることから、剥落後も煮炊きに使用していたことがうかがえる。

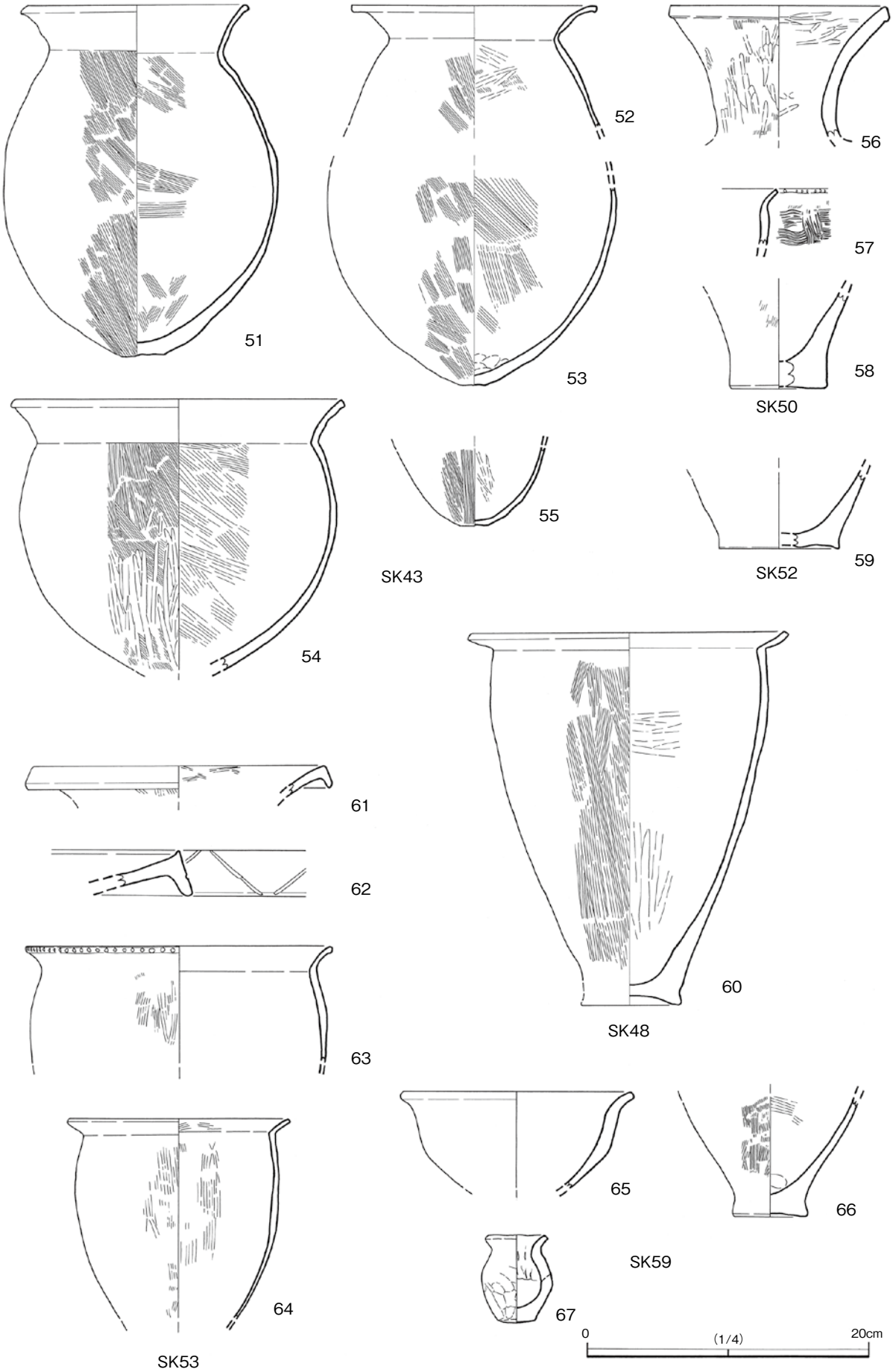
61～64はＳＫ53出土。61、62はいずれも垂下口縁の壺で、61は垂下部分が短いが、62は長く、ヘラ描きの山形文を施す。63、64は甕である。63は肩部が張り、くの字の口縁には端部に刻み目を施す。ハケメ調整。64は小型の甕で、内外面ハケメ調整。いずれも炭化物が付着する。

65～67はＳＫ59出土。65は鉢とみられる。口径に対して低い器高で、口縁は短く外反する。66は甕底部。平底で、内外面ハケメ調整。一部に煤付着。67はミニチュア土器。胴部が張り、口縁部が短く外反する。全体的にナデ調整が認められる。

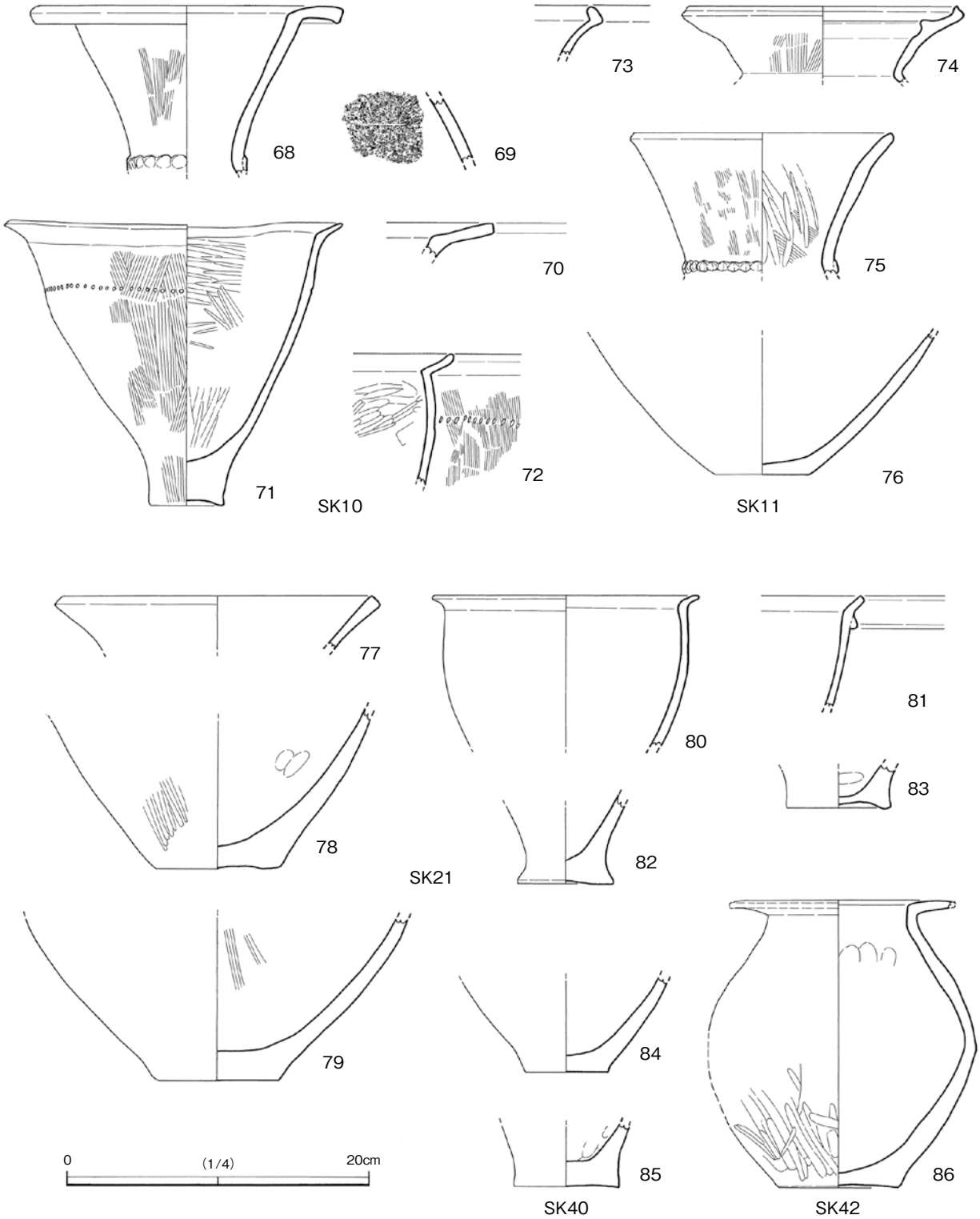
68～72はＳＫ10出土。68は壺の口頸部。頸部から外傾して立ち上がり、水平方向に屈曲する口縁部で、頸部には連鎖状突帯を貼り付ける。外面にハケメ調整が残る。69は壺胴部片。表面が剥離しているが、貝殻施文による文様が確認できる。文様は直線で区画された中に木の葉文が配置されている。内面はハケメの後ミガキ調整。70は高坏の口縁部片とみられる。坏部は斜め上方へ折れる口縁で、端



第 51 図　IV 地区出土土器実測図（5）



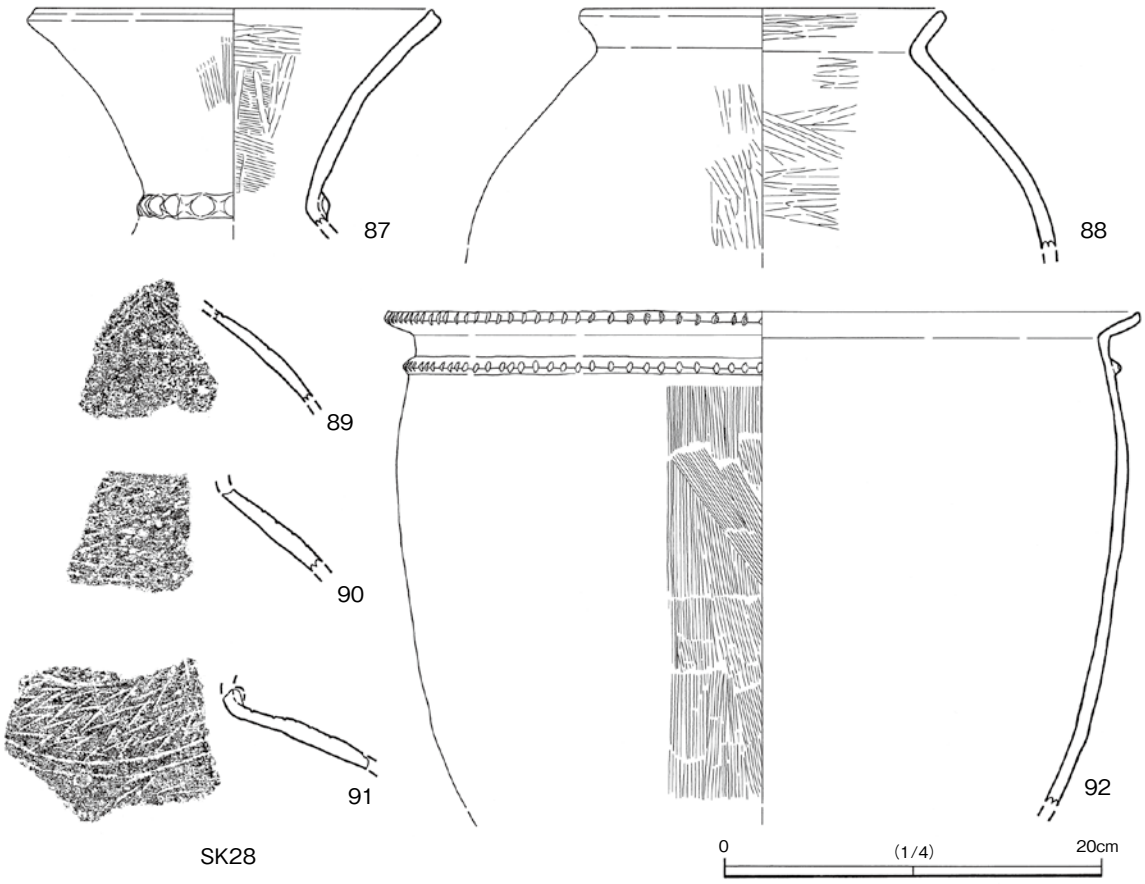
第 52 図　IV 地区出土土器実測図（6）



第 53 図　IV 地区出土土器実測図（7）

部は面を持つ。調整はミガキ調整。71は甕。上げ底で厚手な底部は口径に対して小さめであり、そこから胴部は外傾して立ち上がり、口縁部への屈曲はゆるい。器高より口径が大きく、全体的に寸詰まりな印象である。胴部には円形刺突文を施している。外面ハケメ調整、内面ミガキ調整。また底部周辺は被熱により赤色化している。72はくの字に屈曲する口縁部で、口縁下に刺突文をめぐらす。外面ハケメ調整、内面ミガキ調整を行う。

73～76はＳＫ11出土。73～75は壺口縁部。73は端部が短く内傾する内折口縁である。全体的に被



第 54 図　IV 地区出土土器実測図（8）

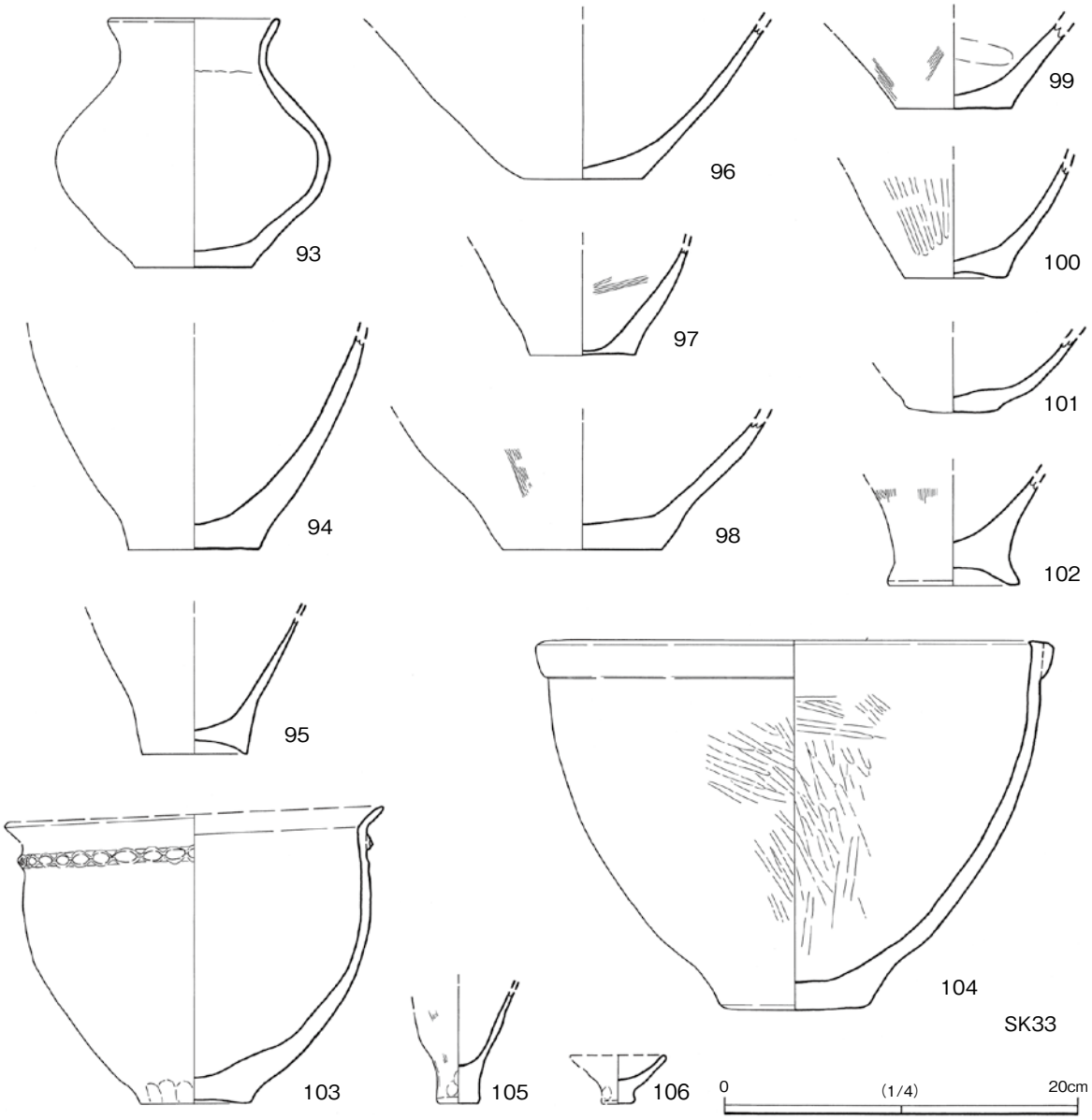
熱の痕跡がある。74は大きく外反する口縁内面に貼り付けの段を有し、端部は上方につまみ上げる跳ね上げ口縁状を呈する。外面ハケメののちヨコナデ調整。75は外反する口縁で、頸部には連鎖状突帯を貼り付ける。内外面ハケメの後ミガキ調整。76は壺底部。小さい平底底部から、胴部は大きく張り出す。外面ミガキ調整。

77～83はＳＫ21出土。77は壺で、大きく開く口縁部を有する。78、79は壺の底部。厚手の平底に球形の胴部を有する。78は内外面ミガキ調整。79は内面ハケメ調整。80は甕口縁部。短く折れた口縁は先端が尖り気味におわる。内外面ミガキ調整か。81は甕口縁部。端部は面を持ち、口縁直下に突帯を貼り付ける。82、83は甕底部。82はわずかに上げ底で、端部が外方へ拡張している。83も上げ底で、底部の厚さが薄い。内面ミガキ調整。

84、85はＳＫ40出土。84、85は小型の壺、甕の底部で、いずれも厚手の平底である。

86はＳＫ42出土の壺。わずかに上げ底の底部から、胴部は中位で最大径となり、口縁は水平方向に屈曲する。外面ミガキ調整で、内面はミガキともに指押さえ痕が認められる。

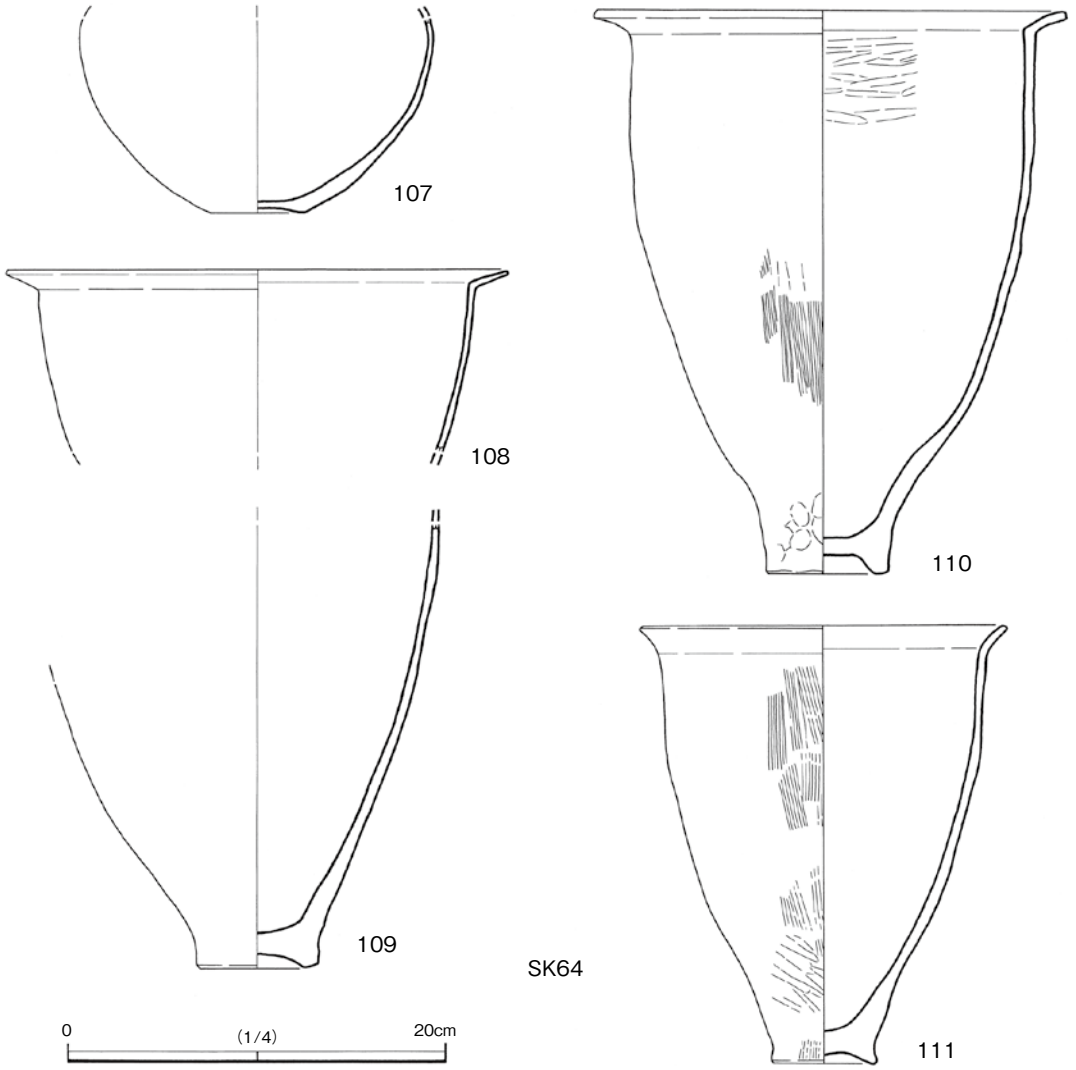
87～92はＳＫ28出土。87は壺の口頸部。大きく朝顔形にひらいた口縁は、端面に浅い凹みがあり、それにより端部は上方にわずかにつまみ出したような形状となる。頸部には連鎖状突帯をめぐらす。外面にはハケメの痕跡があり、内面はハケメの後ミガキ調整。88は壺で、大きく張りだした胴部から頸部にかけてすぼまり、そこから口縁は短くくの字に屈曲する。調整は内外ともミガキ調整。89～91は壺胴部片で、いずれも器面は剥離しているが、貝殻による施文が認められる。文様は、89が木の葉文



第55図　Ⅳ地区出土土器実測図（9）

と沈線、90は羽状文と２条の沈線がある。91は羽状文と２条の沈線、さらにその下にも文様の一部（木の葉文？）が認められる。これらは前期末から中期初頭に盛行する施文パターンではあるが、それらと比較すると羽状文の施文方向が斜めであるなどやや雑なつくりといえる。92は大型の甕で、口縁部の復元径は40㎝を測る。胴部は口径と同じ程度に張りだし、口縁部はくの字に屈曲する。口縁端部はわずかにつまみ出す形状である。口縁の刻み目は施文具によるもので、押圧による圧痕が残る。さらに口縁下にも刻み目を持つ突帯をめぐらしている。調整は、外面ハケメ、内面ミガキを行う。また外面には煤が付着する。なおＳＫ28は貼り床が認められ、その貼り床より上層からは87、92、下層からは88、89が出土した。

93～106はＳＫ33出土。93は壺。平底から偏球形の胴部となり、口縁はゆるく外反し端部は丸くおさまる。ミガキ調整。96、98～101は壺底部。96、98、99は平底で、胴部は外傾して立ち上がる。100は上げ底でミガキ調整を施し、外面には煤付着。101は他と比較して底部は小さく丸底気味である。



第 56 図　IV 地区出土土器実測図（10）

一部に炭化物が付着。94、95、97、102は甕底部。このうち95、102は上げ底となる。103は甕。わずかに上げ底で頸部には連鎖状突帯をめぐらしており、口縁はくの字となる。器高より口径が大きく、鉢に似た形態である。内外面とも被熱の痕跡が認められる。104は鉢。厚手の平底から内湾した胴部が立ち上がり、口縁は肥厚させ段状としている。内外面ともミガキ調整。105、106はミニチュア土器で、105は甕、106は鉢または蓋を模したとみられる。いずれもナデや指押さえ痕が認められ、105はハケメが残る。

107～111はＳＫ64出土。107は口頸部を欠損するが、無頸壺とみられる。小さな上げ底の底部から球形の胴部を持ち、内外ミガキ調整で、器壁は薄い。108～111は甕。いずれも長胴で、108を除き上げ底の底部である。口縁は108、110が水平方向に大きく曲がるのに対し、111はゆるやかに外傾する。調整は、109は外面ミガキ調整、110が外面ハケメ調整、内面ミガキ調整、111は外面ハケメおよびミガキ調整、内面ミガキ調整。いずれも二次焼成の痕や煤付着が認められる。

112～118はＳＫ51出土。ＳＫ51は貼り床が認められ、貼り床より下層出土が113で、それ以外は上層出土である。112、113は壺口縁部。112は垂下口縁の壺で、口縁外面に櫛描き（単位は３条）とみられる山形文を施す。外面ハケメ調整、内面ミガキ調整。113は短く外反する壺口縁部で、端部に

１条の沈線をめぐらす。内面ハケメの後ミガキ調整。114は壺底部。平底で、外面ハケメの後ミガキ調整、内面ナデとミガキ調整。115は甕口縁部。短く屈曲する口縁で、端部に刻み目、胴部に刺突文を施す。外面ハケメ調整、内面ミガキ調整。116は甕。ハの字に広がる高台状の底部に長胴の胴部からなり、口縁はゆるく曲がる。調整は外面にハケメ調整を行い、一部にミガキもみられる。また底部近くに焼成後の穿孔が認められる。117は甕底部。平底で、端部が外方へ拡張されている。外面ハケメ調整。118は高坏脚部。坏部と脚部の境に相対する位置に２箇所の穿孔があり、また裾部に1箇所の円形透かし穴が残存する。

119～123はＳＫ67出土。119は壺で口頸部を欠損する。平底の底部に中位で最大径となる長胴を持つ壺で、外面ミガキ調整、内面ハケメ調整。120は壺の底部。やや上げ底の厚い底部から胴部が内湾して立ち上がる。器壁は厚く、内外面ミガキ調整。121は甕の底部。上げ底の底部で胴部は外傾する。122、123は口径と器高の比率や煮炊きの被熱を受けていないことから、鉢と見られる。122は上げ底で口縁はくの字に曲がり、紐通しとみられる2個の穿孔が認められる。内面ミガキ調整。123は122に比べて大型で、器壁や底部も厚手である。内外面ともハケメの後ミガキ調整を行う。

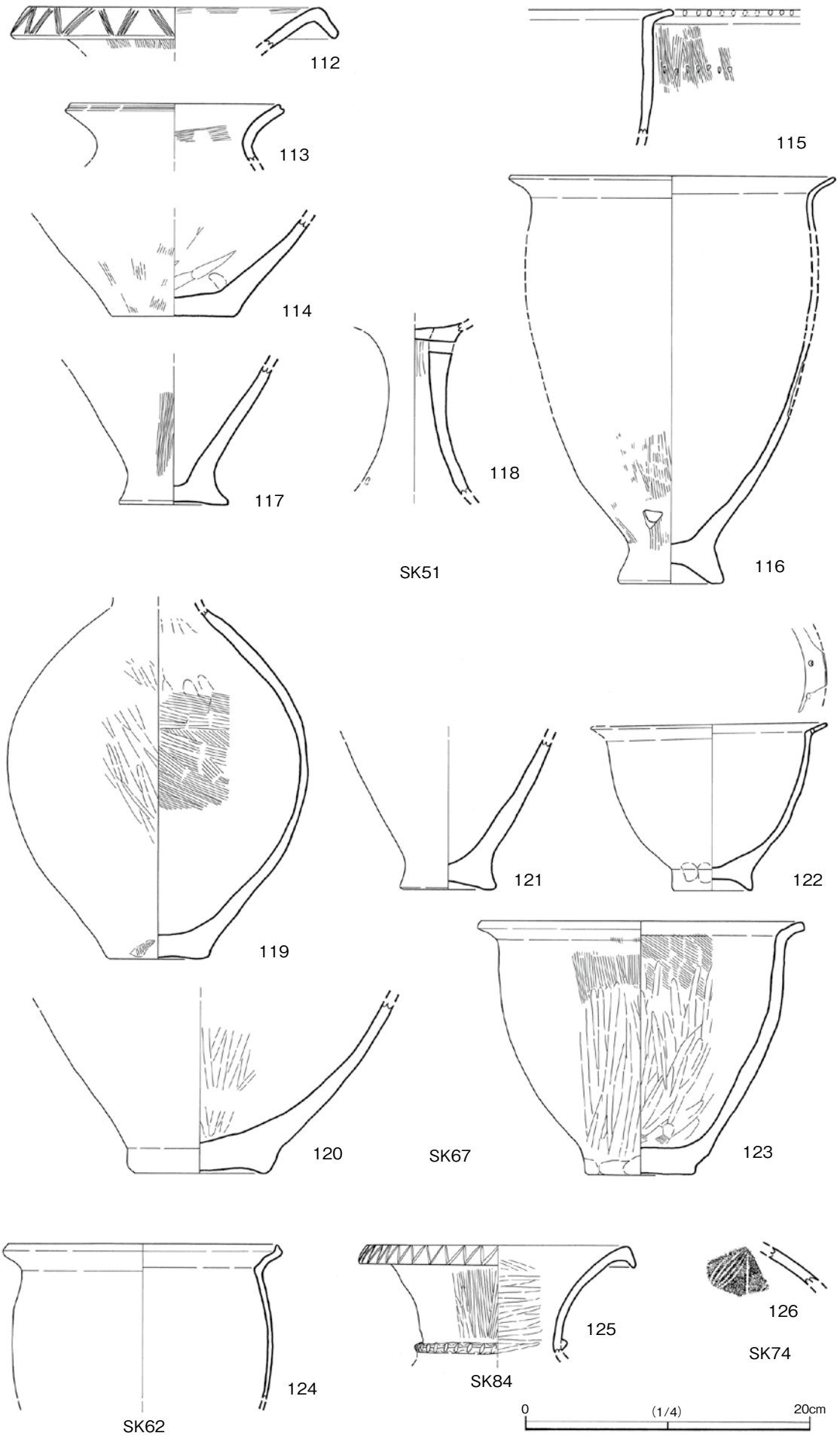
124はＳＫ62出土の甕。端部を上方につまみ出したような跳ね上げ口縁の甕で、外面には煤付着、内面にはミガキ調整を行う。

125はＳＫ84出土の壺。端部が下方へ拡張する垂下口縁の壺で、外面にはヘラ描き山形文を施す。頸部には刻み目を持つ突帯を貼り付ける。調整は外面がタテ、内面がヨコへのミガキを行う。

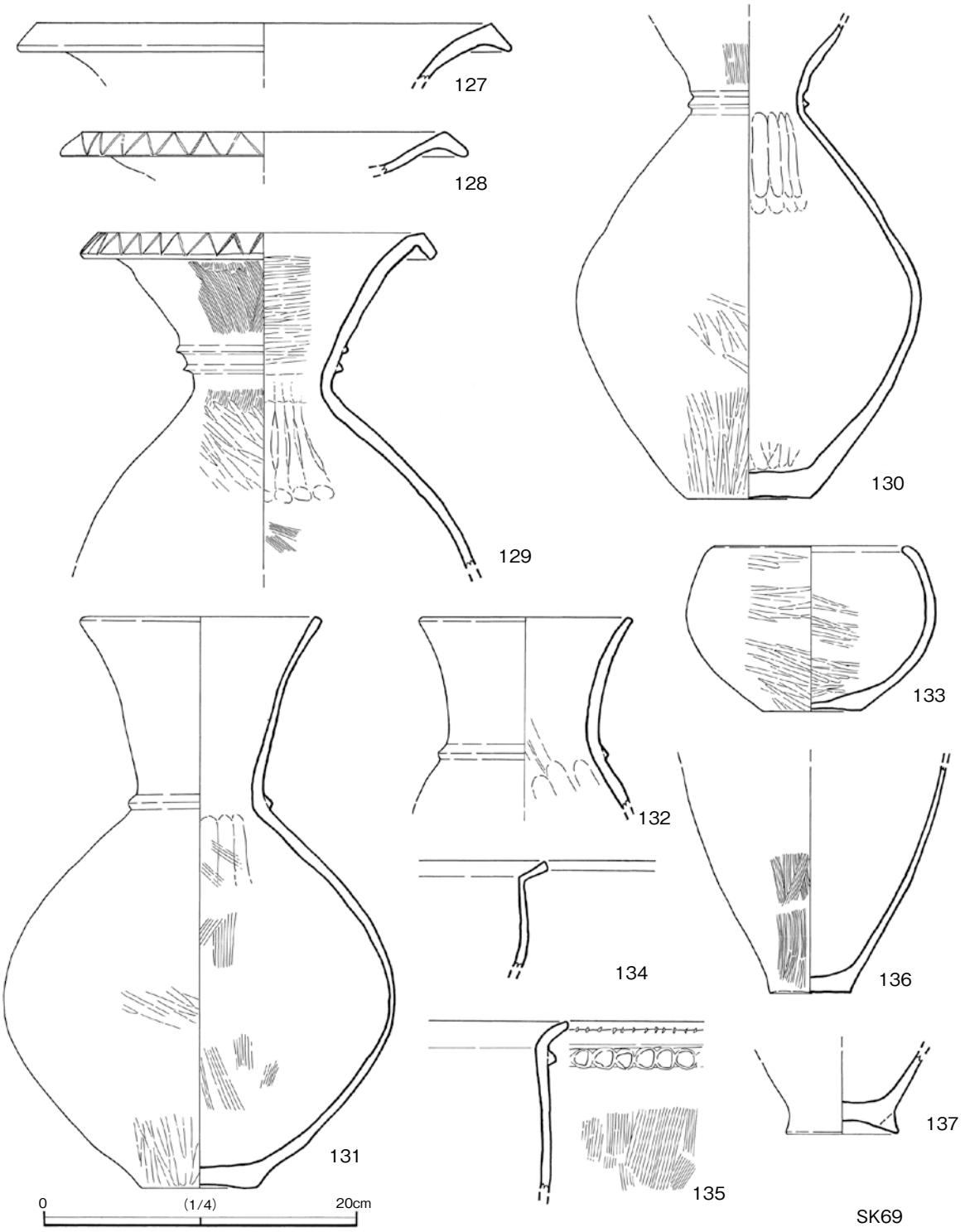
126はＳＫ74出土の壺胴部片。貝殻施文による軸を有する木の葉文が認められる。

127～137はＳＫ69出土。127～129は垂下口縁の壺である。垂下部分は127、128が水平近くに拡張するのに対して、129は斜め下方に鋭角的に折れる。127は無文であるが、128、129は施文具を押圧して山形文を施している。129はもっともくびれた頸部部分よりやや口縁部側に２条の突帯をめぐらしている。内外面ともハケメ調整およびミガキ調整を行っており、頸部内面には成形時のしぼり痕が残る。これらの壺の胴下半部の形態は130と同様なものと考えられる。130は平底で、胴部は中位で最大径となる卵形で、頸部には１条の三角突帯を貼り付ける。調整は頸部にハケメ調整が残り、他はミガキ調整。131、132は、長頸壺。131はやや上げ底の底部から胴部は中位で最も張り出し、くびれた頸部から口縁部は外反して立ち上がる。頸部には1条の断面三角突帯を貼りつける。外面ミガキ調整、内面ハケメ調整。なお外面下半部には被熱の痕跡と煤付着、内面にも煤付着が認められるが、これらはこの土器の本来の使用にかかわるものではなく、二次的な痕跡ととみられる。132は131に比べて頸部の立ち上がりが短い。外面ミガキ調整。134、135は甕口縁部片。134はくの字に、135はやや外反気味に折れる口縁である。134は内面煤付着。135は端部に刻み目、口縁下に連鎖状突帯をめぐらす。外面ハケメ調整。133は無頸壺である。底部は小さな平底で、口縁部は短く内湾して丸くおさまる。内外面ともミガキ調整。136、137は甕の底部。136は平底で長胴をなし、内外面ともハケメおよびミガキ調整。煤付着。137は上げ底である。

138～146はＳＫ88出土。138、139は壺口縁部。138はラッパ状に開く口縁で、139は端部を拡張して垂下口縁気味で、外面に山形文を施す。140は平底の壺底部で、内湾気味に立ち上がる。141は壺で、上げ底の底部から胴部は下位で最大径となる、洋なしに似た形状である。内外面ミガキ調整。142は甕。



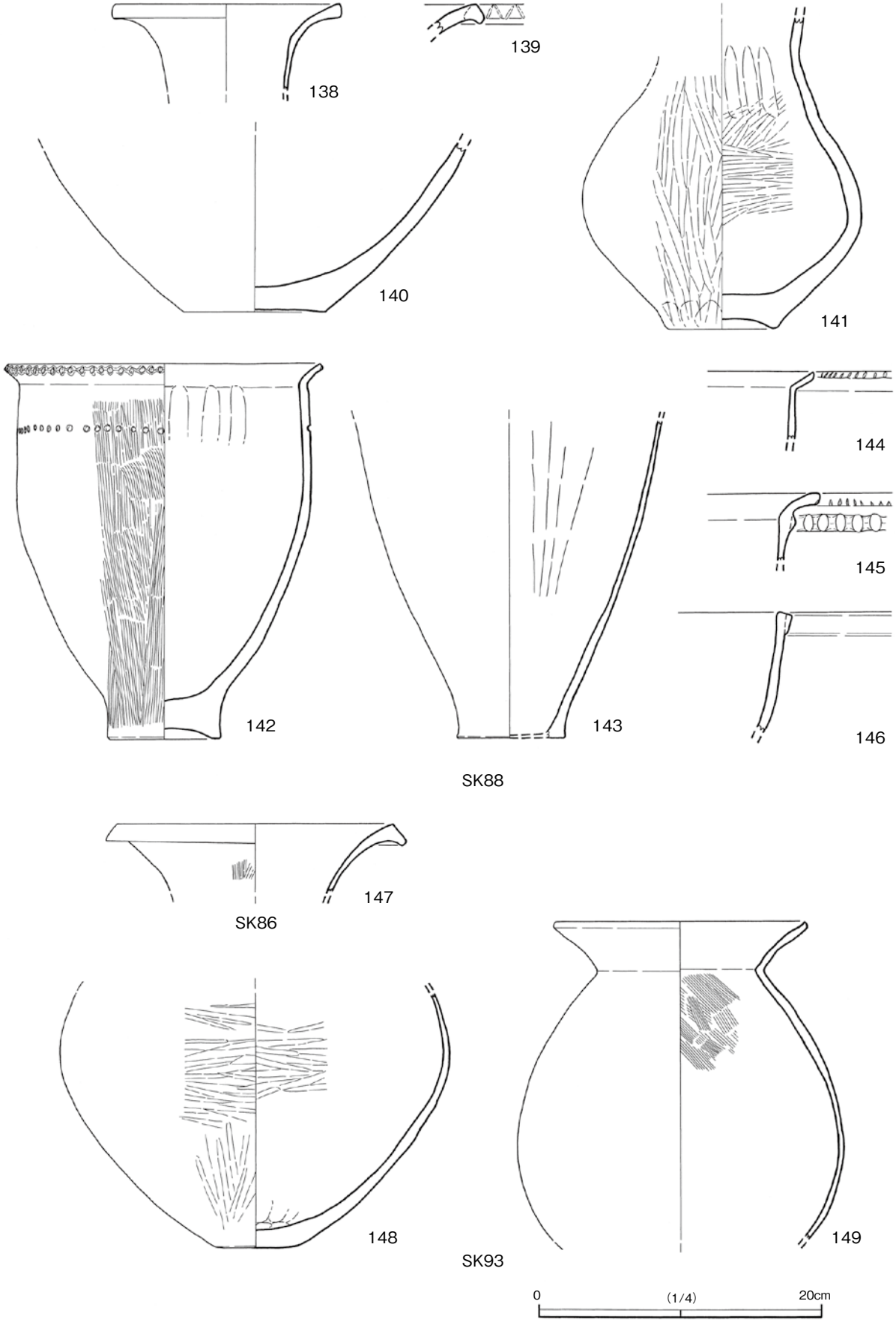
第 57 図　IV 地区出土土器実測図（11）



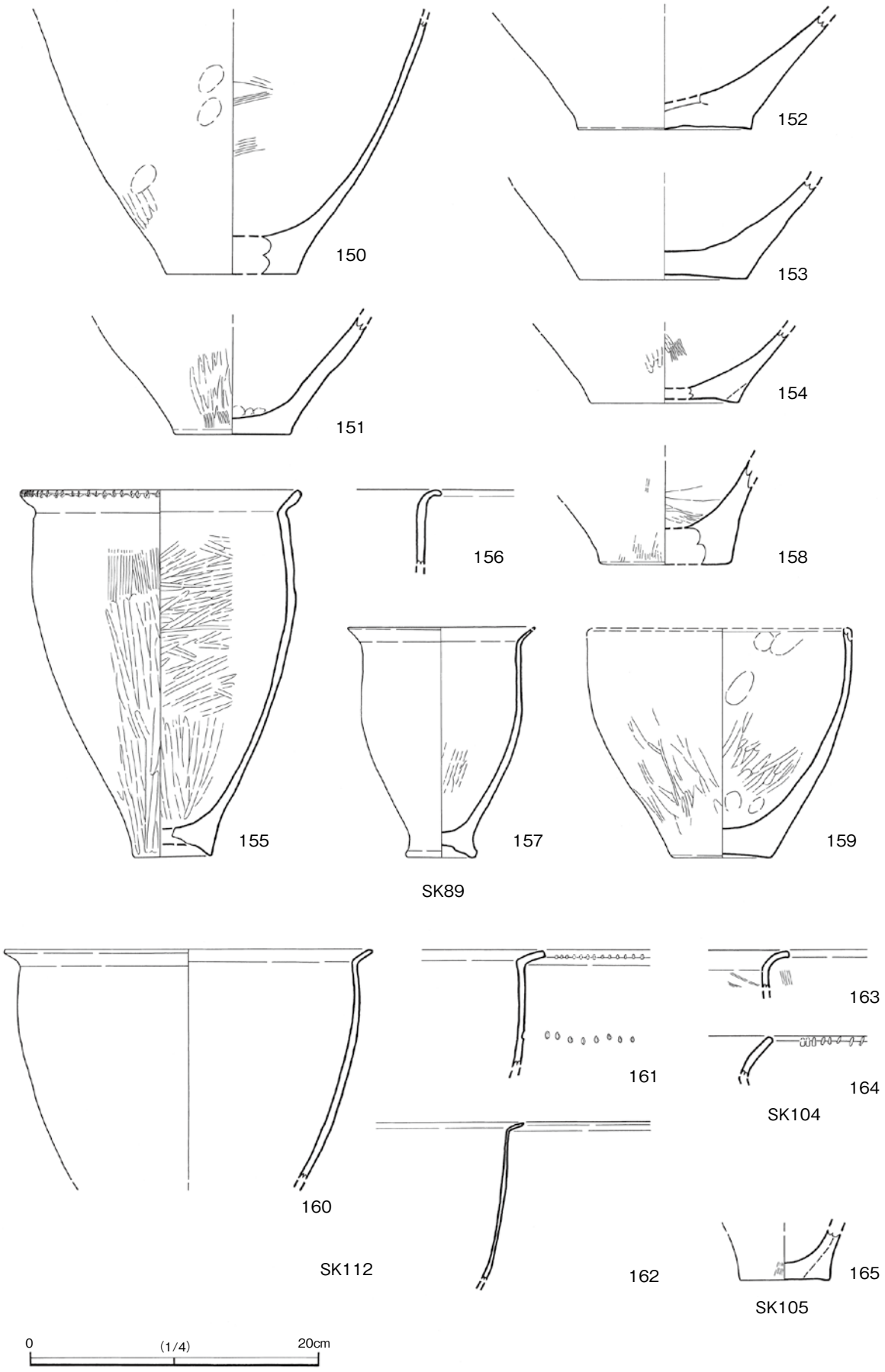
第 58 図　IV 地区出土土器実測図（12）

上げ底の底部から胴部は内湾して立ち上がり、口縁は屈曲して端部に刻み目を持つ。胴部には円形の刺突文をめぐらせる。外面ハケメ調整、内面ミガキ調整。外面には煤付着。143は甕の底部で、厚さが薄いのが特徴的である。平底とみられる。外面ミガキ調整、内面ナデ調整。144、145は甕口縁部片。144はくの字に、145は外反気味に屈曲する口縁で、いずれも端部に刻み目を有する。さらに145は口縁下に連鎖状突帯を貼り付ける。いずれもミガキ調整。146は鉢の口縁部。口縁外面を肥厚させて段状とし、内面ハケメののちミガキ調整を施す。なお内面には煤が付着。

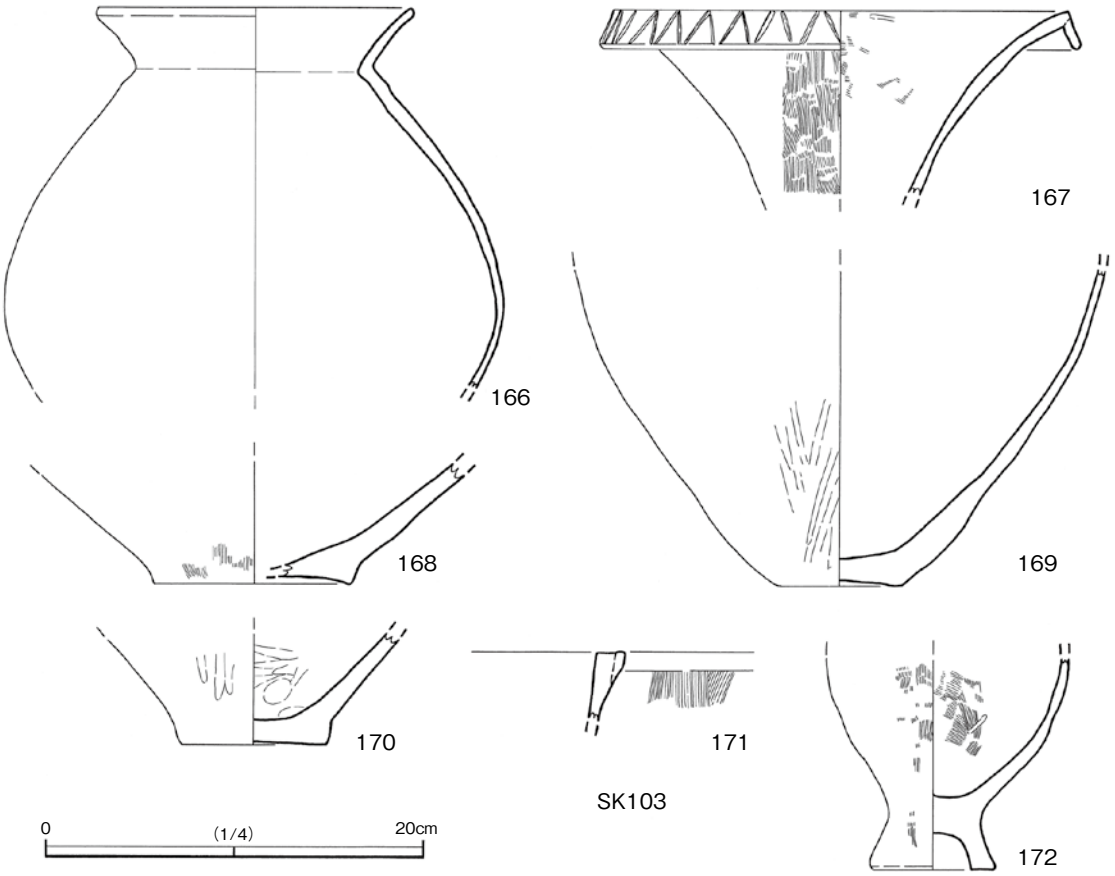
147はＳＫ86出土の壺口縁部。斜め下方に短く拡張する垂下口縁の壺で、一部にハケメ調整が残る。



第 59 図　IV 地区出土土器実測図（13）



第 60 図　IV 地区出土土器実測図（14）



第 61 図　IV 地区出土土器実測図（15）

被熱の痕跡があり、このためか器面の剥離が著しい。

148、149はＳＫ93出土の壺。148は小さい平底から大きく張り出した球形の胴部を持つ。内外面ミガキ調整。149は口径より張り出したやや下膨れの胴部と、くの字に屈曲した口縁からなる。内面はハケメおよびミガキ調整を施す。

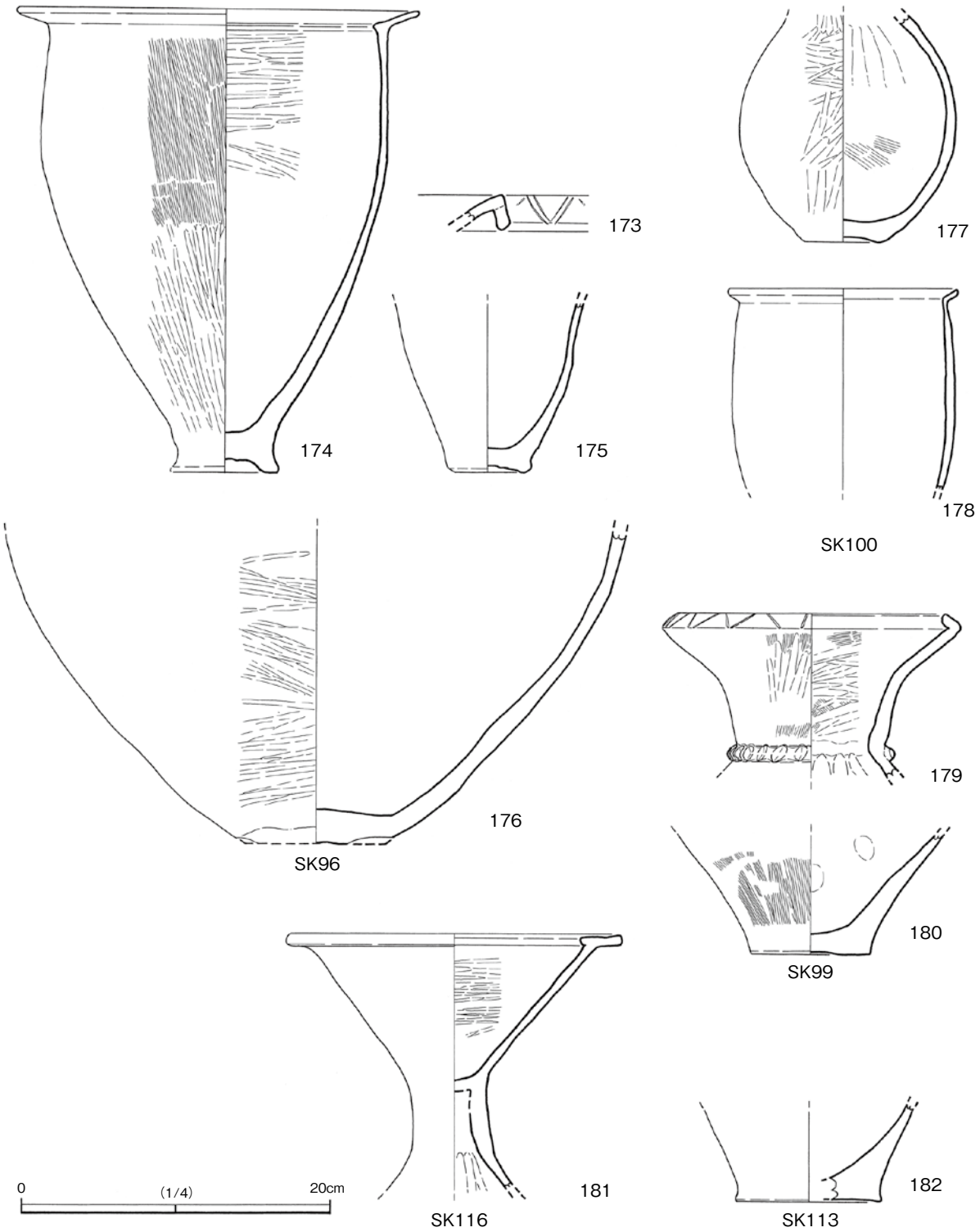
150～159はＳＫ89出土。150～154、158は壺底部。平底又はわずかに上げ底で、胴部は外傾して立ち上がる。調整はハケメの後ミガキを主体としている。なお150は内面に煤が認められたが、ＳＫ89は埋土に炭や炭化種子を多く含んでいたことから、二次的な付着と見られる。

155～157は甕。155は上げ底の底部と長胴で、口縁端部には刻み目を施す。外面はハケメののちミガキ調整、内面ミガキ調整。口縁部付近に被熱の痕跡がある。157は小型の甕。上げ底、長胴で、口縁端部の厚さは薄く尖り気味である。内面ミガキ調整。156は短く外反する甕口縁部片。159は鉢とみられる。わずかに上げ底の平底で、胴部は内湾して立ち上がり、口縁は丸くおさめる。外面ミガキ調整、内面ミガキとナデ調整を行う。

160～162はＳＫ112出土。いずれも甕の口縁部から胴部にかけてで、口縁は短く折れ曲がる。160、162は器壁が薄く、口縁部周辺は無文で、ミガキ調整を施す。161は端部と胴部にそれぞれ刻み目と刺突文をめぐらせる。外面ハケメ、内面ミガキ調整。

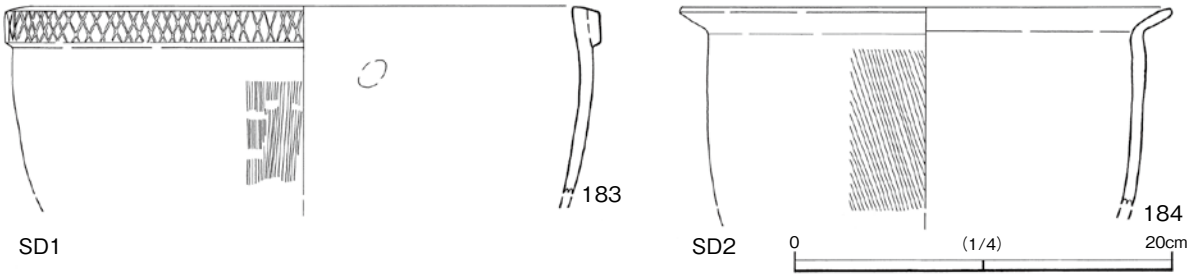
163、164はＳＫ104出土の甕口縁部片。163は外反する口縁で、内外ハケメ調整である。164は端部に刻み目を有する。

165はＳＫ105出土の甕底部である。平底。



第 62 図　IV 地区出土土器実測図（16）

166～172はＳＫ103出土。166は大きく張り出した胴部に、くの字口縁の壺である。169は166と同一個体とみられ、わずかに上げ底となる小さな底部を持つ。いずれもミガキ調整とみられるが、被熱による赤色化が著しい。167は端部が下方へ折れる垂下口縁壺である。外面には山形文を施す。外面ハケメ調整、内面ハケメののちミガキ調整。168、170は壺底部。168は上げ底、170は平底で、胴部は大きく外傾して立ち上がる。168はハケメののちミガキ調整。170は内外面ミガキ調整。171は鉢の口縁部。端部を肥厚させ、上面は平坦としている。外面ハケメ調整。172は小型の甕とみられる。高



第63図　Ⅳ地区出土土器実測図（17）

台状のしっかりした底部から、胴部は内湾して立ち上がる。口縁部は欠損する。内外面ハケメののちミガキ調整。被熱の痕跡や煤が付着している。

173～176はＳＫ96出土。173は壺の垂下口縁部片で、２重線による山形文がみられる。174は甕で、ハの字に踏ん張る上げ底の底部から長胴となり、口縁部は逆Ｌ字状に屈曲する。口縁上面は平坦で、屈曲部分で内側にわずかに拡張する。調整は、外面がハケメの後下半にミガキをし、内面はミガキである。被熱の痕跡があり、煤や炭化物の付着がある。175は小型の甕で、口縁部を欠損。上げ底で、外面ハケメ調整。176は大型の壺底部。平底で胴部は大きく張り出し、外面ミガキ調整。

177、178はＳＫ100出土。177は小型の壺で、口頸部を欠損する。上げ底の底部に卵形の長胴がつく。外面ミガキ調整。内面はハケメ調整と成形時のしぼり痕が残る。二次的な煤の付着がみられる。
178は甕で、直線的な胴部に短く曲がる口縁部を有する。ハケメののちミガキ調整。

179、180はＳＫ99出土。179は壺の口頸部。頸部から外反して開く口縁部は、端部で内側に鋭角的に内折し、外面には山形文を施す。頸部には連鎖状突帯を貼り付ける。内外面ともハケメの後ミガキ調整。180は甕底部。平底で、外面ハケメ調整、内面ナデ調整。

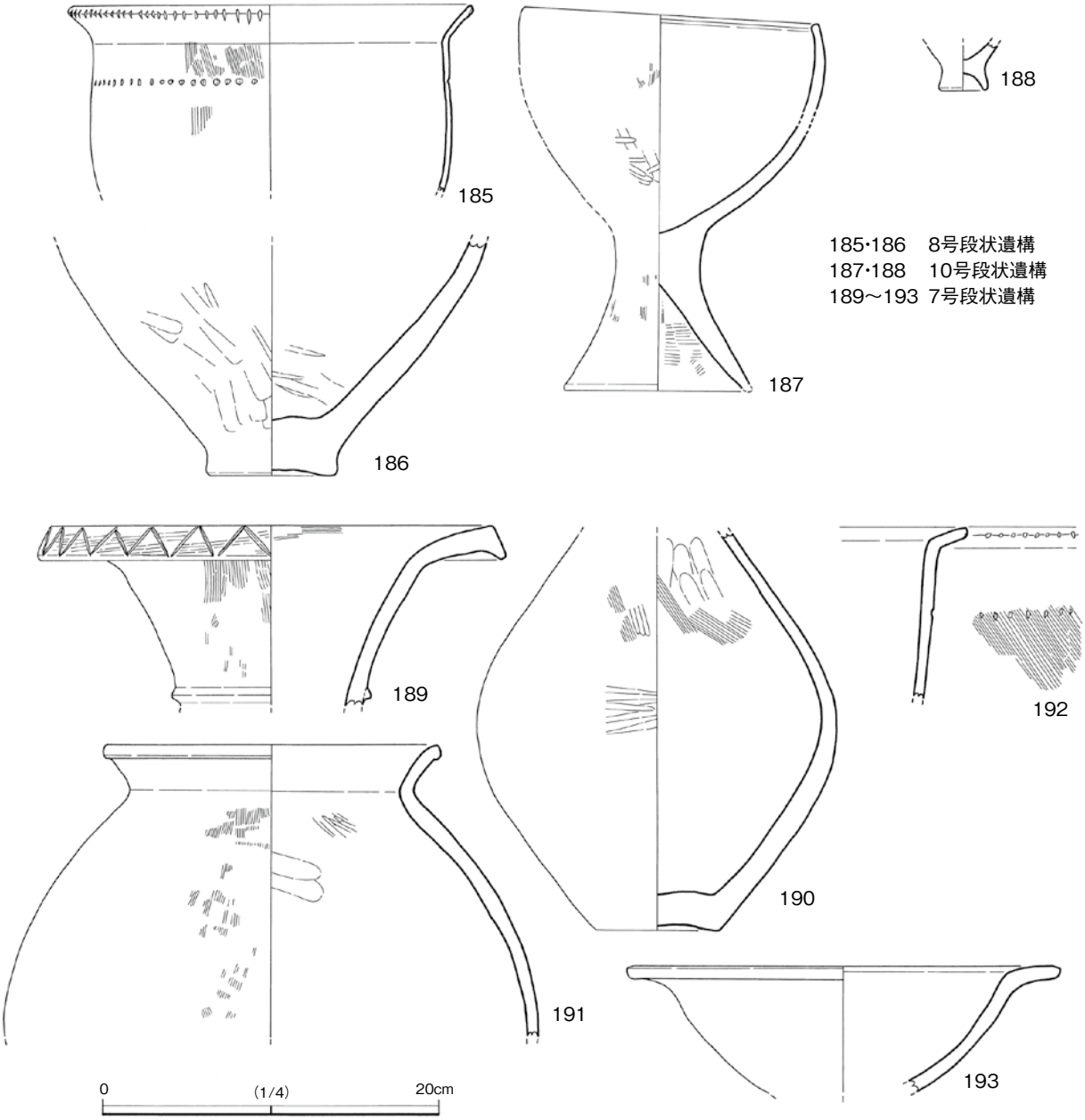
181はＳＫ116出土の高坏。筒状の脚部から坏部は直線的に外傾して立ち上がり、平坦な鋤先口縁となる。内面ミガキ調整。

182はＳＫ113出土の甕底部。平底。外面ハケメとミガキ調整がある。

183はSD１出土の鉢。口縁外面を肥厚させて段をつくり、施文具押圧による斜格子文を細かく施文。外面はハケメ及びミガキ調整、内面ミガキ調整。184はSD２出土の甕で、外面ハケメ調整で煤付着。

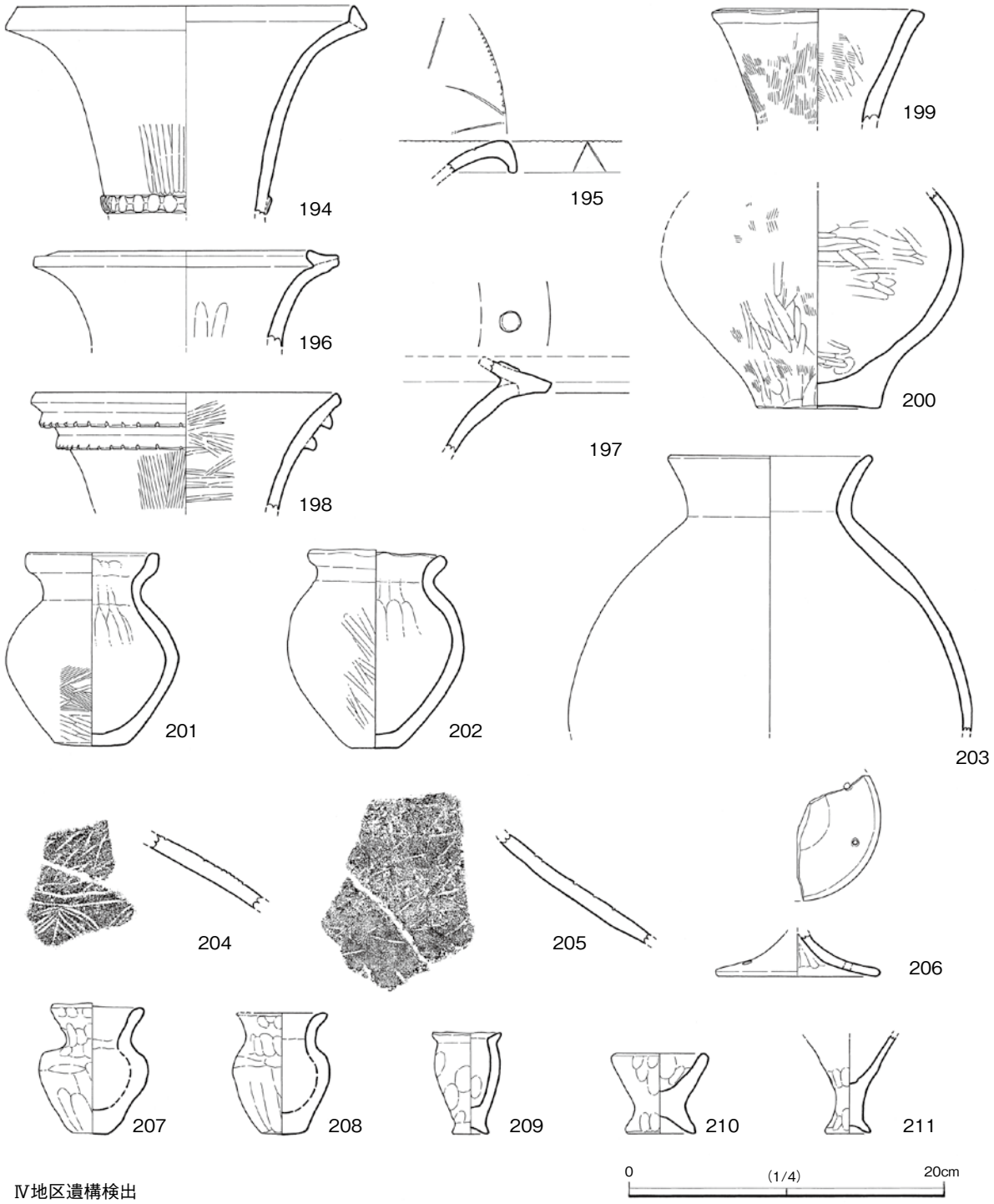
185、186は８号段状遺構、187、188は10号段状遺構、189～193は７号段状遺構出土。185は口縁端部に刻み目、胴部に刺突文を持つ甕である。外面ハケメ調整で煤付着。186は厚手のやや上げ底となる壺底部。内外ミガキ調整。187は高坏。ハの字に広がる低い脚部に、口径に比して深さのあるワイングラスのような坏部が乗る。口縁端部は面をなし内側にわずかに肥厚する。調整はハケメののちミガキ。188はミニチュア土器の底部。189は垂下口縁の壺で、垂下部分への拡張は短い。外面には施文具を押圧した山形文を施し、頸部には１条の突帯が残存する。外面ハケメののちミガキ調整、内面ミガキ調整。190はわずかに上げ底で胴部卵形の壺である。外面ハケメののちミガキ調整、内面にハケメ調整が残る。191は球形の胴部にくの字口縁となる壺。外面ハケメののちミガキ調整で炭化物が付着する。内面ミガキ調整。192は甕口縁部で、端部に刻み目、胴部に刺突文を施す。外面ハケメ調整。193は高坏坏部で、口縁部は水平にのびる。内外ミガキ調整。

194～226はⅣ地区遺構検出時出土の土器である。194は壺口縁部。外反して端部で内側に屈曲する内折口縁で、頸部には連鎖状突帯をめぐらす。外面ハケメ後ミガキ調整。内面ミガキ調整。195は



第 64 図　IV 地区出土土器実測図（18）

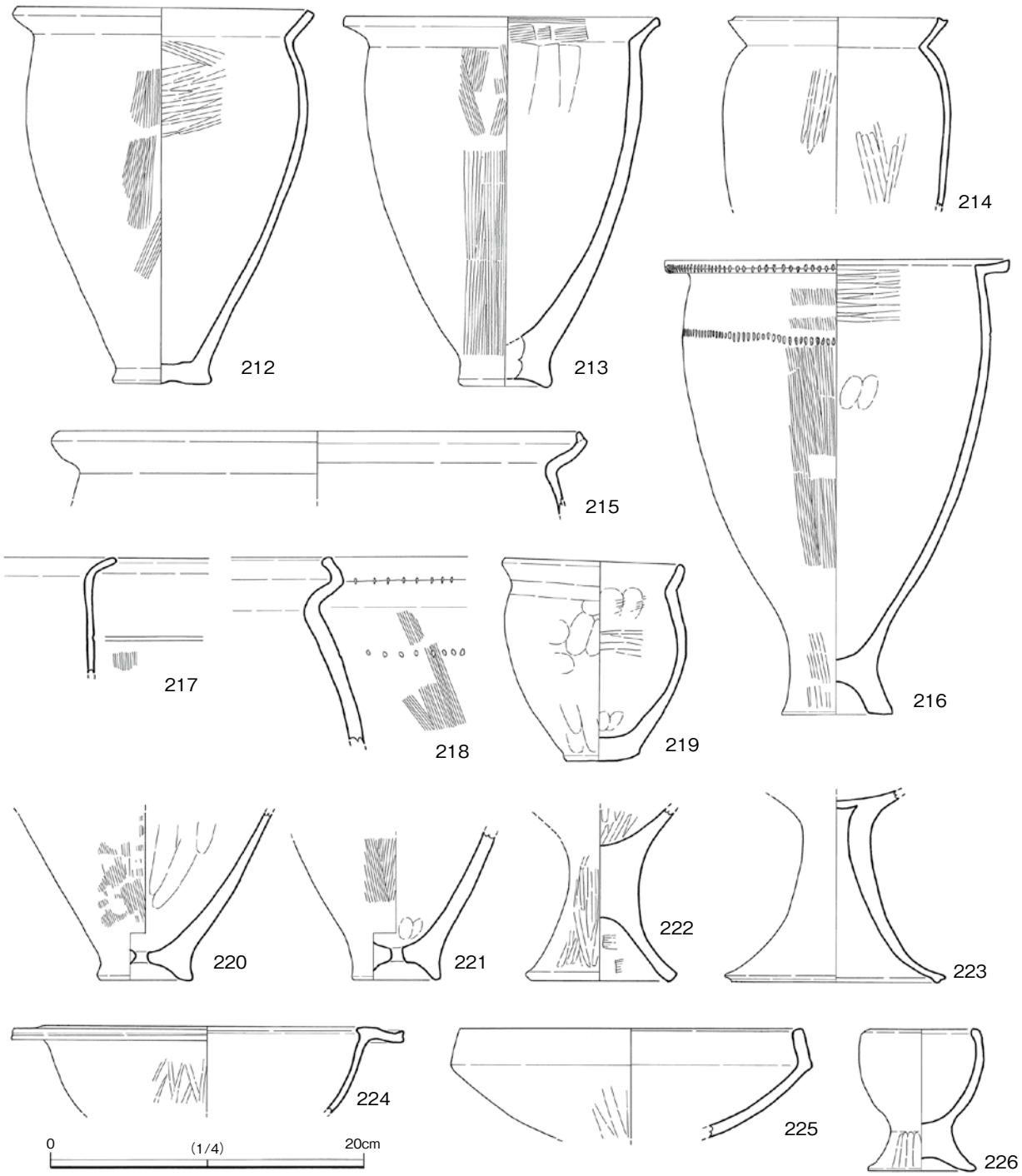
垂下口縁の壺。口縁正面と側面に山形文、円周に細かな刻み目を施す。196は外反する口縁端部を肥厚させ、内側に折り返すような形態の壺である。外面ミガキ調整で煤付着あり。197は鋤先口縁の壺。上面は平坦で外側に傾斜しており、１つの円形浮文が残存する。破断面には口縁成形時における粘土の継ぎ目が明瞭に残る。198は壺口縁部で、外反する口縁下に２条の刻み目を有する突帯を貼り付けている。外面ハケメ調整、内面ミガキ調整。199は壺の口頸部。ラッパ状に開く長頸壺とみられ、外面ハケメ調整、内面ハケメの後ミガキ調整。200は出土状態から199と同一個体の可能性がある壺の胴底部である。平底と球形の胴部で、外面ハケメの後ミガキ調整、内面ミガキ調整。201、202は小型の壺。201は胴部が張り口縁は内湾気味に立ち上がる。外面ハケメの後ミガキ調整。202は小さい平底で、肩の張る胴部から短く外反する口縁部となる。外面ミガキ調整、内面ナデおよびしぼり痕が認められる。203は壺。球形の胴部からくの字に曲がる厚手の口縁となる。内外面ミガキ調整。204、205は壺の肩部文様帯片。いずれも貝殻による施文で、204が羽状文・２条沈線・有軸の木の葉文、



第 65 図　IV 地区出土土器実測図（19）

205が羽状文である。両者とも羽状文が器面に対して斜めでやや粗雑な施文となっている。206は壺の蓋。中央がつまみとして高く笠状の形状をしている。紐通しの孔が２個穿ってある。207～211はミニチュア土器で、いずれも器面に手づくねによるナデや指押さえの痕跡が明瞭に残る。これらのうち、207、208は壺、209は甕、210、211は高坏を模したと考えられる。

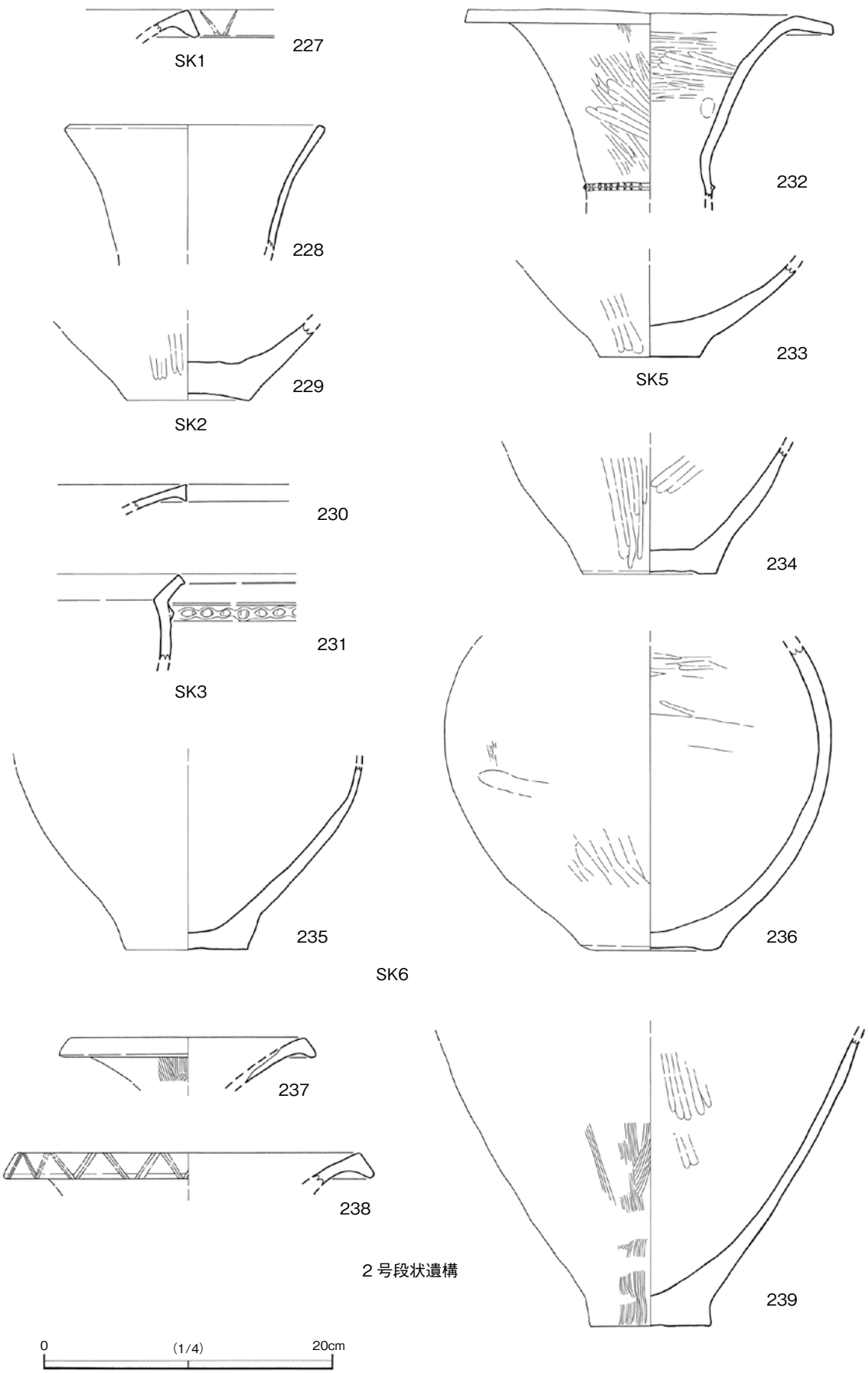
212、213、216は甕で、口縁から底部までの形状が把握できる資料である。212は平底に近い底部で肩の張るくの字状口縁である。外面ハケメののちミガキ調整で煤付着。内面ミガキ調整。対して213は上げ底で肩が張らないタイプで、外面ハケメ、内面ハケメとナデ調整。216は高さのある上げ底で、口縁は逆Ｌ字状となり、端部に刻み目、胴部に施文具を押圧しての刺突文を巡らす。外面ハケメ、



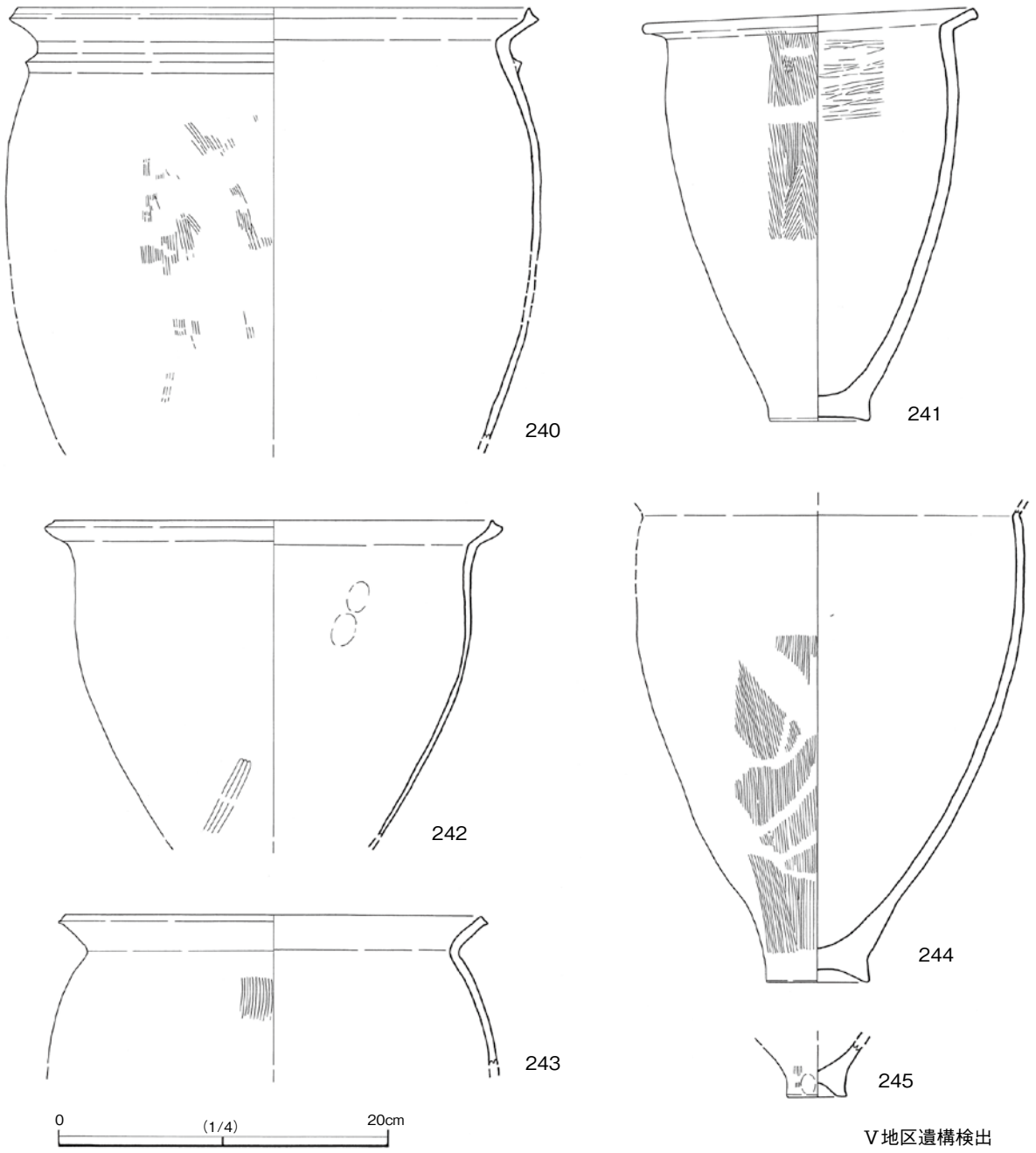
Ⅳ地区遺構検出

第 66 図　IV 地区出土土器実測図（20）

内面ミガキ調整。煤付着。214、215は跳ね上げ口縁の甕。214は内外ミガキ調整。217は口縁下に1条沈線を有する甕口縁部片。218は胴部が張る内折口縁甕で、屈曲部分に刻み目と、胴部に刺突文を巡らす。外面ハケメ調整。219は小型の甕とみられる。丸底に近い底部から肩の張る胴部とゆるく屈曲する口縁部で、内外ともナデや指押さえ痕が残る。220、221は甕底部で、いずれも焼成前の穿孔を有する。220は外面ハケメ調整、内面ミガキ調整。222、223は高坏脚部。222はミガキ調整が主体である。223は裾部端が下方へつまみ出した形状である。224は高坏の坏部。鋤先口縁で端部には凹線がめぐる。内外ミガキ調整。225は高坏の坏部で、口縁が上方内側に折れる形態である。内外ミガキ調整。226は台付きの鉢とみられる。ハの字に開いた低脚に椀状の坏部が乗る。口縁端部は丸くおさまり、



第 67 図　V 地区出土土器実測図（1）



第 68 図　Ⅴ地区出土土器実測図（2）

内側にわずかに肥厚する。内外ミガキ調整。

227～245はⅤ地区出土である。227はＳＫ１出土。垂下口縁壺の口縁部片で、山形文が施される。228、229はＳＫ２出土。228は大きく開く壺口縁である。229はわずかに上げ底の壺底部で、ミガキ調整あり。230、231はＳＫ３出土。230は大きく開く壺口縁部でわずかに下方へ拡張する。231はくの字状の口縁で、連鎖状突帯を貼り付ける。232は朝顔形に大きく開く壺口縁部で、頸部には薄い突帯に刻み目を施す。内外面ともハケメの後ミガキ調整。233は壺底部。内外面ともミガキ調整。234～236はＳＫ６出土。いずれも壺底部で平底またはわずかに上げ底の底部に球形の胴部となる。内外とも調整はミガキが主体である。

237～239は２号段状遺構出土。237、238は斜め下方への拡張が短い垂下口縁壺である。238は施

文具を使用しての山形文を施す。調整は、237が外面ハケメ調整。238は内面ミガキ調整。239は厚い平底の甕底部で、外面ハケメ調整、内面ミガキ調整。

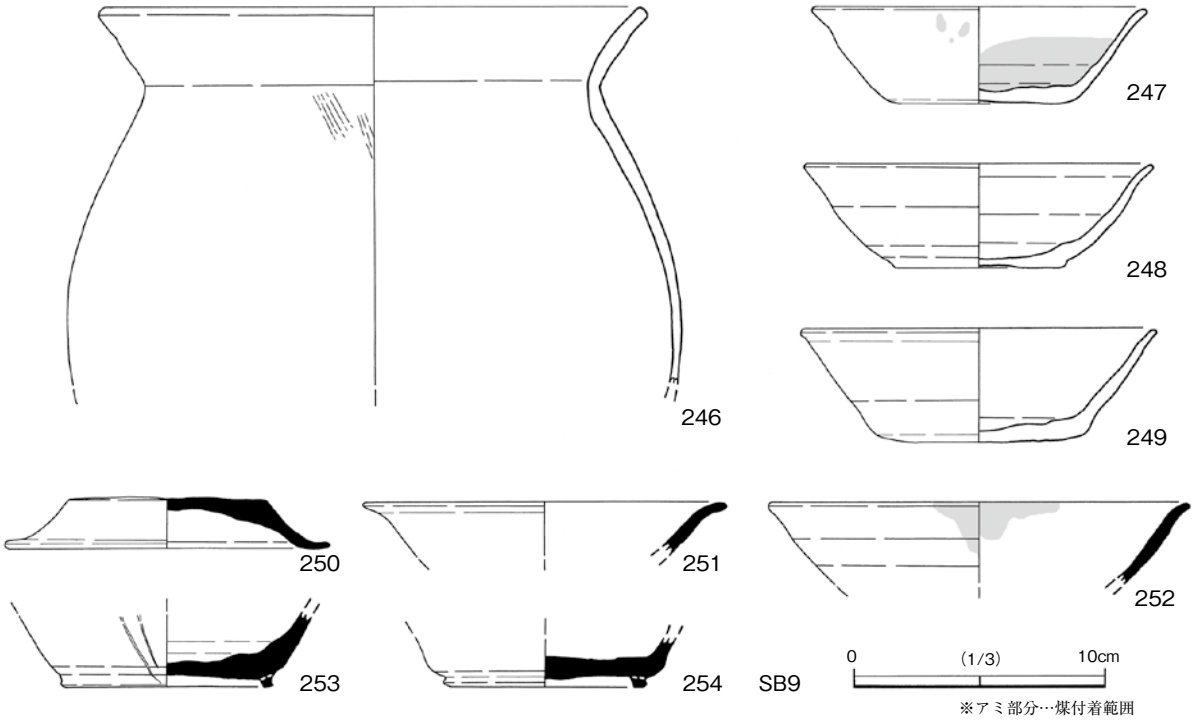
240～245はＶ地区遺構検出時の出土土器である。240、242は跳ね上げ口縁の甕。240は大型で口縁下に三角突帯を貼り付ける。ハケメの後ナデ調整。241は口縁が水平方向に近く曲がる甕で、やや上げ底である。外面ハケメ調整。内面ミガキ調整。243は肩の張るくの字状口縁の甕。外面ハケメののちミガキ調整。244は甕で口縁を欠損する。上げ底。外面ハケメ調整、内面ハケメののちミガキ調整。これらの甕は外面に炭化物や煤が付着している。245は上げ底となる甕底部。ハケメとナデ調整を施す。

（２）古代以降の土器（第69～73図　図版42～44）

246～254はＳＢ９から出土した遺物である。246～249は土師器。246は甕。外面の一部にハケメの痕跡がみられる。247～249は坏である。無高台で、口縁はやや外反する。調整は回転ナデ。口縁の復元径は13.2～14.0cm。色調はにぶい黄橙色を呈する。247は内面に炭化物や煤が付着しており、灯明皿として使用された可能性がある。250～254は須恵器。250はつまみをもたない坏蓋。調整は回転ナデで、天井部内面は静止ナデを施す。天井部外面はヘラ切りのちナデ。ロクロは左回転。251、252は坏の口縁片で、口縁は外反する。調整は回転ナデ。口縁の復元径は251が14.4cm、252が16.6cm。252は内外面に煤が付着する。253、254は貼り付け高台をもつ坏の底部。調整は回転ナデで、底部内面には静止ナデを施す。253の外面にはヘラ記号がみられる。ＳＢ９出土の遺物の時期は、９世紀後半頃と考えられる。

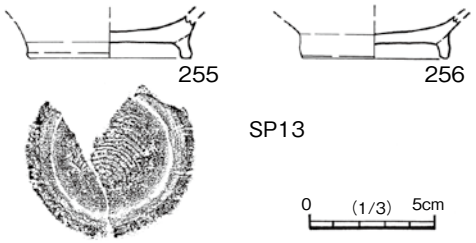
255、256はＳＰ13から出土した土師器埦の底部である。貼り付け高台で、高台内には糸切り痕がみられる。高台径は255が7.5cm、256が5.8cm。色調はにぶい黄色。10世紀後半頃の遺物である。

257～271はⅣ地区遺構検出時に出土した遺物である。257～262は須恵器。257はつまみをもたない坏蓋。調整は回転ナデで、天井部内面に静止ナデを施す。外面の一部にハケメ調整がみられる。258

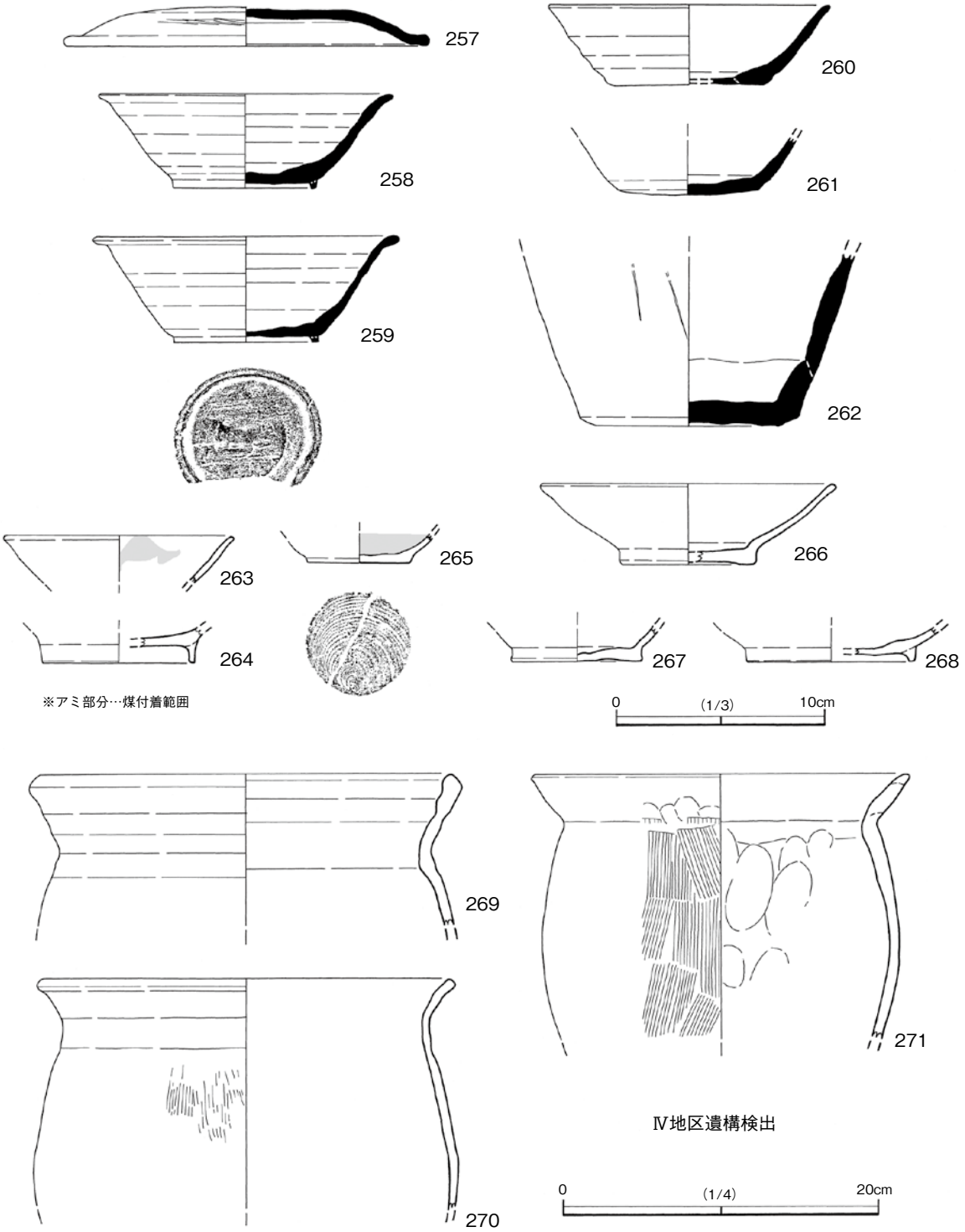


第69図　Ⅳ地区出土土器実測図（21）

～261は坏。258、259は貼り付け高台で、口縁が外反する。調整は回転ナデで、底部内面に静止ナデを施す。底部はヘラ切りののちナデで、259は板目痕が明瞭に残る。口縁の復元径は258が14.0cm、259が14.4cm。260は無高台で、口縁はわずかに外反する。焼成は土師質に近い。調整は内外面とも回転ナデ、底部はヘラ切りののちナデで、板目痕がみられる。口縁の復元径は13.2cm。261は無高台で

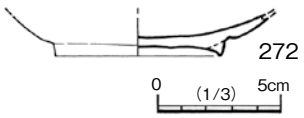


第70図　IV地区出土土器実測図（22）



第71図　IV地区出土土器実測図（23）

口縁部を欠損する。調整は回転ナデで、底部内面には静止ナデがみられる。底部はヘラ切りののちナデ。外面に煤が付着する。262は壷で、外面にヘラ記号がみられる。胴部外面の下部に回転削りを施しており、底部と胴部の境界を面取りする。これらの須恵器はＳＢ９付近の丘陵上、あるいは東側斜面から出土した。ＳＢ９出土の土師器無高台坏（247～249）と須恵器無高台坏（260、261）は、形態的特徴が一致しており同時期の遺物と考えられる。



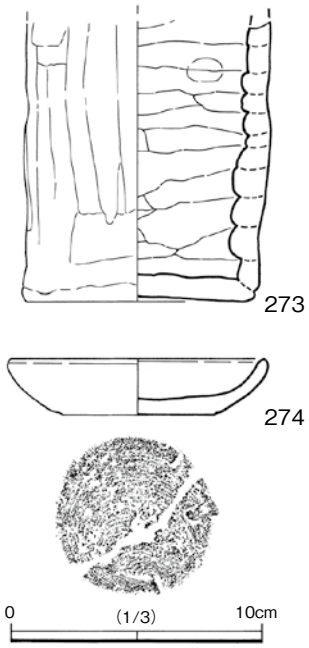
第72図　Ⅴ地区出土土器実測図（3）

263～271は土師器。263、265は小型の坏。263口縁はわずかに外反しており、復元径が10.8cm。調整は内外面とも回転ナデ。265は糸切り底で、底径5.8cm。263、265の胎土は精良で、器壁が薄い。また、内面には煤が付着し、灯明皿として使用されたと考えられる。264は埦の底部片。貼り付け高台で、高台の復元径は7.2cm。これらの土師器のうち、263、265、266は１号段状遺構及びＳＢ５に近接する幅１ｍ前後の段上でまとまって出土した（図版26）。また255、256の出土したＳＰ13もこの段上に位置する。266、267は底部が円盤状の坏である。いずれも底部はヘラ切り。266は口縁復元径14.0cm、底径6.4cm、器高3.8cmで、形態は皿に近い。267は底径6.2cm。268は貼り付け高台の埦の底部。調整は回転ナデ。高台の復元径は8.0cm。高台内には煤が付着する。266、267の坏は10世紀後半の特徴を有しており、他の遺物も概ね同時期と考えられるが、268の埦は時期が下る可能性がある。

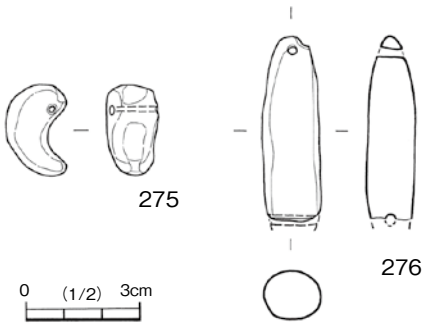
269～271は甕である。269は口縁部に内外面ともナデ調整、胴部内面に磨き調整を施す。胎土にチャートを多く含み、色調は灰黄褐色。270の調整は外面タテハケ、内面ナデ、ミガキ。271は外面に粗いタテハケを施しており、内面には指頭押圧痕が顕著に残る。

272はＶ－２地区遺構検出時に出土した土師器埦の底部。断面三角形の高台を貼り付けており、高台径は6.6cm。調整は回転ナデ。胎土は緻密で、色調は浅黄橙色。

273、274は経塚出土の遺物である。273は土師質の経筒で、上部を欠損する。底径9.2cm、残存高11.0cm。外面は縦方向のナデ調整を施すが、内面は一部に押圧痕がみられる程度で粘土紐の痕跡が明瞭に残っている。色調は浅黄色。274は土師器の皿である。口縁端部を丸くおさめており、底部には糸切り痕が残る。口縁の復元径は10.0cm。調整は回転ナデ。色調はにぶい黄橙色を呈する。山口県内出土の土師質の経筒は周南市平原経塚、下松市中宮経塚の２例である（柏本秋生「経塚関係遺物」『山口県史　資料編　考古２』山口県　2004年）。今回出土した経筒は、大きさや形態は中宮経塚のものと共通する点があるものの、内面に調整がほとんど施されておらず、粗雑なつくりとなっている。中宮経塚例からすると、当経筒は高さ約27㎝で、印籠蓋式の平蓋がつくと推定される。



第73図　Ⅳ地区出土土器実測図（24）



第74図　出土土製品実測図

（３）土製品（第74図　図版44）

275は土製勾玉である。長さ2.4cm、重さ4.6ｇ。色調はにぶい赤褐色を呈する。276は土錘。紡錘形で両端に穿孔がみられる。残存長は4.8cm、孔径は0.2cm。色調はにぶい黄褐色を呈する。275、276はいずれもⅣ地区遺構検出時に出土した。

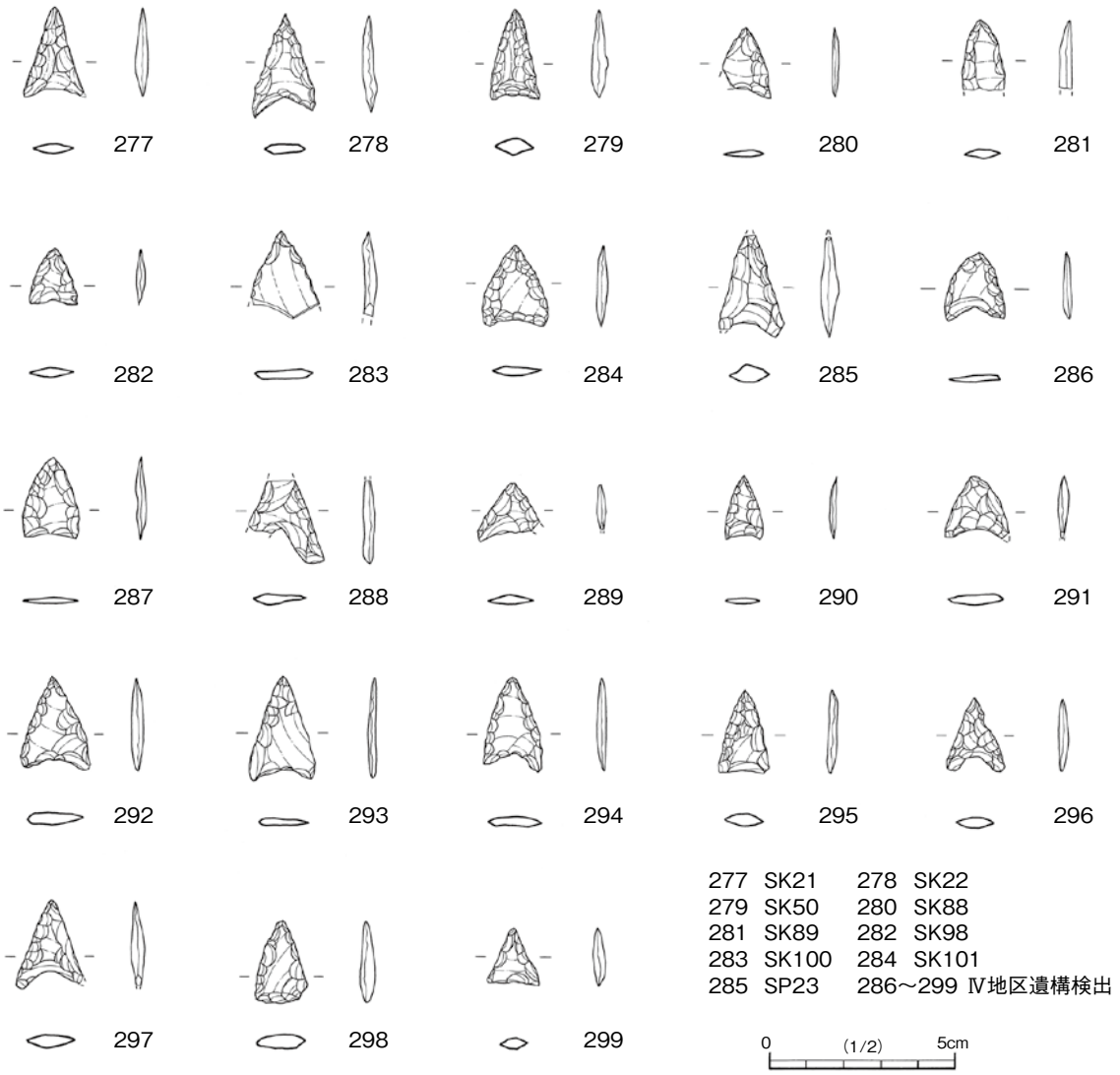
（４）石器（第75～79図　図版45～47）

277～299は打製石鏃である。大半は無茎凹基式であるが、295、298、299は平基式である。長さは1.5～2.8cm、重さは0.2～1.7ｇ。石材は278、282～284が玄武岩、296、299が姫島産黒曜石、そのほかは安山岩である。

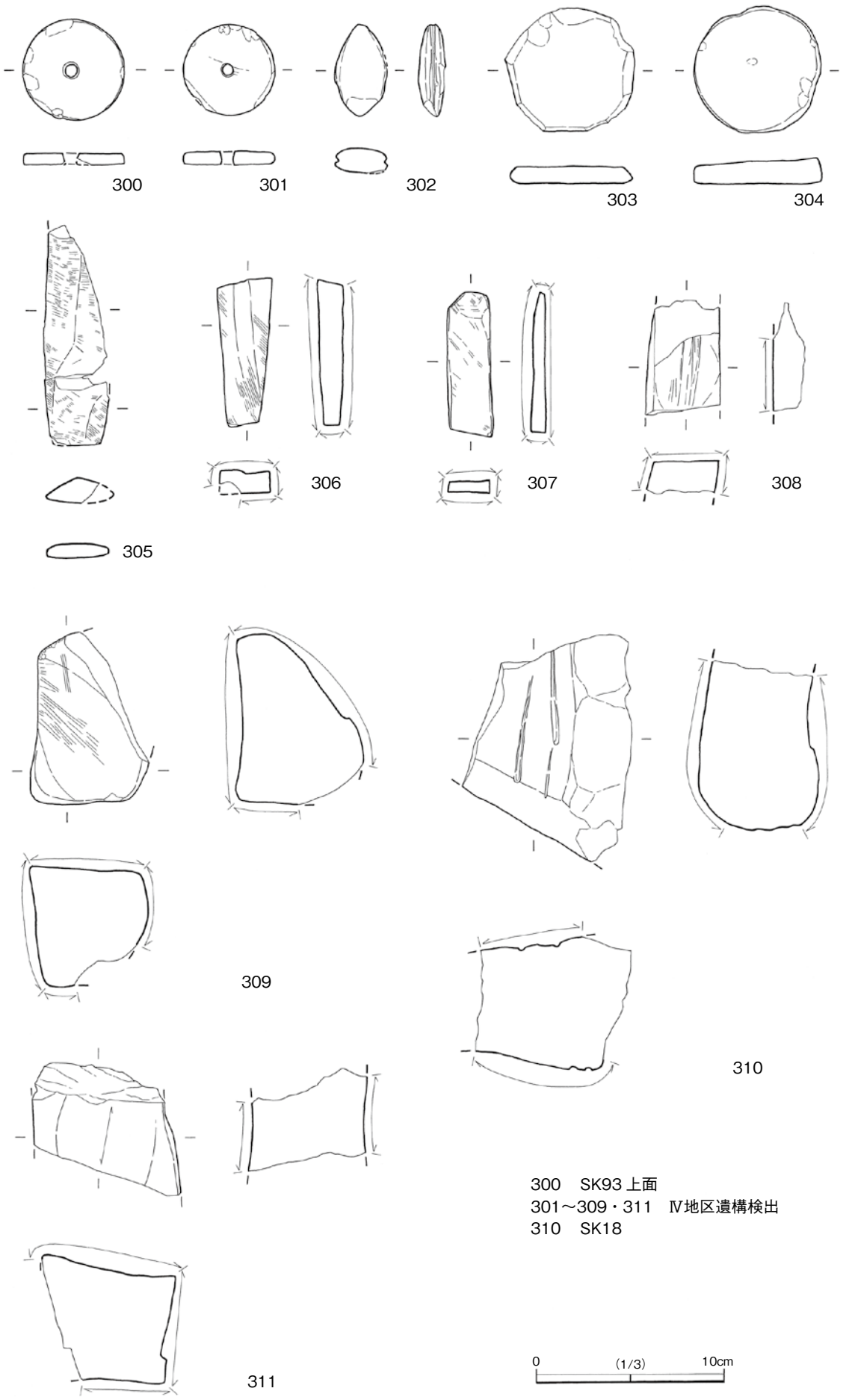
300、301は角閃石安山岩製の紡錘車である。300は径5.4cm、厚さ0.6cm、孔径0.6cm、重さ23.2ｇ。301は径4.9cm、厚さ0.7cm、孔径0.6cm、重さ18.9ｇ。303は角閃石安山岩の石材で、縁辺の一部を打ち欠いている。扁平な石材を円形に近い形に成形しており、紡錘車の初期加工段階と考えられる。304は紡錘車の未製品である。研磨によりほぼ円形に成形している。重さは78.5ｇ。

302は角閃石安山岩製の石錘である。長さ4.9cm、幅2.8cm、厚さ1.4cm、重さ16.3ｇ。

305は磨製石剣である。先端と刃部の一部を欠損する。身部の稜は中央からやや傾きながら先端へ

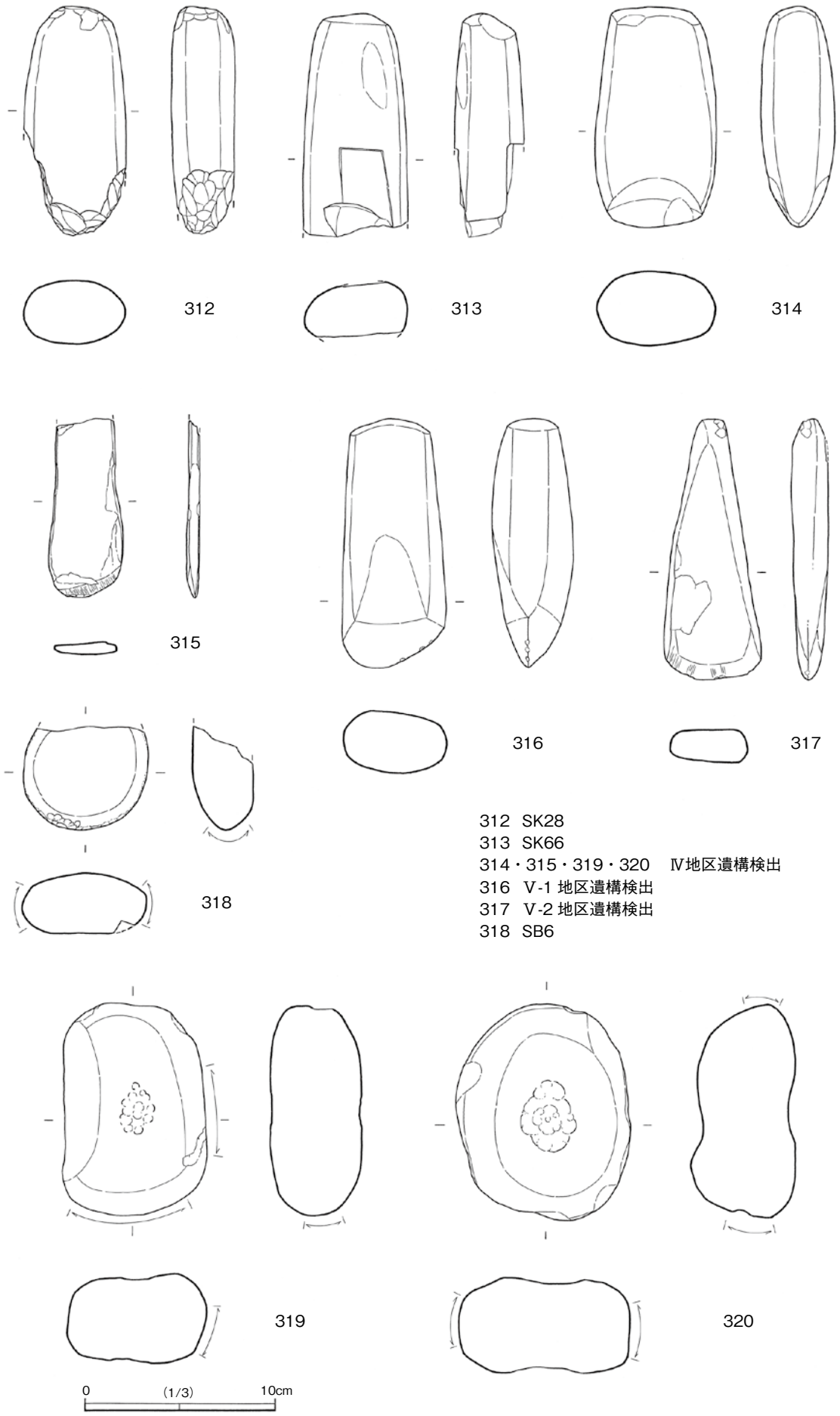


第75図　出土石器実測図（1）



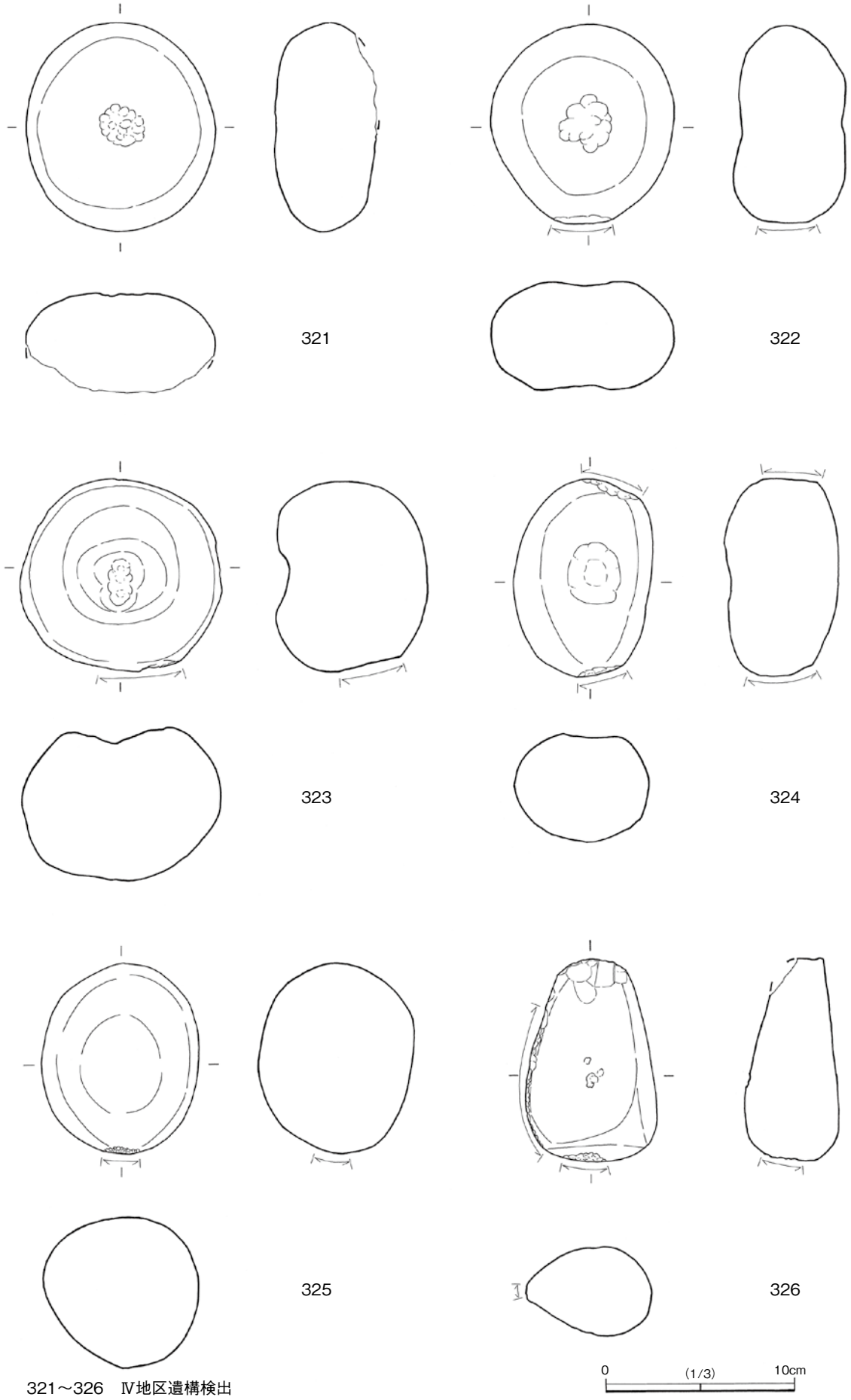
300　SK93 上面
301～309・311　Ⅳ地区遺構検出
310　SK18

第 76 図　出土石器実測図（2）



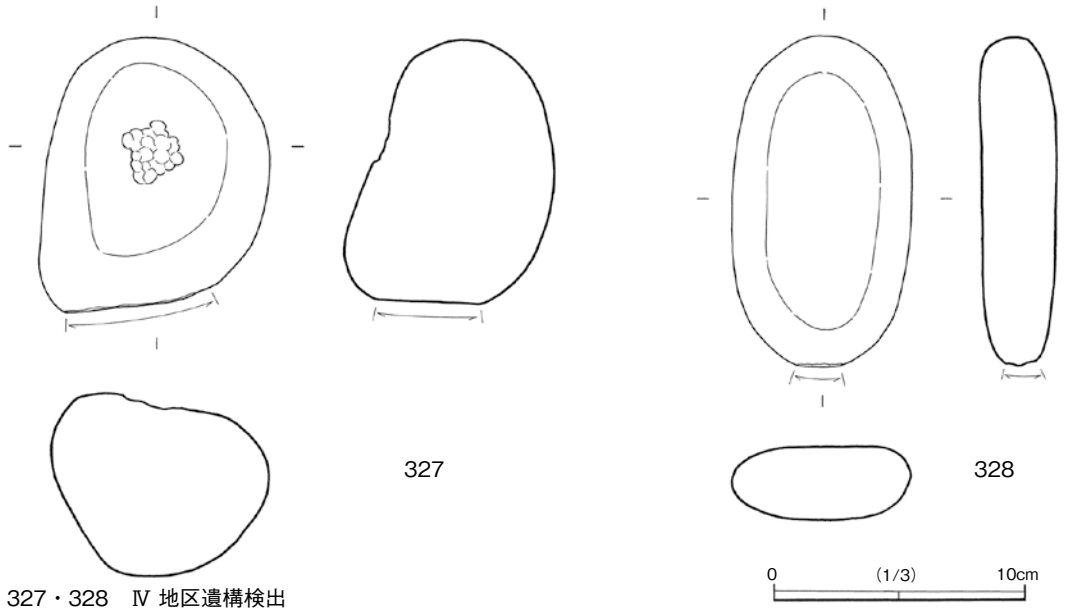
312　SK28
313　SK66
314・315・319・320　Ⅳ地区遺構検出
316　Ⅴ-1 地区遺構検出
317　Ⅴ-2 地区遺構検出
318　SB6

第 77 図　出土石器実測図（3）



321～326　Ⅳ地区遺構検出

第 78 図　出土石器実測図（4）



327・328　Ⅳ 地区遺構検出

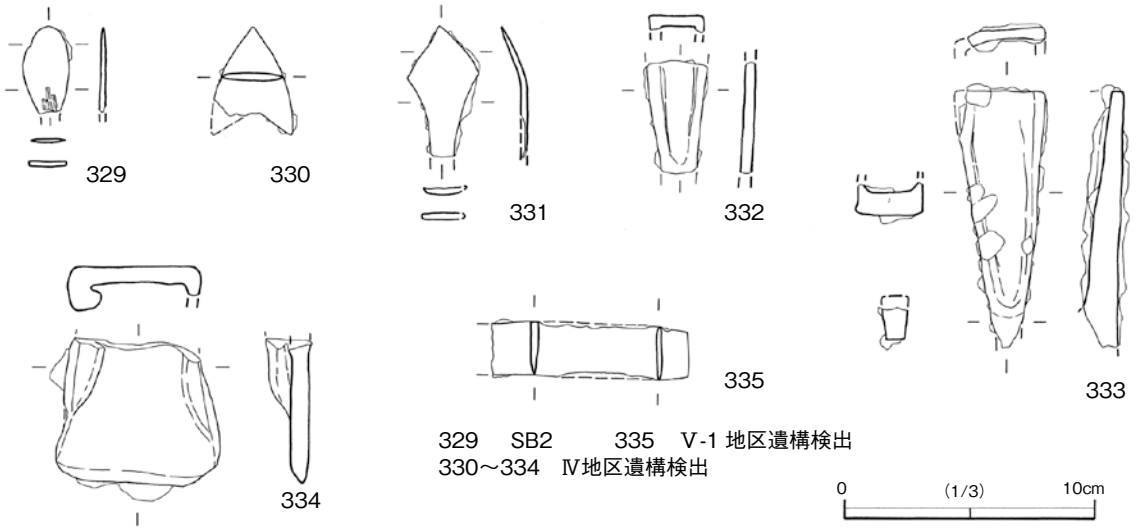
第 79 図　出土石器実測図（5）

と伸びる。残存長10.8cm、基部幅3.2cm。石材は泥岩。

306～311は砥石である。306～308は小型で、いずれも石材は泥岩。306は長さ7.7cm、幅2.9cm、重さ58.6ｇ、307は長さ7.5cm、幅2.35cm、重さ26.9ｇ。306は小口の片面を残して全面を使用している。308は細い筋状の使用痕が数条みられる。309、311は凝灰岩製。310の石材は花崗岩。使用面の両面に幅３mm程度の溝状の使用痕がみられる。310はＳＫ18出土。

312～317は磨製石斧である。312～314、316は蛤刃石斧で、石材は312が玢岩、313、316が砂岩、314が礫岩。312は敲石に転用されている。314、316はほぼ完形で、重量は314が490ｇ、316が470ｇ。312はＳＫ28、313はＳＫ66から出土した。315、317は両刃の扁平石斧。317はほぼ完形で、重量は180ｇ。石材は315が泥質片岩、317が砂岩である。

318～328は敲石である。319、327等の側面には磨石として使用された痕跡も認められる。石材は318、325、326が砂岩、319～322、324が花崗岩、323が泥質片岩、327が石英片岩、328が玢岩。重量は小型の318が140ｇ、ほかは460～1340ｇである。



329　SB2　　335　Ⅴ-1 地区遺構検出
330～334　Ⅳ地区遺構検出

第 80 図　出土鉄器実測図

（５）鉄器（第80図　図版47）

今回の調査ではⅣ地区から６点、Ｖ－１地区から１点の鉄器が出土した。

329は柳葉形の鉄鏃である。基部は欠損するが、基部付近に木質が付着する。残存長3.5cm、幅1.85cm。329はSB２から出土した。330は三角形凹基式の鉄鏃である。長さ4.3cm。331は平面形は圭頭斧箭式の鉄鏃にみえるが、最大幅に近い部分で屈曲する。残存長5.2cm、幅2.8cm。

332、333は鋳造品と考えられる鉄器である。平面形はほぼ同形であるが、333の方が厚みをもつ。いずれも刃部は欠損する。332は残存長4.3cm、残存幅2.4cm、重さ18.1ｇ、333は残存長10.15cm、残存幅3.3cm、重さ110ｇ。333とほぼ同形の鉄器の類例としては、防府市井上山遺跡Ｂ地区９号住居址[5]と鳥取市青谷上寺地遺跡７区[8]から出土した鉄鑿が挙げられる。いずれも時期は中期後葉である。井上山遺跡出土の鉄鑿は朝鮮半島の咸鏡北道茂山虎谷洞遺跡、中国遼寧省撫順蓮花堡遺跡、大連高麗寨遺跡、敖漢旗老虎山遺跡などに類例が認められ、舶載の鋳造品の可能性が指摘されている[5]。国内における鋳造鉄鑿の出土例としては、ほかに東広島市西本６号遺跡ＳＢ11b床面出土の鋳造鉄鑿が挙げられる[9]。これは刃部が欠損するものの、袋部の遺存状態がよく、大陸出土の鉄鑿とも形態が一致する。一方、青谷上寺地の出土例は鋳造鉄斧の縁辺の再利用品であり、中央部分に製作時の鋳型のずれが観察できる。本来の基部側を研ぎだしているが、刃部を形成するに至っておらず、未製品といえる。弥生時代の鉄器には破砕した鋳造鉄器の再利用品が多く含まれるといわれており[6]、山口県内出土の鉄斧、鉄鑿等についても鋳造鉄器の再利用が指摘されている[7]。今回出土した332、333については、現段階では鋳造鉄斧にみられる鋳型のずれや突帯は確認できない。一方、井上山例が鉄鑿である根拠として刃部付近の断面形が方形で幅広であることが指摘されているが[6]、333の刃部付近の断面形はこれに比べるとやや貧弱である。332、333が当初から鉄鑿として製作されたものか、あるいは鋳造鉄器の再利用品であるかについては、今後さらに検討を要する。

334は袋状鉄斧である。基部を欠損しており、その小口面に叩いた痕跡がみられる。残存長5.7cm 、刃部幅6.2cm、重量115ｇ。

335は刀子の柄部から身部にかけての部分と考えられる。残存長7.8cm、刃部幅2.1cm。335はＶ－１地区遺構検出時に出土した。

〈引用・参考文献〉

(1) 東潮『古代東アジアの鉄と倭』溪水社　1999年

(2) 川越哲志『弥生時代の鉄器文化』雄山閣　1993年

(3) 川越哲志『弥生時代鉄器総覧（東アジア出土鉄器地名表Ⅱ）』2000年

(4) 千賀久・村上恭通編『考古学大観　第７巻　弥生・古墳時代　鉄･金銅製品』小学館　2003年

(5) 乗安和二三「鉄器」『井上山』井上山遺跡発掘調査団　1979年

(6) 村上恭通「吉野ヶ里遺跡における弥生時代の鉄製品」『吉野ヶ里』佐賀県教育庁文化財課　1992年

(7) 村田裕一「山口県における鉄器流入の諸段階」『考古学ジャーナル』No.467　ニュー・サイエンス社　2000年

(8) 財団法人鳥取県教育文化財団　鳥取県埋蔵文化財センター『青谷上寺地遺跡４』2002年

(9) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『西本６号遺跡』1997年

Ⅳ　まとめ

今年度の調査成果から、弥生時代、古代以降について、それぞれの遺構遺物の特徴や集落の構造、性格について述べて、まとめとしたい。

１　弥生時代

Ⅳ・Ⅴ地区は標高約80ｍ（比高約40ｍ）を頂点とする丘陵頂上部および斜面に営まれた高地性集落である。集落の時期は、出土した弥生土器から中期と終末期の２時期に分けることができ、ほとんどの遺構は中期に属する。土器の特徴から中期はさらに中期前半から中頃と、中期後半から末までの時期に分けられる。中期前半から中頃には、内折口縁や貝殻施文による文様を持つ壺、口縁端部の刻み目のある甕、口縁外面を肥厚させる鉢など、前期末から中期初頭に特徴を持つ土器も含まれ、古い要素が残る。また中期後半から末の典型的な在地系の垂下口縁壺、くの字口縁甕、須玖系の鋤先口縁壺、跳ね上げ口縁甕も出土するが、前者に比べると量的には少ない。終末期はＳＫ43出土の土器が該当する。器形や、ハケメ調整が主体であることから、平生町吹越遺跡出土土器に併行する時期であろう。今回の調査では終末期の遺構はこれのみであったが、調査区外に展開する可能性がある。これらから集落は弥生時代中期と終末期の２時期に形成されたと考える。

集落の範囲は、西斜面が急峻であることから、馬の背状の狭い頂上部から東側斜面に展開している（Ⅳ地区）。さらに谷を挟んで反対側斜面（Ⅴ地区）でも、同時期の遺構遺物が確認されており、上位の丘陵頂部にも同様の集落が存在することが明らかとなった。

検出された遺構のうち、竪穴住居跡は頂上部東側に３棟、中央部から南側に３棟、斜面に４棟確認された。このうち東側の３棟（ＳＢ２・３・５）は１つのグループと捉えることができ、集落を構成する単位集団の一つとみられる。

段状遺構は斜面を段カットして平坦面をつくり出し、長さは6.6～35ｍ、平坦面は0.9～4.5ｍと規模に差がある。Ⅳ地区西側斜面の段状遺構は平坦面が狭く、さらに土坑が付設されることから、土坑の掘り込みや利用の際の通路としての機能があったとみられる。これに対して５号段状遺構は、ＳＢ10や土坑群が配置されており、遺構構築のための必要な広さを確保するとともに、生活空間としても利用されたとみられる。なおＳＢ６・７周辺やトレンチ土層観察によれば、これら段状遺構の掘削土は斜面下位に集積・整地され、そこに新たな平坦面を形成した可能性がある。

土坑は壁面がオーバーハングする、底面に支柱の柱穴を持つ、埋土途中に貼り床をし再利用するなど、貯蔵用土坑の特徴を有するものが多い。これらの土坑は頂上部平坦面から斜面、谷部と、ほぼ調査区全体に検出された。これらは重複するものが少なく、埋土が単層で埋め戻しを行ったとみられる例もあることから、集落内で計画的に廃棄・構築が行われたことがうかがえる。さらに土坑の掘削や利用に不便と思われる急斜面や谷部にも範囲が広がることは、集落が継続して営なまれたことを示し、存続時期の長さを物語るものかもしれない。

なお今回の調査では15基の土坑から炭化種子、炭化米が出土した。このうちSK10、88、89、99からはまとまった出土量があったことから、（株）吉田生物研究所に依頼して種実同定を実施した。その結果が、第２、３表および図版48である（いずれも（株）吉田生物研究所が作成、撮影）。ＳＫ10、

88、89ではカシ・シイのドングリ類がほとんどを占めるのに対し、ＳＫ99は炭化米のみであるのが特徴的である。この他の土坑でも、数点から数十点の炭化種子が出土したが、そのほとんどはカシ・シイのドングリ類とみられる。堅果類は、高地性集落という性格上非常用食料とみられるが、今回のようにまとまった出土量からすると、主食であるコメを補完するものとして積極的に採取されていた可能性もあり、弥生時代の食糧事情の一端を示す資料といえる。炭化種子出土土坑の内、ＳＫ89では壁面に被熱の痕跡が認められた。弥生時代中期初頭の美祢市下村遺跡（2007）でも同様の報告例があり、種子やコメの焼却処分や虫害対策による燻しの痕跡の可能性を示唆している。ＳＫ89では、廃棄された炭化種子の層下には灰の単純層も確認されており、土坑内における火の使用は、炭化種子・炭化米との関連性が高いと考えられる。

貯蔵用土坑と竪穴住居との配置をみてみると、位置関係や地形的なまとまりから判断して、５つのグループが指摘できる。すなわち①ＳＢ２、３、５と頂上部東側一帯の土坑33基、②ＳＢ４と頂上部中央および３号段状遺構の土坑17基、③ＳＢ１と頂上部西側および５号段状遺構の南半にあたる12基、④谷部の13基に対しては、その範囲が最も近く、全体が見渡せるＳＢ10、⑤西側斜面の10基とＳＢ６・７の５グループである。なお、４号段状遺構の土坑群は、明確なグループ分けが難しいと考え、これらには含めていない。以上のグループからすると竪穴住居跡１棟あたり、10～15基の土坑が割り当てられることになる。これは家族単位として1軒の竪穴住居跡が保有する数としては多いことから、集落全体で土坑の設置、管理、保守を行い、その役割を各戸で担った結果であると考える。貯蔵用土坑は食料保管に関わる施設として機能していたのは明らかであり、土坑の設置、管理、保守を行うことは、集落が存続するための最も重要な要因の一つとみられる。検出された多数の土坑は、当集落の性格を

第２表　検出した炭化物と炭化の状態

種　類	出　土　状　態	図版 48
ドングリ類	ほとんどが子葉の状態。まれに完形品がある。果皮の破片が同時に出土しており、本来は果実の状態であったとみられる。大きさと形状、果皮からシイ・カシ類がある。極僅かではあるが検出された殻斗はアカガシ亜属（カシ類）の特徴である輪状を示す	1 a、b
ムクロジ	炭化した状態	2
不明木本果実	炭化した状態	3
イネ	籾殻つきで炭化した状態と、炭化米がある	4 a、b、c
マメ	形状からダイズ、アズキ類似種を含む数種類がみられる。煮膨れで炭化し、変形したものがある	5
アサ	炭化した状態	6 a
不明種子	炭化した状態。カキの種子に類似	6 b

第３表　遺構ごとの炭化物と出土量

分類群名	種　類	学　名	部　位	遺構名			
				SK10	SK88	SK89	SK99
アカガシ亜属	木本	*Quercus* subgen. *Cylobalanopsis*	殻斗片		微量		
			果皮破片		30		
			子葉	2250	6500	3900	
シイ属	木本	*Castanopsis*	子葉	30	120	100	
ムクロジ	木本	*Sapindus Mukorossi* Gaertn.	種子		5		
不明果実	木本		果実		5	10	
木片	木本			30	300	300	
イネ	草本	*Oryza sativa L.*	果実		10	80	200
			頴付果実		50	40	
マメ類	草本	*Leguminosae*	種子		10	30	
アサ	草本	*Cannabis sativa L.*	種子		5		
不明種子	草本	Unknown	種子		10		
微細片					500		
合　計				2310	7545	4460	200

（数値は大まかな分類をもとにしたものである。単位は ml）

※ＳＫ 99 出土の炭化米は総量で 7.2 リットルあり、そのうちの 0.2 リットルについて種実同定を行う

考える大きなポイントであり、そこからは貯蔵用施設の管理という一面が捉えられよう。

最後にⅣ・Ⅴ地区と隣接する真尾猪の山遺跡Ⅰ地区、井ノ山遺跡との関係をみてみたい。真尾猪の山遺跡Ⅰ地区（中期後半）、井ノ山遺跡（前期末～中期）は、Ⅳ・Ⅴ地区より30～40ｍ低い丘陵地上にあり、150～300ｍの距離にある隣接した遺跡である。これらは立地の高低差はあれ、時期的にほぼ重複しており、佐波川の中流域左岸という地形的に大きな範囲でみるなら、一連の集落と捉えることができるであろう。さらに３遺跡がいずれも金属器を保有していることからも、当地域の中心的集落であることを示している。ではこのような広範囲なまとまりの中における、集落立地の違いについて考えてみたい。井ノ山、Ⅰ地区は、予想される水田可耕地に近いながらも不安定な地質のためか貯蔵用土坑は認められないが、Ⅳ・Ⅴ地区は高地で狭い面積の中に多くの土坑が計画的に配置されている。これらから両者の違いの一つに、貯蔵用土坑が指摘できる。貯蔵用土坑は、食料や種籾の備蓄、保管といった重要な役割があり、集落にとって必須の施設である。この設置には安定した地盤が求められ、数が増加していけば、必然的に集中的な管理と、防御の必要性が高まってくる。このような視点からみると、集落規模の拡大に伴い、適地としてⅣ・Ⅴ地区の丘陵が選ばれ、集落が営まれたと考えることができるであろう。また金属器を保有していたことから、防府平野の井上山遺跡など瀬戸内沿いの拠点集落とネットワークを持っていたことも想定され、他地域の社会状況の影響を十分に受けていたことも考えられる。Ⅳ地区は佐波川上流から中流域、そして防府平野にかけての一帯を一望できる良好の地にあることから、集落における食料保管、それに伴う防御と周辺の監視という内的要因と、さらには対外的緊張関係という外的要因といったさまざまな状況により、当地に高地性集落が営まれたと考える。今回の調査は、高地性集落の成立を考えるうえで良好な資料といえよう。

２　古代以降

９世紀後半から10世紀後半にかけて、頂上部中央から東側で、住居跡や焼土跡などの遺構や須恵器・土師器の遺物が確認された。このうち９世紀後半の遺構では、弥生時代遺構面を整地して、住居内外における火の使用を示す焼土跡が特徴的である。また10世紀後半では頂上部を段カットして平坦面をつくり柵跡などからなる生活面を構築している。当該期において丘陵上に一般集落が形成されることは稀であることから、特別な性格を有した遺構であると指摘できる。松尾山から派生する周辺山麓には、平安期から室町期に天皇院光明寺があったとされ、十数の坊からなる大規模な寺院跡があったとされる。位置や規模等具体的な内容については明らかでないが、18年度調査でも同時期の遺物が散見されることから、今回の平安時代の遺構遺物についても関連性を考える必要があると思われる。今後周辺調査が進めばその全体像が明らかになると考える。

また、丘陵頂上部に位置する経塚は、主体部の構造が簡易で、土師質の土製経筒を用いることが特徴的である。土師質経筒は形状が類似する下松市中宮経塚（時期不明）から判断すると、銅製経筒を模倣した印籠蓋式の円筒経筒となる可能性がある。これに加え、簡略化された主体部構造や、埋納遺物がみられないこと、経塚に伴うとみられる土師器皿の形状から考えて、ここでは経塚の時期を平安時代末から鎌倉時代にかけてと考えておきたい。経塚が寺院や神社地域の高所に営まれることが一般的であることからも、先に述べた天皇院光明寺との関連性が指摘できよう。

図　版

遺跡遠景（南から）

図版　２　　空中写真

遺跡遠景（南東から）

調査区全景（東から）

Ⅳ地区（東から）

Ⅳ地区南半（東から）

Ⅳ地区中央部（南東から）

Ⅳ地区北半（南東から）

Ⅴ－１地区全景（西から）

Ⅴ－２地区全景（西から）

ＳＢ２完掘状況（北から）

ＳＢ３完掘状況（北東から）

ＳＢ４炭化材出土状況（東から）

ＳＢ４完掘状況（東から）

ＳＢ 10 完掘状況（南西から）

ＳＢ９完掘状況（南東から）

ＳＢ１完掘状況（西から）

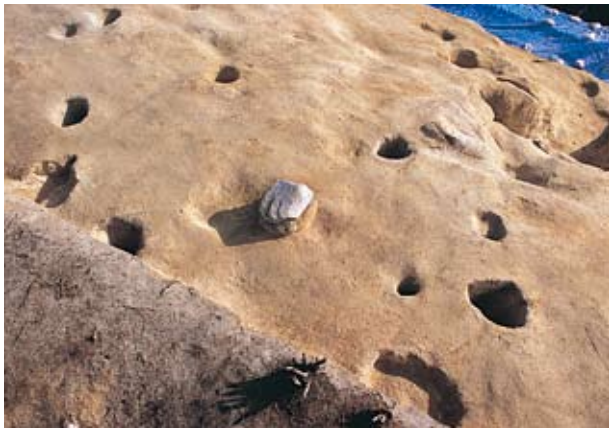
ＳＢ５完掘状況（南東から）

ＳＢ 11 完掘状況（南東から）

ＳＢ６・７、ＳＸ 118 完掘状況（南東から）

ＳＢ６・７、ＳＸ 118 完掘状況（南西から）

ＳＢ７出土土器（西から）

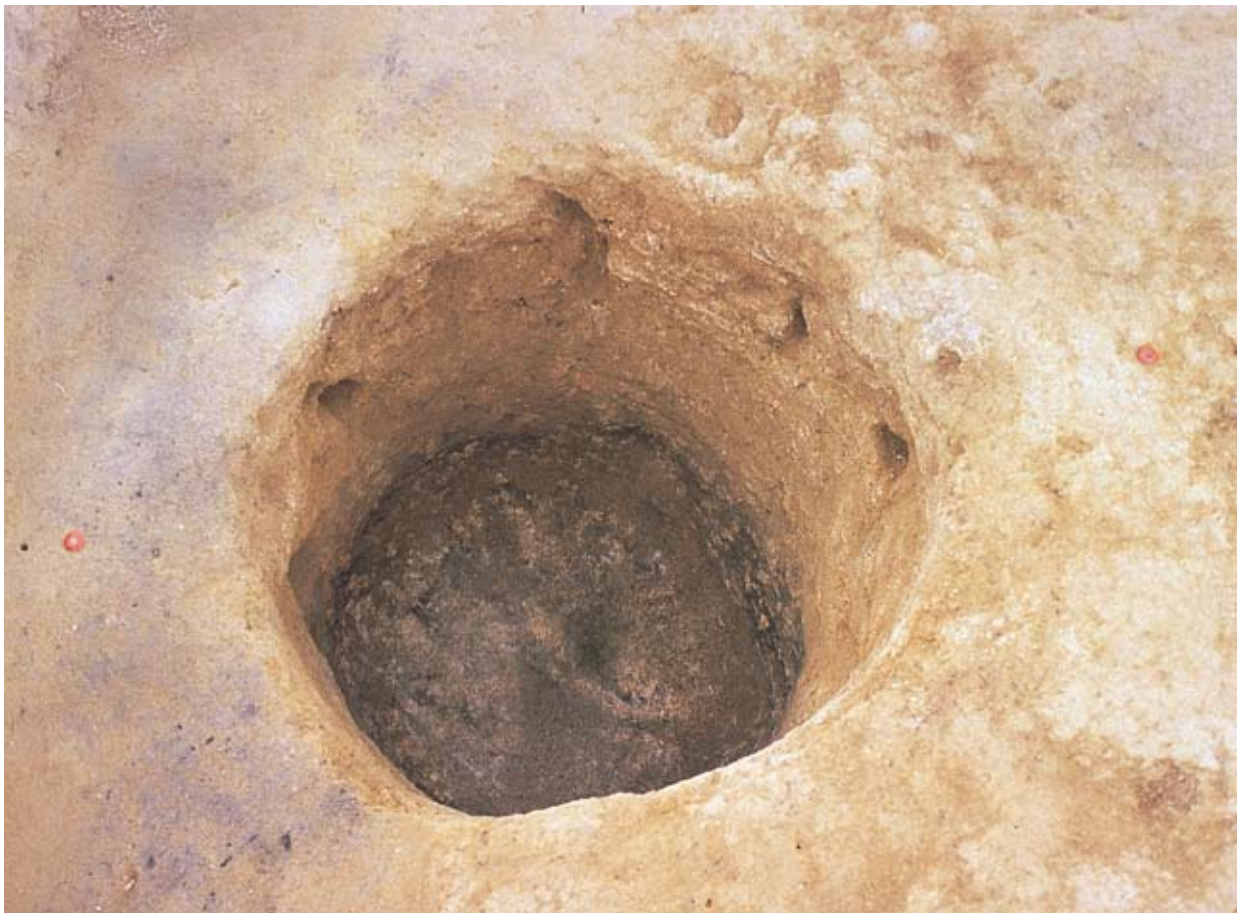


ＳＢ８完掘状況（西から）

ＳＢ８出土土器（南から）

ＳＫ 51 完掘状況（東から）

ＳＫ 33 土器出土状況（南西から）



ＳＫ 89 完掘状況（北東から）

ＳＫ 89 土器出土状況（北東から）

ＳＫ 89 壁面（北東から）

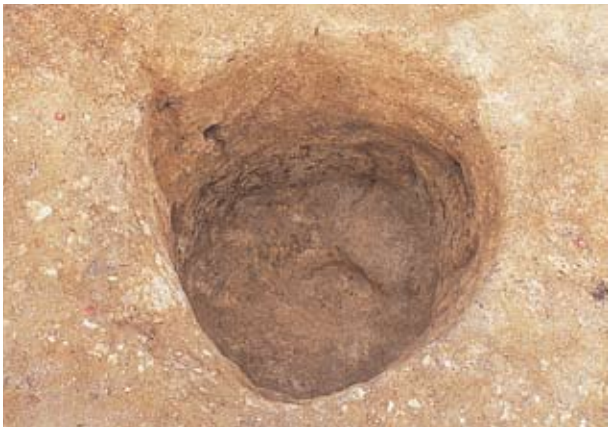
ＳＫ 10 完掘状況（南から）

ＳＫ 10 炭化種子出土状況（南から）

ＳＫ 99 完掘状況（北東から）

ＳＫ 99 土層断面（北東から）

ＳＫ 99 炭化米出土状況（西から）



ＳＫ 88 完掘状況（西から）

ＳＫ 88 土器・炭化種子出土状況（西から）

ＳＫ 93 土器出土状況（南から）

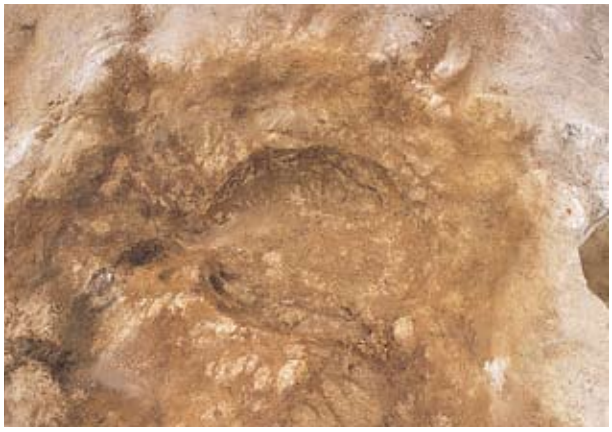
ＳＫ 101 完掘状況（北西から）

ＳＫ 105 土器出土状況（北東から）

ＳＫ 81・82 完掘状況（北東から）

ＳＫ 19 完掘状況（南から）

ＳＫ 98 完掘状況（南東から）



ＳＫ 74 完掘状況（南東から）

ＳＫ 100 完掘状況（南から）

ＳＫ 20 完掘状況（南西から）

ＳＫ 86 土器出土状況（南東から）

ＳＫ 92 完掘状況（南から）

ＳＫ 24・25 完掘状況（北から）

ＳＫ 11・18 完掘状況（南から）

ＳＫ 28 土器出土状況（東から）

ＳＫ 12・26 完掘状況（東から）

ＳＫ 21・52 土器出土状況（西から）

ＳＫ 40 土器出土状況（南西から）

ＳＫ 22 完掘状況（南西から）

ＳＫ 1 土器出土状況（南から）

ＳＫ 33 完掘状況（北東から）

ＳＫ 23 完掘状況（南東から）

ＳＫ 112 土器出土状況（北東から）

ＳＫ 83 完掘状況（東から）

ＳＫ 56 完掘状況（南西から）

ＳＫ 62 完掘状況（南西から）

ＳＫ２土器出土状況（南東から）

ＳＫ 67 完掘状況（南から）

ＳＫ３土器出土状況（南東から）

ＳＫ 84・85 完掘状況（南東から）

ＳＫ 77 完掘状況（東から）

ＳＫ 87 完掘状況（東から）

ＳＫ 43 完掘状況（南西から）

ＳＫ４土器出土状況（北西から）

ＳＫ57完掘状況（北東から）

ＳＫ42完掘状況（西から）

ＳＫ41完掘状況（南東から）

ＳＫ66完掘状況（南東から）

ＳＫ95完掘状況（南東から）

ＳＫ103完掘状況（北西から）

ＳＫ97完掘状況（北西から）

ＳＫ 96 完掘状況（北東から）

ＳＫ 64 土器出土状況（北西から）

ＳＫ 115 完掘状況（西から）

ＳＫ 8・16 完掘状況（南東から）

ＳＫ 9 完掘状況（南東から）

ＳＫ 110 完掘状況（北から）

ＳＫ 111 完掘状況（北から）

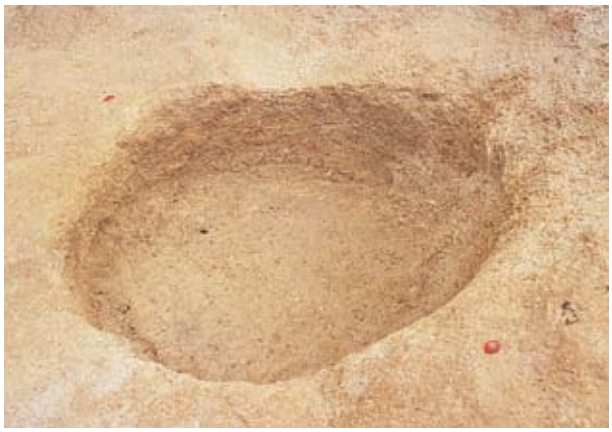
ＳＫ 116 土器出土状況（南東から）

ＳＫ５完掘状況（南西から）

ＳＫ69完掘状況（南から）

ＳＫ59土器出土状況（東から）

ＳＫ48土器出土状況（南から）



ＳＫ50完掘状況（北東から）

ＳＫ53完掘状況（東から）

ＳＫ70土器出土状況（東から）

ＳＫ75完掘状況（北から）

ＳＫ 15 完掘状況（南から）

ＳＫ 61 完掘状況（南西から）

ＳＫ 79 完掘状況（北東から）

ＳＫ 80 完掘状況（南東から）

ＳＤ１・ＳＫ 36 完掘状況（南から）

ＳＤ２完掘状況（南から）

ＳＤ３・４・５完掘状況（東から）

ＳＤ６完掘状況（北東から）

階段状遺構　完掘状況（北東から）

階段状遺構　完掘状況（南から）

ＳＢ 11 西側階段状遺構　完掘状況（東から）

ＳＸ 31 完掘状況（東から）

ＳＸ 117 完掘状況（北東から）

ＳＸ６・７土器出土状況（北東から）

ＳＸ７土器出土状況（東から）

ＳＸ６完掘状況（北東から）

ＳＫ119 完掘状況（東から）

かまど跡（南から）

ＳＰ 36 内焼土（北から）

焼土跡１（南から）

焼土跡２（東から）

7～12号段状遺構（北東から）

5号段状遺構（北東から）

１・２・６号段状遺構（南西から）

ＳＢ２・３、ＳＤ６周辺（東から）

1号段状遺構（北東から）

4・5号段状遺構（南西から）

5号段状遺構（東から）

8号段状遺構（南西から）

7号段状遺構（北東から）

12号段状遺構（北東から）

10号段状遺構（北東から）

10号段状遺構土器出土状況（西から）

経塚検出状況②（南東から）

経塚検出状況①（南から）

経塚検出状況③（南東から）

ＳＰ１検出状況（北から）

土師器出土状況（南東から）

Ｖ－１地区（西から）

Ｖ－２地区（北西から）

１号段状遺構（北から）

２号段状遺構（南東から）

３号段状遺構（北西から）

４号段状遺構（北西から）

ＳＫ１完掘状況（西から）

ＳＫ２完掘状況（南西から）

ＳＫ３遺物出土状況（東から）

ＳＫ４完掘状況（南から）

ＳＫ５土器出土状況（北西から）

ＳＫ６土器出土状況（北西から）

ＳＫ６土層断面（北西から）

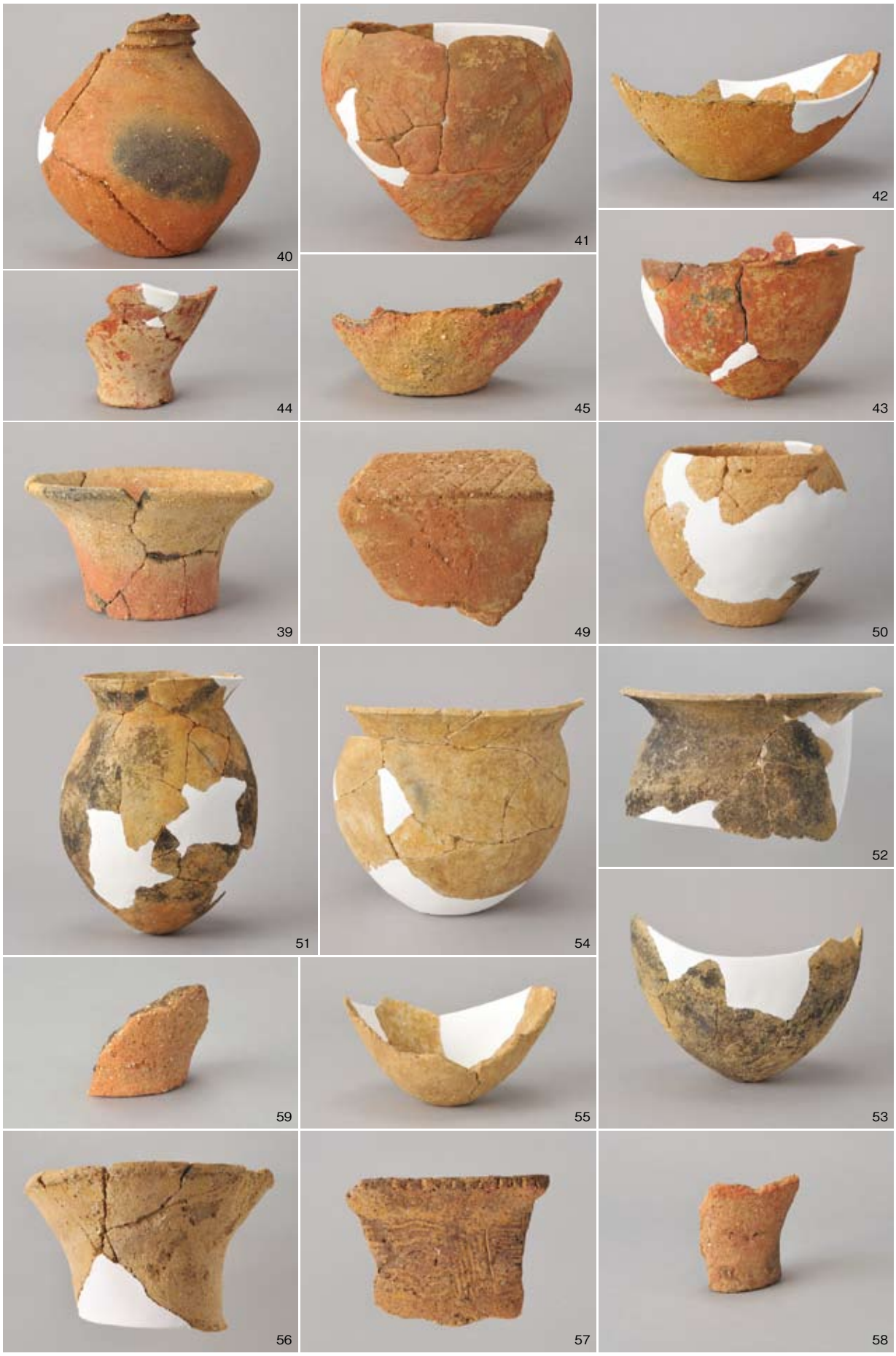
ＳＫ６土器出土状況（南東から）

ＳＫ７完掘状況（南西から）

ＳＫ８完掘状況（西から）

出土土器①

出土土器②



出土土器③

出土土器④

出土土器⑤

93
96
98
100
97
94
99
102
101
95
103
104
108
107
106
105
109
111
110

出土土器⑥

112
113
115
117
118
114
121
116
122
119
123
120
127
128
135
134
136
133

出土土器⑦

131
130
137
139
144
129
132
145
146
138
141
143
140
142
147
148
149

出土土器⑧

152
151
150
153
154
158
156
155
157
159
161
162
160
163
164
179
180
165

出土土器⑨

出土土器⑩

183
184
188
185
186
187
189
192
193
191
190
194
197
199
198
196
195
200

出土土器⑪

201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219

出土土器⑫

220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236

出土土器⑬

237
238
239
240
241
244
242
243
245
251
246
247
253
248
250
254
249
252

出土土器⑭

出土土器⑮

269

270

271

273

272

274

275

276

出土土器⑯・土製品

277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
306
303
304
308
307
309
310
311
305

出土石器①

出土石器②

324

325

326

327

328

329

330

331

332

333

334

335

出土石器③・鉄器

写真１ａ　堅果類各種（左4列：カシ類、右2列：シイ類）

写真１ｂ　殻斗（アカガシ亜属）

写真２　ムクロジ

写真３　炭化した種不明木本果実

写真４ａ　左:炭化米、右：穎の融着状態

写真４ｂ　炭化米

写真４ｃ　穎の融着状態

写真５　マメ類各種
（上段：ダイズ類似、下段:アズキ類似）

写真６ａ　アサ

写真６ｂ　不明種子

炭化種子・炭化米

報　告　書　抄　録

ふりがな	まなおいのやまいせきⅡ
書名	真尾猪の山遺跡Ⅱ
副書名	
巻次	
シリーズ名	山口県埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第64集
編集著者名	谷口哲一　吉中雅信　川本　晃　岩田謙治　山本寛子
編集機関	山口県埋蔵文化財センター
所在地	〒753-0073 山口県山口市春日町3番22号 TEL083-923-1060
発行年月日	西暦2008年3月27日（平成20年3月27日）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °　′　″	東経 °　′　″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
真尾猪の山遺跡 （まなおいのやまいせき）	山口県防府市大字真尾 （やまぐちけんほうふし おおあざまなお）	35206		34°10′94″	131°60′69″	20070608 ～ 20071227	4,000	農道整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
真尾猪の山遺跡 （Ⅳ・Ⅴ地区）	集落跡	弥生 古代	竪穴住居跡　11棟 土坑　121基 溝状遺構　6条 段状遺構　18基 階段状遺構　1基 性格不明遺構　5基 経塚　1基 かまど跡　1基 焼土跡　2基 柱穴　755個	弥生土器 土師器 須恵器 土製品 石器 金属製品 炭化種子・炭化米	弥生時代中期・終末期の高地性集落跡 平安時代の遺構遺物 土師質経筒を持つ経塚

要約	佐波川左岸の標高約80ｍ（比高40ｍ）の丘陵上に位置する、弥生時代中期、終末期の高地性集落跡。集落の中心時期は中期で、頂上部および斜面に竪穴住居跡、土坑などが多数確認された。土坑は121基確認され、それらの多くは貯蔵用として機能していた。炭化種子・炭化米がまとまって出土した例もあり、当時の貯蔵方法等を考える資料となる。急傾斜の斜面には、通路および生活空間としての段状遺構が18基あり、限られた範囲の中で生活面確保の跡がうかがえる。出土遺物では、７点の鉄器が出土したことが注目される。18年度調査の成果とあわせて、弥生時代における高地性集落の性格や、当地域における集落の構造や推移を考えるうえで良好な資料である。 古代～中世においては、９～10世紀の遺構遺物が確認され、弥生遺構面を一部整地して構築されている。経塚は、県内でも珍しい土師質経筒であり、簡易な主体部構造とあわせて平安時代末から中世にかけてのものとみられる。この時期における遺構の性格は明らかでないが、遺跡周辺にはかつて松尾山天皇院光明寺（９世紀創建、戦国期に焼失）があったとされ、関連性が指摘される。

山口県埋蔵文化財センター調査報告　第64集

真尾猪の山遺跡Ⅱ

2008年３月

編集・発行　財団法人山口県ひとづくり財団
山口県埋蔵文化財センター
〒753-0073　山口県山口市春日町３番22号

印　　刷　大村印刷株式会社
〒747-0849　山口県防府市西仁井令1-21-55